

英雄電機ヒロイックロボ

スグリ@英雄電機ヒロイックロボ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如人界に現れた闇の侵略者、「魔王」。

破壊の限りを尽くしたその存在が、後に打ち倒されてから幾十年。

未だ消えない機械仕掛けの破壊者ロボット怪獣の脅威に立ち向かう為、ヒロイツクロボが立ち上がる！

これは、「正義」を問う物語。

スーパーヒーローの戦いのエピソードから始まる量産型ロボットヒーローアクション開幕！

小説家になろうで先行公開した後にハーメルン、エブリスタ、ノベルアツププラス、カクヨムで公開します。

挿絵はハーメルンとエブリスタ、ノベルアツププラスのみになります。ご了承ください。

目次

1 第一話 エピローグから始まる物語

第二話 閃光の騎士 35

第三話 黒のヒーロー 68

第四話 燃える中東 95

第五話 紅の砲鬼 124

第六話 久遠の夢 149

第七話 究極の力 175

第八話 そしてここから 212

第九話 激突！E X FアルガンVSファ

ルブラック 237

第十話 出発点 266

第十一話 復活、そして決戦へ 300

第十二話 小さな正義 328

最終話 英雄伝記 357

第一話 エピローグから始まる物語

日本国首都、東京直上。

「はあああつ！」

「うおおお！」

夜空の下。ある者は不安げに、ある者は希望に満ちた目で人々が見上げる空の片隅で、今二つの影が激突していた。

「貴様は何故、それほど力を持ちながら人間如きの為に戦うのだ！」

世界を己が手に収め、全てを恐怖で支配せんとする地獄の王、魔王。

「人々を……この蒼く美しい星を愛しているからだッ！」

人類と地球を愛し、正義と平和の為に身を投げ出して戦う正義の味方。

善と悪。

光と闇。

全てにおいて対極に位置する二つの存在の最後の決戦が今、ここで繰り広げられていたのだ。

「愛だど!? そんなくだらぬ物の為に！」

「それをくだらないと呼ぶ貴様に勝機などない！」

「知ったような口を利く！」

輝く光線。

風を切る拳。

人々が固唾を呑んで見守る中、激しくぶつかり合う両雄。

人類の命運をかけた、人智を超えた互角の戦いに今決着がつかうとしていた。

「これで終わりだ、魔王ッ！」

魔王が怯んだ一瞬の間隙を突いて、必殺の構えを取るヒーロー。そして……

「アルティメットビィイムッ!!」

閃光が、空を埋め尽くした。

魔王が倒れてから幾十年。

戦いは終わってヒーローはこの星を去り、人々は再び安寧の時を迎えるかに見えた。

だが、魔王が倒れたとてその遺産が消えたわけではない。

かつての魔王軍が作り出した巨大兵器、ロボット怪獣が今度は人……犯罪組織によつ

て製造、売買されて紛争、テロ、犯罪などに投入されていた。

未だ消えない悪のロボット怪獣の脅威に対し、人々は防衛組織ガーディアンを結成。怪獣の圧倒的な力に対抗すべく、人の手で造られた新たなる巨大ロボットヒーロー、ヒロイツクロボが開発された。

こうして人々は、ガーディアンとヒロイツクロボによって維持される表面上は平和な日々を送り続けていた。

車のタイヤが地面を切りつける音。

ゴミを漁りにやってきたカラスたちの群れの鳴き声。

コンクリートとアスファルトで囲まれて、所々に緑が散りばめられた見るべき所もないありきたりな街並み。

何一つ変わったところのない、平穏な街を歩く制服姿の高校生の少年が一人。

「そつちいくよー!」

「はーい! パスパース!」

学校で部活に励む少女たち。

「くらえ! ラスターソード!」

「やったな！ ならこっちはラスタービーム！」

公園でヒーローごっこに興じる子供たち。

それらを一瞥しながら少年は変わり映えのない帰路を歩き続ける。

「いらつしやいませー」

道中、コンビニに寄って100円のお茶を手に取りレジの店員に手渡す。

「あ、あと肉まん一つ」

「220円になります」

そして小銭を出しレジ袋を受け取ると、店員に背を向けてコンビニを後にした。

「ありがとうございます」

肉まんの包を開け、半分に割ると一気に湯気が立ち上がる。

手に伝わる温かさを感じながら、少年は肉まんを頬張り小腹を満たすと紙の包みを捨

ててポトルのお茶を飲みながら再び歩き出した。

「よう、ソウタ。帰りか？」

そんな彼に、後ろから背丈の高い少年が駆け寄って話し掛けた。

「カズマか。うん、今から帰るところ」

「じゃあ一緒に帰ろうぜ。途中まで一緒だろ？」

「わかった」

少年、ソウタはそうして友人のカズマと合流すると再び街の喧騒の中を歩き出す。

そして駅前。定期券で改札を通り抜けると二人はベンチに腰掛け、カズマはスマートフォンを触り始めた。

「何調べてんの？」

「怪獣の出現情報。そういうまとめサイトがあるんだよ」

彼が調べているのは災害のように報道されるこの世界の日常の中に潜む非日常、怪獣の情報。

魔王が打ち倒された今尚、こうした脅威が人々を脅かしているのだ。

「好きだなあ」

「だってさ、かっけえだろ？ ヒロイツクロボー」

だがそれに対して立ち向かう者たちもまた存在している。それ故に、この世界は一応の平和は保たれているのだ。

『二番線に、到着の電車は……』

「来たよ」

「おっと」

話しているうちに待っていた電車がやって来る。

二人はそれに乗り返むと、話の続きを始めた。

「でき、話あんだけど……」

「ん？ 何？」

「ヒロイックロボのショーのチケット、手に入ったから一緒に行かね？」

カズマが手に入れたというのは、怪獣相手にヒーローとして立ち向かう者たちが宣伝の為に開くイベントのチケット。

実際のところかなりの人気で、取ることはなかなか難しいのだがなんとか二枚確保する事ができたようである。

「ゲームでしかよく知らないからなあ、俺」

「十分だつて！ フアルガンの実物が来るつてよ」

「実物か……。悪くないかも」

ソウタの知識はゲームセンターに置かれたゲームくらいのものだが、それでもヒーローとして活躍するロボットの本物が見られると知り行くことを決めた。

「じゃあ決まりな！ 明日、新ヶ^{にいが}浜^{はま}の駅前東側で待ち合わせでいいか？」

「細かい場所は電話してくれ」

「ああ」

「こうして翌日、土曜日の予定が決まった。

『特急との連絡待ちです。暫くお待ちください』

「で、お前はどの機体が好きなんだ？」

「えーつと……」

そして電車が止まっている間、彼らはまた別の話に花を咲かせる。

いくつかの種類があるロボットのうちどれが好きかという他愛のない話題。

「やっぱソードかなあ。よく使うし」

「ソードのエース機？ それとも量産機？ エースもいいけどやっぱソードのカラーリングは量産機だよな！」

色合いの違いなど興味のない人間からすれば大したことの無いことに思えるが、好きならばそんな事でも盛り上がれるのだ。

『間もなく三番線の各駅停車が発車します。閉まるドアにご注意ください』
そうこう話しているうちに、ようやく電車のドアが閉じて再び走り出す。

「ごめん、そこまでは語れない」

「おま、それでも男かよー！」

「そこまで言うか！」

ちなみにソウタには色の違いまで語れるほどの知識はなかった。

『間もなく……』

「あ、次で降りるわ」

「それじゃまた」

「じゃあな」

そして程なくして着いた駅で、カズマは一足先に電車から降りていった。

「明日か……」

十数分後。

「はあ……」

家に着いたソウタはリビングに入るや否や鞆を床に放つたらかしにしてソファに座り込んだ。

「テレビでも付けるか」

『本日午前11時26分、愛知県名古屋市内に怪獣が出現。ガーディアンが派遣したヒロイックロボ、ファルソードがこれを撃破しました』

「また怪獣か……」

そして何気なくつけたテレビに映ったのは、爆発を背に佇む緑色の差し色と白のヒーロー然とした、しかしミリタリー色も抜けきれない姿の巨大ロボットだった。

これこそが今尚続く怪獣の脅威に立ち向かう正義の巨大ロボット、ヒロイックロボで

ある。

『軽傷者42名、重傷者8名の騒動となりましたが幸い犠牲者は出ておらず、負傷者も命に別状はなし。ガーディアンの迅速な対応に称賛の声が多く出ています』

『怪我人は出たけどよくやったと思うよ？』

『かつこよかつたー！』

街で巨大怪獣が暴れ回って被害はたったの怪我人50人。

怪獣が現れる事に人々がある程度免疫があり冷静に避難しているというのものもあるが、それでもこの程度の被害に抑えられているのはヒロイックロボの活躍あつてのものでろう。

「ヒロイックロボ……」

これまでは何気なくニュースで見て、時々ゲームセンターで遊んでいた程度のヒロイックロボだった。

実物を見に行くというのが明日に控えていると思うと、ソウタもこうしたニュースに興味を抱かずにはいられなかった。

「お兄ちゃん！」

「どうしたんだ、マドカ」

そんな彼に、後ろからかけられる快活な少女の声。

振り向くとそこには、ツーサイドアップの茶髪の可愛らしい少女が。

彼女はマドカ。両親が海外出張の中始めた家事を半ば趣味としている、ソウタの小学生の妹である。

「お買い物行ってくるからお米洗っておいてね！よろしくー！」

「わかったよ。行つてらっしゃい」

時間は夕方。目当てはタイムセールだろう。

友達と遊ぶのは土日で、平日はスーパールのタイムセールに行くのが楽しみだという少し変わった妹を見送ると、ソウタは立ち上がって炊飯釜を取り出した。

「今日はハンバーグだったな。4合でいいか」

そして米を洗って炊飯器に入れて炊飯ボタンを押すと、またソファに座ってテレビに目を向けた。

『怪獣被害の続報です。建物17件が半壊もしくは全壊し、被害総額は……』

先程の怪獣事件の続報がニュースで流れる。人的被害はともかく、物的被害はやはり大きいようだ。

チャンネルを切り替えてみる。

『やっぱ、これめっちゃ美味いやん』

関西弁で食レポをする芸人が映る。グルメバラエティ番組だろうか。

チャンネルを切り替える。

『明日の天気です。東京は晴れのち曇』

天気予報。悪くはない天気だ。

切り替える。

『きらりん！ 魔法少女プリティみるるん参上！』

子供向けの魔法少女アニメの再放送。変身中に裸になる演出は今の夕方作品にはなかなか見られないだろう。

切り替える。

『世間を騒がせたテロ組織の一つ、IESが本日未明壊滅したとの情報が入りました。

現地では未確認の……』

海外でテロ組織がひとつ壊滅などという物騒なニュース。

結局見たい番組は見つからず、チャンネルを怪獣の報道に戻した。

『本日は怪獣専門家の司馬ジロウさんにお越し頂きました』

『よろしくお願ひします』

どうやら丁度怪獣専門のコメンテーターが出てきたところのようだ。一見するとただの中年男性にしか見えない。

『そもそも怪獣とは昔のような生物ではなく純粋に機械で造られた兵器であつて、認識

としては災害ではなくテロが正しいかと……』

そんな彼が解説する怪獣。

実はそれは魔王がいた頃とは異なり全て機械、即ちロボットであり何者かによつて人為的に放たれているのだという。

その為、正式には今世間を騒がせている怪獣はロボット怪獣と呼ぶのだが怪獣でも通じてしまう為あまり普及はしていないのだ。

「お兄ちゃんただいまー」

「ああ。おかえり」

二十分ほどすると買い物を終えたところのマドカが帰ってきた。

両手には袋いっぱい野菜や肉類、調味料など。小学生の少女にはやや重い荷物だが、それでもご満悦の様子である。

「持っていくよ」

「ありがとう！」

そして二人で協力して荷物をキッチンに運ぶと、マドカはついたままのテレビに目を向ける。

「怪獣のニュース？ 名古屋だっけ。怖いねー」

「できれば会いたくはないね」

そんな会話を交わす二人。

怪獣騒ぎなどテレビの中の出来事で、彼らの周りは至って平和だった。少なくとも、今日この日までは。

同日、午後2時40分。

ガーディアン関東・東北支部、大会議室。

「それではこれより、ガーディアンの定例会議を始めます」

ヒロイックロボを運用し、怪獣の脅威に立ち向かうこの防衛組織の首脳陣が一堂に会する会議が、ここで開かれる。

「まずは予算確保の案ですが、ヒロイックロボのファルガン三機、ファルソード二機を米
国に売却する事で、予算は昨年度の1.3倍を確保できる計算になります。如何でし
ょう」

「それは素晴らしいですな」

「無論賛成です」

「ここで前例を作れば後々の各国への輸出もスムーズになる」

「次はヒロイックロボの紛争地帯派遣について……」

しかし議題に出されるのは怪獣対策でも災害の被災地支援などでもなく、資金の為に戦争用の兵器としてヒロイツクロボを軍隊に売るなどというものや、影響力の強い国々の政府に忖度したヒロイツクロボの戦争への派遣など。

いずれも数十年前の勇者に代わる新たなヒーローという存在意義からは遠くかけ離れている事は言うまでもないだろう。

幹部たちは予め示し合わせたかのように賛同し、スムーズに話を進めていくがそんな有様に見かねた一人がここで立ち上がった。

「あなたたちはガーディアンを、ヒロイツクロボを何だと心得ているんだ！ ヒロイツクロボは断じて人と戦う軍用兵器ではないッ!!」

そのように説く彼の名は御法川《みのりかわ》ケンジ。

30代の若手にして関東支部の司令官であり、日本のガーディアン全体の総司令官でもある男だ。

「理想論は聞き飽きましたぞ、総司令官殿」

「そもそも怪獣とて人の作った機械では？」

「ですな。はははは」

しかしそんな彼の言葉を幹部たちは嘲笑するばかりで、耳を貸そうともしない。

人々の平穏を脅かす怪獣に立ち向かう正義の味方であるべきにも拘《かか》わらず、今

やただの軍事組織になり下がろうとしている。

これが、今のガーディアンが直面している現実である。

(やはり今こそ必要だ、救世主が……本物のヒーローが！)

そして御法川は唇を噛み締めながら心の中で待ち望む。

組織のあり方などに囚われない、真のヒーローの誕生を。

翌日、午前10時。

新ヶ浜駅前東口ロータリー。

「お待たせ」

「こっちもデイリークエ終わったとこだ。それじゃ行くか」

時間通りにやってきたソウタは、先に来てベンチでスマホゲームをしていたカズマと合流して目的地へと向かい始める。

「ここからどれくらいだっけ」

「5分くらいだな」

この新ヶ浜は埠頭が近く海に面した場所で、海側である東側には広大な広場や小規模ながら水族館も入った巨大なショッピングモールがあり常に賑わっている地域である。

目的であるショーは、その広場で行われる事になっているのだ。

「ほら、あれだ」

「あれが……ファルガン……」

広場にあつて離れていてもよく見えるのが、深緑の巨大ロボット、ファルガン。HR—X01の型式番号の通り、一番初めに造られたヒロイックロボである。

旧来の軍事技術の影響を特に色濃く受けているこの機体は外観こそ非常にミリタリー感が溢れているが、それでも日々怪獣から人々を守り続けている立派なヒーローなのだ。

「思ったより興味津々なんだな」

「流石に巨大ロボを実物で見ると圧巻だからさ」

遠くからでもよく見える25m近くの巨体というだけあつて膝立ちの姿勢とはいえその迫力は凄まじく、これを見に来た彼ら以外にショッピングに来た道行く人の目も必然的に惹き付けていた。

「すげえよな、アレ。あんなのが三十年前に作られて、まだ現役なんだぜ」

このファルガンが完成してから、今はなんと三十年。

当然今では新型のヒロイックロボも作られて性能面では遅れを取ってこそいるが、ファルガンはそれでも尚使われ続ける高いポテンシャルを秘めた傑作機だ。

「ママ、早く早く!」

「子供、多いな」

「まあヒーローだからな」

目的地である広場に着くと、そこには老若男女問わず溢れんばかりの人、人、人。

その中でも特に親子連れが多く、中には知り合いの子供を預かっているのか一家族にしては大勢の子供を連れた親も見受けられた。

「席、この辺でいいか」

前列席は子供連れ専用になっている為、二人は中間あたりの席を取って座ることにした。

「それにしても凄い人だなあ……」

「アニメや特撮じゃなくてモノホンのヒーローだし、こんなもんだろ」

今でもアニメや特撮のヒーローは存在して人気も高いが、それでもショーとなるとやはり本物の迫力には及ばない。

実物の巨大ロボットと触れ合えるこうしたイベントは、ガーディアン の 宣 伝 であると同時に人々にとっても大きな娯楽となっているのだ。

「みなさん! おはようございます!」

「おはようございます!!」

そしてショーが始まった。

ガーディアンの青い制服を来た女性の挨拶に、子供たちが一斉に返事をし、始まりの合図となる。

「本日はガーディアン主催、ヒロイックロボ公開イベントにお越しいただきありがとうございます！
ございます！ 本日は私たちの持つ正義のマシン、ヒロイックロボを皆様にその手その目で触れていただきたいと思えます！ 早速ファルガン、起動お願いします！」
女性が始まりの句を述べ、そして指示を出す。

直後、膝立ちの姿勢のファルガンの瞳が、全身のライトが一斉に輝き出し、ゆっくりと立ち上がった。

『起動完了！ これが人類初のヒロイックロボ、H R X O ーファルガンだッ！』

そうして大地に立ったファルガンは、口上を告げながらファイティングポーズを取ってその巨体を観客の目に焼き付ける。

「おおー！でけえ！」

「アレどうやって立ってんだ？」

皆ニュースなどでは見た事があるものの、実物の巨大ロボットが目の前で立ち上がったとなると流石に感動を隠せず、驚く者からどうなっているのか疑問に思う者まで反応は人それぞれだが凄まじいインパクトを与えられたのは確かだった。

「まずはこのファルガンの手に乗ってみたいお友達はあるかなー?」

「はいはい!」

「乗ってみたい!」

そして始まったのは、子供たちを掌に乗せる体験会。

子供たちはこぞって我先にと手を挙げ名乗り出る。

「じゃあ一人ずつ行ってみようか! 最初の子はスタッフのお兄さんに命綱を付けてもらってから手の上に乗ってねっ!」

「はい!」

まず一人目の子供が命綱をつけてもらおうと、スタッフに抱き上げられてしゃがんだファルガンの掌の上上がる。

『行くぞ少年!』

「うわあ、すげえ……!」

そしてファルガンはその子供を持ち上げると再び立ち上がり、子供を胸の高さまで持ち上げてみせた。

それから十数分。

殆どの子供たちが既に乗せてもらって、ショーが次の段階に進もうとしていたその時だった。

「おい、なんだアレ」

「ん？どうした？」

人々が一齐にぎわめき出し、皆同じ方向に目を向ける。

ソウタとカズマもつられて目をやると、そこには見慣れない物体がいつの間にか現れていた。

『KAMAGIRAAAAA!!』

緑色をベースにした毒々しいカラーリング。

両手に取り付けられた鈍のようなブレードにカマキリのような姿。

その姿はまさに悪役と形容するのが相応しく、とてもヒーローには見えなかった。

「え、何？ 怪獣？」

「シヨ어의演出かしら」

「戦闘の実演までやってくれんのかよ、すげえな」

しかし人々は未だ落ち着いていた。

何故なら皆この時は思い込んでいたのだ。

現れたのがシヨ어의演出用の怪獣だと。この瞬間までは……。

「ぎゃああああああ！」

突然怪獣の目から光線が放たれる。

怪光線は演出などではなく本物の街を焼き、大爆発を引き起こした。それと同時にあちこちのサイレンが鳴り出し、怪獣の出現を告げる。

「怪獣警報!?! じゃあ、あいつマジモンかよ!」

「そんなんっ!?!」

この瞬間、当たり前の日常は一転して非日常と化した。

『GIRAAAAA!!』

斬撃ロボット怪獣カマガラー。

全高25m、重量700t。

目から怪光線を放ち、警戒な動きと両手のブレードで襲い掛かる、パワーとスピードを兼ね備えた怪獣である。

「イベントは中止です! 皆さん、落ち着いて係員の指示に従って指定の場所に避難してください!」

突然の怪獣の出現でイベントは中止。

広報担当で、戦闘訓練を受けていないパイロットもファルガンから降りて誘導に加わり、観客やショッピング客の一斉避難が始まった。

「なんでこんなことに……」

「ほら、お前も逃げるぞ!」

「あ、ああ」

先に避難した人々に続いてソウタとカズマも席から立ち上がり、避難し始める。

「あいつ、こつちに向かってないかな」

「おいおい冗談だろ!?!」

だが怪獣は海を目指しているのか、広場側へと向かってきている。

このままではいずれ追いつかれてしまうだろう。

「避難場所は?」

「港の地下! 怪獣がタンカーを襲った時の為に作られた防爆シエルターだ!」

「よし、それならきつと……!」

それでも決して遠くはない。目的地の防爆シエルターまで逃げ切れれば助かる見込みは大きく上がるだろう。そんな希望を持ったその時だった。

『KAMAGIRAAAAA!』

「うわあっ!?!」

カマギラーの放つ怪光線が彼らの遙か先を突き刺し、爆発を巻き起こす。

「クソっ……!」

「こんなところまで!」

「怖いよママ!」

怪獣の攻撃に怯える人々。既に怪獣の攻撃の届く場所にいるという恐怖から立ち止まる人も少なくない中、ソウタとカズマは爆発した場所を思い起こす。

「カズマ、あの先つて避難してる人たちの最前列が……」

そう、今の攻撃で爆発したのはシエルターへ向かう進路上。当然そこには大勢の人がいてもおかしくない。

「いや、それならもつと騒ぎになつてははずだ」

「よかつた……」

だが犠牲者が大勢出たにしては、まだ騒ぎは落ち着いている。もし死者が出たのならば、今よりもさらにパニックになつていてもおかしくないだろう。

そうした事からひとまず安心する二人。しかし……。

「避難が止まつた……。まさか!？」

ここまでは順調に避難が進んでいた人の流れが、突然ピタリと止まつてしまう。

「今の攻撃で道が塞がれてしまいました! 申し訳ありませんが避難場所を変更します!」

「嘘だろ!？」

攻撃されたのは恐らく何かの建物だったのでだろうか。この先の道が先の攻撃の影響で、瓦礫で塞がってしまったらしい。これでは避難場所のシエルターに行く事はできな

い。

「このあたりの他の避難場所って……」

「アレの地下しかねえよな……」

残された避難場所は、ショッピングモールの地下三階駐車場。

『KAMAGIRAAAAA!』

一応はシエルターとしての機能も持たされているが、その肝心のショッピングモールは今カマギラーに襲われ破壊されている真っ只中。とてもその地下に避難しようと思える状態ではなかった。

「お母さん、ファルガンは？　ファルガンなら勝てるよね？」

「あのファルガンはお祭り用だから……」

絶望的な状況下で、少年たちは思い起こす。つい先程まで、夢を見せてくれた巨大な深緑のヒーローを。

その機体は戦闘用ではなく、パイロットもイベントスタッフでしかなかった為戦える態勢ではなかったのだが、そんな事など子供たちにとっては知る由もない。

「カズマ。確かあのファルガン、動くよね」

逃げゆく道の中、ソウタは立ち止まって後ろを振り返る。

その視線の先にあるのは、置き去りにされたファルガンだった。

「まさかお前……!!」

「アレで他のヒロイックロボが来るまで時間を稼げないかな」

「バカかお前、あんなのどうにかなるわけねーよ!」

「大丈夫、逃げるだけだよ」

ストレス発散にゲームで多少操作したことがあるだけの素人がいきなり怪獣を相手にするなど無茶なのだろう。

だがカズマも分かっていたのだ。このまま逃げていても、確実に助かるとは言えない状況だということが。

「あーもう、この状況じゃしゃーねーか! 戻るぞ!」

「ごめん、付き合わせて」

「後でなんか奢れよ!」

結局二人は人の流れに逆らい、来た道を引き返すことに。

速く、もつと速くと走る二人の前に見えたのは、倒れた自転車とその近くで蹲るミニスカートを履いたギャル風の少女だった。

「痛つ……怪獣とかマジねーわ……」

「女の子!?!」

恐らく慌てて避難しようとして転んでしまったのだろう。足を怪我したのか、歩けな

いでいるようだった。

「こっちは任せろ！ お前はファルガンに！」

「分かった！」

彼女の事はカズマに任せ、ソウタは一直線にファルガンの元へと向かう。

「ファルガン……動かせるか……？」

そしてその前に立つと、昇降用のワイヤーでコクピットへと上がっていった。

「操作はゲーセンと同じか。逃げるだけなら、やってみせる！」

乗り込んだコクピットのレイアウトはゲームセンターの筐体と同じ。恐らく一般市民から搭乗者が出る事を想定されていたのだろう。

実際の意図はわからないが、今のソウタにとっては好都合だった。

「動け、ファルガンッ！」

『ファルガン、通常モードから戦闘モードに移行します』

シートに座り、切り替えレバーを倒した。

『セーフティシャッター作動、モニター展開。エネルギーライン全回路接続。火器管制システムの安全装置を解除。データリンク開始』

コクピットが閉じ、その裏の何重ものシャッターも閉じて上から目の前にメインモニターが降りてくる。

同時にサブモニターも一斉に点灯し、機体の状況が映し出された。

『電圧正常。油圧正常。イジェクションシート、パラシュート共に正常。スーパーイオンバッテリー出力、80%で安定』

肩の上の操縦桿を握り、呼吸を整える。

目を閉じて深呼吸し、緊張で早まる鼓動を抑える。

そして力を込め一気に操縦桿を手元に引き下ろすと同時に、ファルガンの赤い目が輝いた。

『ウエルカムヒーロー。ファルガン、戦闘モードで起動しました』

深緑の機体は力を込め、ゆっくりと立ち上がり敵を見据える。

敵はカマキリのような怪獣カマギラー。

戦いの火蓋は、切って落とされた。

「お前の相手はこつちだああああー！」

道端の街灯を一本引き抜き、投げつけるファルガン。

カマギラーに命中する。ダメージはない。

だがその一撃でカマギラーはファルガンを認識、注意はそちらへと向いた。

これこそがソウタの狙いである。

「よし、来たー！」

怪光線を放ちながら迫るカマギラー。

ソウタはそれを一発一発慎重に避けながら、距離を取りつつ避難民とは逆方向に向かい注意をひきつける。

『やめろ、降りるんだ！ イベント用のファルガンでは無理だ！』

戦っている筈のないファルガンが動いている事に気付いたのか、通信機から男の音が響いた。

何せこの機体はイベント用に持って来ていたもの。性能こそ同じとはいえ、バーニアの推進剤が安全の為に抜かれている上に丸腰というハンデを背負った状態である。

「ガーディアンの人ですよね。そちらの機体が到着するまで俺が時間を稼ぎます」

『誰だ、乗っているのは！』

「後で話します！」

そうは言うものの、確実に時間を稼げる自信はない。

だが上手くいけば、被害は最小限に抑えられる。それで救える命も計り知れないだろう。

『KAMAGIRAGIRAAAAA！』

「来た……！」

咆哮を上げ、カマギラーが一步、また一步と迫る。

『名古屋の事後処理のせいで機体を送るのは時間がかかるが、武器だけでも出来る限り早くそちらに送る。すまないが、多くの市民の命……しばし君に託そう』

「ミスっても責任取れませんかね！」

バーニアも武器も使えない。勝とうと思えば勝ち目のないような状況下で、ファルガンは人々の命を守る為に今駆け出す。

一方その頃、カズマと少女は……

「サンキュ」

カズマの肩を借りてなんとか立ち上がる少女。

転んだ時に強く打ったのか、彼女の右膝は青い痣が出来てしまっていた。

「これくらいなんて事ねーよ。それよりあのチャリ、お前のか？」

「そうだけど……」

「後ろに乗れ。足怪我してんだろ」

そしてカズマは少女の自転車に乗り、彼女を後ろに乗せて走り出した。

「いやー、悪いね」

「こつちもチャリあると助かるしおあいこだよ」

もう殆どの人は避難を終えて、道に人は少ない。自転車で突っ走るには充分で、これならば素早く避難できるだろう。

潮風を受けて走る中、少女は意識を今ファルガンと戦っているカマガラーへと向ける。

「それにしても何あのカマキリ怪獣、ダッサ」

「言ってる場合かよ！」

「いやいや、だつてさ？ 見てよあの手。刃物の付け根。絶対アレ、横から殴ったらポキッと逝くつしよ。あれ作つた奴絶対アホじゃん」

とはいえ考えていたのは、見た目へのツツコミ。

「おいお前、今なんつった」

だがその発言は、この状況からの逆転のきつかけとなる。

「あの付け根、絶対横からポキッと逝くつて……」

「ナイス！」

すぐさまカズマは少女のアドバイスを受けて携帯電話を取り出しソウタへとかける。

これが、カズマと少女にとっての始まりだった。

『KAMAGIRAAAAA!!』

「くそつ、距離を取らないと……!」

ビュンビュンと繰り返しブレードを振るカマギラー。

一発振り下ろされる度に空気が裂け、ビルが割れる。

まともに喰らえば一巻の終わり。ソウタは落ち着いて距離を取りながら一発一発を確実に躲していく。

そんな中、突然ポケットの中の電話が鳴り出した。

咄嗟にソウタはカマギラーから一旦離れて携帯電話を肩に挟み込みながら操縦桿を握る。

『聞こえるかソウタ!』

「今は電話出来る状況じゃないんだ!」

電話の主はカズマ。相手にしてられないと切ろうとするが、彼の口から告げられたのは勝利の鍵となる重要な事だった。

『そいつの弱点、多分両手の刀の側面だ! 横からキツイ一発ぶち込めば折れるんじゃないか!』

「そうか!」

そう言われてソウタはカマギラーの両手の刃の根元を注視する。するとそこは、一つの球体関節で刃を保持しているだけの脆弱そうな構造をしていた。

この瞬間から彼の頭の中にはある可能性が浮かび上がる。
時間稼ぎだけではない。

“勝てる”という可能性が。

逃げるのをやめ、一気にカマギラーの懐に潜り込むファルガン。

「はあっ!!」

そして掴みかかると拳を握り、思い切り刃の側面を殴りつけた。

『KAMA!?!』

「折れた!」

分解する左腕のブレード基部。

カマギラーが咆哮を上げて仰け反る。

その隙にファルガンは落ちたブレードを拾い上げ、剣のように構えた。

「これで武器も一対一だ!」

これで条件はほぼ対等。あとは戦って倒すのみだ。

「せい! やああっ!!」

振り回される両者の刃が、ガキングキんと音を立ててぶつかり合う。

拮抗する両者の力。だが先に勝機が訪れたのはソウタの方だった。

『ファルガン！ これより30秒後に送信した座標に必殺武器を投下する！ 使つてくれ！』

「了解！」

報せと同時に一気に肉薄し、刃を右胸に突き刺す。

刺さった刃が邪魔で振りおろせないカマギラーに再び掴みかかり、背負い投げを叩き込む。

直後、空から投下された巨大なバズーカ砲が姿を見せた。

「こいつでとどめだ！」

すぐさまバズーカを受け止め、構えるファルガン。

ソウタはコクピットのスコープを展開させ、照準マーカールの中心にカマギラーの姿を捉えた。

「ラストアアアア！ ビイイイイムツ!!!」

引き金を引いた。

視界を覆い尽くさんばかりの光が放たれ、機体が反動で押し戻される。

そして放たれたビームはカマギラーの姿を包み込み……

『KAMAGIRAAAAA?!?!?!』

光が止んだ途端、絶叫と共にカマギラーは跡形もなく爆散した。

「勝った……。勝ったんだ……。！」

爆炎に背を向け、佇むファルガン。

これは、ヒーローが去った先の未来に現れたもう一人のヒーローの物語。その始まりである……。

第二話 閃光の騎士

『先日の怪獣襲撃事件ですが、情報によると撃退したのは市内の高校生の少年とのことです。勇氣ある行動を示して多くの市民を守った少年に、多くの称賛の声が』

「これ、俺の事……なんだよなあ……」

翌日、ガーディアン関東支部。

ソウタはロボット怪獣カマギラーとの戦いの後、一時的な措置として個室に軟禁され一人テレビに目を向けていた。

とはいえ内容は昨日の戦いの事で、彼が戦って多くの命を救った事を持ち上げるような内容ばかりで気分は落ち着かない。

中には人々の平和を守る為には身の危険も厭わない勇者のような少年だという話も出ているが、実際は自分たちが助かる為にやむを得ずした事であって見当違いもいところである。

「落ち着いたかな、ソウタ君」

そうしてテレビを見ていた彼の元に、男が現れ声をかけた。ガーディアンの総司令官、御法川ケンジである。

「結論から言おうか。会議の結果だが、君はお咎めなしということになったよ」
彼が報告したのは、ソウタの処遇が無罪放免になったということ。

その後の説明によると、幹部たちからは「軍用兵器」であるヒロイックロボの私的利用で処罰するべきという声も上がっていた。

だがそもそもヒロイックロボの区分が軍用兵器ではなく災害処理用の機械であることや、無断使用を禁じて罰する規則が存在しない事などからお咎めなしとなったのだという。

「そうですか……」

「僕個人としては、君にはとても感謝しているんだ。名古屋の件の直後を狙われたというのもあって、君が勇気を振り絞って戦ってくれなければ被害はもっと拡大していただろう」

それは別として、御法川個人としての感謝も告げられる。

カマガリラーの一件は名古屋の怪獣襲撃の影響で対応が遅れており、ソウタが戦わなければ大惨事もあり得ただろう。

とても個人の感謝などで済ませられる話でもないが、それでも最大限の感謝を伝える為に彼は頭を下げる。

「死にたくなかっただけですよ、俺だって」

「それでもだ。あの時君は間違いないく、他の誰よりもヒーローだった。胸を張ってくれ」
例えどんな理由であっても、あの時何百何千人もの人々を守り抜いた。その事実に変わりはないのだから。

「こんな時間だ。君の友人も待たせているし一緒に昼食といこうか」

その後、食堂にて……

「ガーディアンの総司令官と、昼飯……」

御法川を前にして、緊張に震えるカズマ。

「凄い人なの？ このおっさん」

どうでもよさそうに彼にそう訊ねる少女。

まるで対極的な構図である。

「おいおま！ し、失礼しました！」

「構わないよ。でもおっさんはやめてほしいな。これでもまだ30前半なんだ」

あまりにも直球な少女の発言で、代わりに頭を下げるカズマだが御法川は気にする様子もなく笑って年齢を明かした。

総司令官の割には若々しい彼だが、年齢もどうやら相応らしい。

「まずは自己紹介といこうか。僕は御法川《みのりかわ》ケンジ。ヒロイツクロボを運用し、悪のロボット怪獣と戦うガーディアンの総司令官だ。といつても堅苦しいのは無しで頼みたいな」

そして自己紹介。

御法川は友人のような気さくさでそう述べる。

「ま、真宮カズマです！ よろしくお願ひします！」

だがカズマはやはり緊張が解けず、背筋を伸ばしてガチガチの様子。

「上がりすぎっしょ。あ、うちは九条フウカだよ。よろしくー！」

(ギャルだ……)

一方パーマのかかったポニーテールと、スパッツをちらりと覗かせるミニスカートが特徴の少女……フウカは歳上相手に初対面とは思えない程の馴れ馴れしさで挨拶を済ませた。

「君はもしかしてあの時の……」

「あそこで怪我してたのうちだよ。あとあのダツサイカマキリ怪獣の弱点見つけたのも

あ・た・しー！」

ソウタは気付いた。フウカが、昨日道で倒れていてカズマに任せたあの少女だという

事に。

そしてカマギラーの弱点を発見したのがカズマではなく彼女だったということをごで初めて知るのであった。

「ありがとう。君のおかげで助かったよ」

「べつにー？ あんなの余裕だし」

札を言うソウタに、あれくらい余裕だとアピールするフウカ。だが少し頬を赤らめていて、どうやら満更でもなさそうな様子だ。

「あ、俺は結城ソウタです」

その流れで忘れかけていたのを思い出し、ソウタも自分の名前を告げる。

「結構可愛いよね。童顔で」

「気にしていることを……」

そして真っ先に反応したのはフウカ。といっても気にしているのは顔だが。

実際ソウタの顔つきは女っぽいという程でもないが少し中性的な童顔で、格好良いというよりは可愛らしいという言葉の方が似合うだろう。

「そいや九条さんってどこ高？」

「北高。一年」

「俺らと同級生じゃねーか！ 別のクラスか？」

「マジで!? すっごい偶然！」

「お待たせしました。ソースカツ丼になります」

三人が同じ学校の同級生だということもわかったところで、御法川が頼んでいた食事を従業員が持ってきた。

ソースがたっぷりとかかった、揚げたてのソースカツ丼だ。

「この食堂のソースカツ丼が僕の好物なんだ。安いし何より美味しい。勿論奢りだから是非食べてくれ」

「いただきます」

御法川一押し一杯。その味は……

「美味しい……」

「サクサクでいいな。ソースも甘辛で飯が進むし」

「キャベツ入りなのも嬉しいかも」

甘辛い特製ソースが沢山かかっているながらもサクサク感が損なわれていない肉厚な豚カツ。

そのサクサク感と噛み合うもち麦ご飯。

そして口の中の油のしつこさを抑えるシャキシャキのキャベツ。

充分それらはソウタたち三人を満足させるに足るものだった。

「ガーディアン関東支部の食堂自慢の一品さ。これにビールでもあれば完璧なんだけど」

今日は我慢しておくよ」

「やっぱおっさんじゃん!」

これを掻き込みビールで流し込むのが御法川の夜の日課なのだが、まだ昼な上に初対面の未成年も連れてくる今日という日は自重する事にしていた。

「ごちそうさまでしたー」

なかなかポリユームのある一杯だったものの、無事全員完食。

食器を返却口に返したところで御法川は三人を呼び止める。

「三人ともちよつと話があるんだけど、いいかな」

「話?」

「ここじゃなんだから、小会議室を借りようか」

関東支部、小会議室。

「で、話って何!? とつとと帰りたいんだけどー!」

貴重な日曜日を早く家に帰って満喫したいフウカは、荒れた様子で椅子に座る。

「俺は幾らでも大丈夫です!」

「あはは……」

一方でカズマは、憧れのガーディアン基地の中の小会議室という事で興奮気味に。

ソウタはそんな二人の様子を見て苦笑いしながら椅子に腰掛けた。

「それで話だが、率直に言おう。君たちに、これからも怪獣と戦って欲しいと思ってる」

「戦う？ 俺たちが……」

御法川の言う話。それは素人でしかないソウタたちに、昨日と同じように怪獣と戦って欲しいという突拍子もない事だった。

「勿論危険な仕事になるからね。何の強制力もない頼み事だ」

「でもそういうのってプロがいるじゃん。なんでうちらなわけ？」

フウカの言う通り、対怪獣戦闘には彼らが出なくとも十分な実力を持つプロがいるのだ。

昨日は名古屋の件と立て続けのせいで対応が遅れたとはいえ、今更偶然乗っただけのソウタを引き続き乗せるほど人手不足というわけでもない。

だが御法川の考えている問題はそことは別にあつた。

「恥ずかしながら、そのプロの質も落ちてきていてね。初めからガーディアンにいるヒーローは優秀なんだけど、問題は軍人上がりだ」

「軍人なら強いんじゃないのか？」

元軍人が問題だと彼は言うが、その意味がわからないカズマは首を傾げる。

しかし問題なのは、戦闘力とは別のところにあった。

「兵器を使い人間と戦う訓練ばかりしてきた人間にヒロイックロボは使いこなせない。その事を理解しようともせず、軍幹部の天下りが増えた上層部の連中は元軍人の割合を増やそうとしている上に、戦争に使う事も考えている始末だ」

「なるほどねえ……」

「勿論ちゃんとしてくれるなら元軍人でもいいんだけど、実際はガーディアンを民間人だからと見下し問題を起す事も少なくない。そんな人たちばかりではないんだけどね」

元々は消防などと同じ扱いのガーディアンだが、今では軍人上がりたちが正式な戦闘員ではない彼らを排斥し事実上軍隊化する動きがあるのだという。

さらにはヒロイックロボを人間同士の戦争に投入する事の推進など、いくら良識派も少なからずいるとは言っても元軍人という集団が正義のヒーローであるべきガーディアン_の在り方を歪めている事に変わりはない。

「で、それと俺たちに何の関係があるんだ?」

「今のガーディアンは、軍隊化し始めて正直とても純粋な正義の味方とは言えなくなりつつある。そんな中で、君たちは忘れられつつあったヒーローの真の在り方を示してく

れたんだ」

その状況下で現れたのがソウタたちだった。

怪獣が迫る中咄嗟にロボットに乗り込み、仲間の知恵の力も借りて見事打ち倒し多くの命を救う。

組織などに囚われず、自分たちの意志でそれをやり遂げた彼らは御法川にとつてはまさに待ち望んでいた正義のヒーローだったのだ。

「だから俺たちに、ガーディアンを変えろとでも言うんですか？」

「君たちは道を示してくれるだけがいい。自分たちの信じるままに、正しいと思うことをしてくれたらそれで充分だ。その後は僕たち大人の仕事さ」

だからといって大人同士の争いには巻き込むつもりなどない。

何者にも囚われず、正義の為に戦うヒーローへとガーディアンが変わっていくための道しるべとして、彼はソウタたちの力を借りようとしているのである。

「わかりました。少し考えさせてください」

「当然だよ。すぐに決めてしまうようなら止めるつもりだったからね。決まったらこの番号に連絡してくれ」

勿論すぐに決められる話ではない。御法川は電話番号が書かれた紙をソウタに手渡し、選択を託した。

「まったねーおじさーん」

「ああ。タクシーは手配しておこう」

そして御法川は、二人の背中を見送ると携帯電話を取り出そうとして気付く。

「君はいいのかい?」

帰ったのはソウタとフウカの二人だけ。カズマがまだ残っていた事に。

「基地見学させてもらっていいですか!?!」

「構わないよ」

「っしやあ!!」

目的が叶って歓喜し飛び上がるカズマ。当たって砕けろで訊ねてみた甲斐があったというものである。

「暇な職員に案内させよう。誰かいるかな」

「はーい。私暇です」

「よろしく頼むよ」

御法川は非戦闘時で人員過多のオペレーターの一人に案内役を任せカズマを送り出し、そして椅子に座るとコーヒーを飲んで一息ついた。

「よろしいのですか?」

そんな彼の元に現れたのは、スーツを着た秘書の女性。

「基地見学くらい問題ないさ」

「そうではなく、ヒロイックロボをあんな子供たちに使わせる事です」

彼女はやはり、ソウタたちにヒロイックロボを運用させる事に関しては不安なようである。

「軍人崩れの老害共に渡すより遥かにいいさ。それに彼らがついてくれば、ガーディアン革新は大きく前に進む事になる。期待しようじゃないか。ヒーローの活躍に」

だが御法川は不安以上に、期待に胸を膨らませていた。

彼らがどんな活躍を見せてくれるのか。そして、彼らが指し示す正義というものが一体如何なる物なのかという事に。

一時間後。

「ただいまー」

一日ぶりに家に帰ったソウタは、荷物を降ろすと早速冷蔵庫を開けてボトルに入った麦茶を飲み干す。

(何故だろう、随分懐かしく感じる……)

綺麗に片付けられた台所。

さつきまでマドカがいたのかテレビが付けっぱなしになっているリビング。

いつも通りの、見慣れたはずの我が家の景色がソウタの目にはどこか懐かしく映っていた。

無理もないだろう。昨日の怪獣が現れた瞬間からヒロイックロボ、ファルガンのコクピットに乗り込んで実戦を経験し、さつきまでいた所は対怪獣防衛の本拠地であるガーディアン支部である。

非日常の連続から、この短い間で当たり前の日常をどこか遠い事のように感じつつあったのかもしれない。

「おかえりお兄ちゃん！ 怪獣にやられちゃったのかもって心配したんだよ!？」

そしてソウタが帰ってきた事に気付いて階段を駆け下りてきたマドカが、涙目になりながら飛びついてくる。よほど心配だったのだろう。

「電車止まったから、友達の家泊まってたんだ」

当然ソウタの言い訳は嘘である。実際はガーディアンの基地に泊まっていたのだから。

「今度からそういうの連絡してよね?」

「ごめんごめん」

だが本当の事など言えるはずもなく、マドカの頭を撫でながらガーディアンの事は胸

の内へとしまった。

「あ、今日は夕飯友達とファミレス行くから昨日のオムライス冷蔵庫に入ってるの食べといてね」

「わかった」

「何着て行くのかなあー！」

そして元気を取り戻したマドカは、友達との食事会に心躍らせながら階段を駆け上がった。いった。

「はあ、疲れた……」

心身共に疲れ果てたソウタは、テレビを切ってソファに横たわり天井を見上げる。

「俺が、ヒーローに……か……か……」

突然ヒーローという選択肢を突き付けられる事になった彼。

だがいくら実戦を経験したとは言っても、まだ具体的な実感などない。

本当にヒーローになれるのか。自分なんかがなってもいいものなのか。そんな事を考えながら結局何も決められないまま、ソウタは目を閉じ意識は深い眠りの中へと沈んでいった。

翌日。

「おつす。昨日はお疲れ」

「あ、うん」

鳥の鳴き声が響く月曜日の朝の通学路。気だるさの中ソウタとカズマは高校の正門を通り抜ける。

「で、どうすんだ？ ヒーローの話受けんの？」

「そう言われても実感湧かないからなあ」

やはり話題は、昨日のガーディアン基地での出来事。

これから先ヒロイックロボで戦っていくかという話だが、まだ決めかねている状態だった。

「あ、九条さん」

そんな時、ソウタは一人で登校するフウカの姿を見つけて声をかける。

「げっ、あいつら」

「ちーっす」

とはいえ、あまり歓迎されてない様子ではあるが。

「で、まさか昨日の話受ける気じゃないよね」

彼女が気にしているのもまた昨日の話。実際に戦うのはソウタとはいえ、彼女もまた

他人事ではない以上二人がどうしたいかという事に関心はあった。

「まだ、分からない」

「うちは勘弁だよ？ そんなめんどくさいこと」

尚元々怪獣やヒロイツクロボに興味などないフウカはこの話には乗り気ではないようである。

「そうだよね……」

「んじゃ友達待たせてるからお先ー」

そしてそそくさと駆け足で教室へと向かうフウカの背中を見送る二人。

「やっぱ俺らにや無理なんじゃね？」

「そうかもしれないけど……」

フウカはやる気がないとわかった以上、やはり断ろうかという方向に傾きかけたその時だった。

「警報!?!」

再び、怪獣出現を知らせるサイレンが鳴り出したのは。

『WY Y Y Y Y Y Y!!』

奇妙な咆哮を上げながら一步、また一步と街の中心に迫るロボット怪獣。

その顔はまるでバッタのようで、首元にはエリザベスカラーのような花びらが。両手には二本ずつ、全部で四本の茨の鞭を持っているちくはくはく姿の怪獣だ。

『怪獣が出現しました。市民の皆様は慌てず、警察等の機関の指示に従い迅速に避難してください』

「押さないで！ 慌てないでください！」

逃げ惑う人々の頭上遙か高く。青い空に漂う雲の真下に飛来する影があつた。

『目標は怪獣一体。付近には小学校がある。近付かれる前に絶対に落とせ』

「ミッシヨン了解」

輸送機の中、鎮座する白と蒼のヒロイックロボ。そのコクピットの中で女は呟く。

『間もなく降下地点です。5、4』

そしてカウントダウンが始まった。

「ファルソード……」

3。

2。

1。

「テイクオフ！」

操縦桿に伝わる衝撃。カウントがゼロになった瞬間固定具が外され、白いヒロイックロボ、ファルソードが投下される。

『WYYYYYYYYY!?!』

瓦礫と土煙を巻き上げながら勢いよく着地するファルソード。

混乱する怪獣に、引き抜いたブロードソードを向けこう告げる。

「貴様の罪、刃の前に懺悔しろ！」

そして今、戦いが始まった。

「おい何してんだ！ 早く逃げないと……」

警報が鳴り響く中、周りと一緒に逃げようとするカズマ。だが、周りが避難しようとする中でソウタは怪獣の姿を見上げて立ち止まっていた。

「あの場所って、まさか……!」

今怪獣が現れた場所。そしてその向かう先。そこに何かがあるか気付いた瞬間、ソウタは一心不乱に民衆とは逆方向に駆け出した。

「お前まさか、あの怪獣と……!」

ソウタが何をしようとしているのか。それに気付いたカズマもまた後を追おうとす

る。

「クソツ……!」

しかし今の自分が行っても何も出来ない事を悟った彼は、その場で足を止めて拳を握り締めた。

やり場のない苛立ちを胸の内にしまい込んで。

『WY Y Y Y Y!』

「クソツ、何なんだこいつの硬さは!」

両手の鞭を振るいながら、街を突き進んでいくロボット怪獣。それを食い止めんとファルソードは剣を振るうが、刃は通らず怪獣はまるで無傷だった。

圧倒的な防御力。そう思うも束の間、ファルソードのパイロットはある事に気付く。

「いや、まさかこれは……!」

ふと剣に目を向ける。するとその剣はなんとグズグズに溶けて変形し、とても切れそうにはない姿に成り果てていたのだ。

「ビルが溶けている。やはり……!」

辺りのビルも見てみると、やはり同じように鞭を受けた部分が溶かされている。

攻撃が効かなかったのは、敵の装甲が頑強だったからではない。武器を溶かされて、攻撃力を奪われていたからだだったのだ。

『WY Y Y Y Y Y Y Y Y Y!!』

毒茨ロボット怪獣ウイズン。

全高27m、重量770t。

鋼鉄をも溶かす強酸を纏った毒鞭を武器とする恐るべきロボット怪獣である。

「待て、そつちには学校が……!」

ウイズンが向かおうとする先。そこにあつたのは、避難所にもなっている小学校だった。

「やだ、こつち来てる……!」

「うわああああん!」

怯える大人たち。泣き叫ぶ子供たち。

今から逃げてても間に合わない。彼らにできるのは祈る事だけだった。今すぐに、怪獣から自分たちを助けてくれるヒーローの登場を。

「お兄ちゃん……!」

その中には、ソウタの妹であるマドカの姿もあつた。目を閉じて、両手を合わせる。そして脳裏に浮かんだ兄の事を呟いたその時……。

「そこまでだー！」

突如現れ、横から怪獣を殴り飛ばす深緑の機体。そう、ファルガンである。

「行こう、ファルガンッ！」

そのファルガンのコクピットに座るのは、他でもないソウタだった。彼が戦う気になった時の為に、予め輸送機に搭載されていたのだ。

「あの機体は……?」

『援軍だ。昨日の事件の学生が乗っている』

「わかりました」

予定にない増援に困惑するファルソードのパイロット。だが御法川の言葉で状況を理解したのだった。

「ファルソードの人、加勢します！」

「よろしく頼む」

そして二機が並び立つと、ファルガンはファルソードに予備のブロードソードを手渡しして銃を構えた。

「奴の茨の鞭には、無機物も溶かす猛毒が塗られている。直撃を受けたら装甲も意味を成さないだろう」

「触らないように気をつけろって事ですな」

「そういうことだ。行くぞ！」

「はい！」

第二ラウンドの開幕。敵の能力が判り、味方も二人になったところで再度ファルソードはウイズンへと勝負を挑む。

「セアアッ！」

「140mmのライフルカノンだ！ 食らえッ！」

ファルガンのライフルでの援護を受け、接近し剣を振るうファルソード。

猛毒の鞭を受けないように細心の注意を払っているせいで踏み込めず、ダメージは小さいがそれでも確かに先程より攻撃が通っている事は確かだ。

「お兄……ちゃん……う？」

怪獣ウイズンとヒロイツクロボ二機の戦いの最中、小学校で眺めていたマドカは気付く。自分たちを助けてくれたファルガンに乗っているのが、自分のたった一人の家族である兄だということに。

「お願い、負けないで……！」

しかし気付いたところで彼女にはやはり祈る事しかできない。勝利の女神が、自分の兄に微笑んでくれることを。

「足止めにしかならないか……！」

照準を合わせ、引き金を引き続けるソウタ。だがライフルの弾丸ではウィズンに決定打は与えられず、注意を引く事で精一杯だった。

しかし学校を巻き込むかもしれないラスタービームを使うわけにはいかない。八方塞がりかと思われたその時だった。

「いや、それでいい!」

「あれは……!」

ファルソードが取り出したのは、小さな黄金のナイフのようなもの。これを使う隙こそが、逆転の鍵だったのだ。

「ラスターソード!」

短い刀身が開いて鑊のような形になり、ビームが放たれ長大な剣を形作る。

これこそがファルソードの必殺技の高出力ビームソード、ラスターソードである。

「ビームの刃は溶かせまい! せえい!!」

『WYYYYYY!』

いくら鋼をも溶かす猛毒とはいえ、実体のないエネルギーの塊であるラスターソードは溶かせない。

振り下ろされたラスターソードは受け止めようとする鞭ごとウィズンの左腕を切り落とす。だが黙ってやられるウィズンではなく、残った右腕でカウンターを仕掛けよう

と振り上げる。

「させるか!」

だがすかさずファルガンの放ったグレネードがその一撃を阻んで怯ませる。ソウタの作り出したその隙は、ファルソードの必殺の一撃の為の力を蓄えるには充分過ぎる時間だった。

「ラスターソード……」

両肩の放熱フィンを中心に、陽炎で空間が歪む。その後、背中のパニアに青白い光が灯り、爆発。ファルソードの500t近い巨体が一瞬にして空高く舞い上がった。

青空の下、太陽を背に高々と剣を振り上げて掲げる。そして……。

「エンダアアア! スラアアアツシユウ!!」

『YYYYYYYYYYYYY?!?!?』

一閃。必殺の斬撃が振り下ろされ光の剣はウイズンを脳天から一刀両断した。

「罪深き者へも、手向けの花を」

そしてファルソードが背を向けた瞬間、ウイズンは跡形もなく爆散。炎の中へと消えていった。

結局怪獣騒ぎの後、辺りの学校は全て休校となった。学生たちは皆予想だにしない休みに歓喜し、休日を謳歌している。

一方でソウタとカズマの二人はそんなことはなく、早々にガーディアン関東支部の御法川の元へと訪れていた。

「それでは、今後も戦ってくれるということでもいいのかな」

「はい。スーパーヒーローにはなれないかもしれませんが、それでも身近な人たちを守るなら……」

ファルガンに乗って、ヒーローとして戦う。それがソウタの出した結論だった。やはりきつかけは、マド力を守る為に戦った事だろう。

「みんなの為、世界の為だなんて言う人間より、そういう好きなものや、身近なものを守る為に戦う人間の方が強いものだよ。だから自信を持つといい」

「はあ……」

「手続きの準備はこちらでしておこう。今日はもう帰って構わないよ」

「はい。失礼します」

話を終えて、御法川の部屋を後にする二人。

こうして、ソウタとカズマは怪獣と戦うヒーローとしてガーディアンに身を置くことになったのだった。

「ソウタ、お前なあ……。そんな勢いで受けていいのか？」

「二度戦ってしまったからかな。妹が危ないって思ったら、他人には任せておけなくなつたんだ。もしも行かなかつたらきつとどつちに転んでも後悔してたと思うよ」

「でもなあ……」

ウイズンと戦つた後、それを最後に断る事もできた。だがソウタは、それでも戦うことを選んだ。

戦う力があるなら、戦わずに後悔はしたくない。戦うことができるなら戦つて、大切なものを自分の手で守りたい。それが彼の選んだ道だった。

何はともあれ答えは決まった。そして今日のところは帰ろうとしたその時、一人の女性が生が二人の前に現れた。

「君があつたファルガンのパイロットかな」

「あなたは……？」

ソウタがファルガンのパイロットだったと知っている様子の彼女。

薄い茶色のセミロングの髪が特徴の美しい女性だが、当然二人には見覚えはなく誰だか分からないでいた。

「藤堂アリス。先程君と一緒に戦つたファルソードのパイロットだ」

「こんな綺麗な人が……」

彼女の名は藤堂アリサ。ファルソードのパイロットで、軍人上がりではなく民間人からパイロットになった女性である。

「そう見えるかな？」

「ご、ごめんなさい！」

「構わないよ。そう言ってくれて嬉しい」

二人が見た第一印象ではもつと堅苦しい相手のようだった。しかし実際に話してみると意外と気さくで、話しやすいタイプだったようで二人とも肩の力を抜いて自己紹介をする。

「俺は結城ソウタです。よろしくお願いします」

「真宮カズマっす！ あのファルガン、エース仕様ですよね！ サインいいっすか!？」

「勿論だとも」

「ならば非この本にお願いします！」

「ヒロイックロボのファンブックか。わかった」

そしてカズマは自前のファンブックにサインを書いてもらうと、満足気にそれを鞆の中へとしまった。

何せ通常の白と緑の量産型ファルソードと比べて彼女の乗る青と白のファルソードは、ガーディアンの中でも指折りのエースにしか乗る事が許されないスペシャル機であ

る。実体武器を溶かしてくるウイズンは相性が悪かっただけで、アリスは実際には一人でも負け知らずのガーディアン最強クラスのパイロットなのだ。

「あの……」

「何かな？」

「アリスさんは……どうしてヒロイックロボに？」

そんな今ではエースパイロットと呼ばれる彼女がどうしてヒロイックロボに乗ると決心したのか。自分の今後の為にも、ソウタはこれだけは聞いておきたかった。

「うちの両親が二人とも元自衛官でね。本当は花屋になりたかったんだけど、半分強制的にこの道を進むことになってしまったよ」

だがそのきっかけは大した意思もなく両親の敷いたレールに乗って、両親と同じ戦士の道を否応なく歩むことになったというだけだった。

「それじゃ戦う理由とかは……」

「始めは悩んだよ。なんで私は戦ってるんだろうって」

「なんで戦ってるか……」

ただ言われた通りにパイロットになって、生活の為に戦うだけ。その他の理由も見つからず、ただただ指示通りに作業的に怪獣を倒すだけの日々。彼女にとつての戦いは、初めはそれだけのものだった。

「でも気付いたんだ。私が戦えばそれだけ、この星の美しい自然の中で生きる草花と、それを愛する人々を守ることができると。花とそれを愛する人の為に働くという点では花屋と同じなんじゃないかって」

しかしそんな中でも戦う理由を見出す事ができた。きっかけこそ語られなかったものの、叶わなかった花屋という夢とは別の形で大好きな草花の為に繋がる事に気付いたのだ。

「愛する草花を……そしてその草花を愛する事が出来る人間という生き物を守る為に戦う。それが私の戦う理由だ。柄でもないだろう？」

また草花を愛せる心を持つ生き物は人間ただひとつ。花屋にはなれなかったが今はガーディアンヒーローとして、花とそれを愛する人々の為に彼女は戦っているのだ。

つまりは好きな物の為に戦う。それが彼女の持つ戦う理由である。

「素敵だと思えます。そういうの」

「そう言ってくれると嬉しい。こんな今でもガーデニングが趣味なんだけど、女騎士のイメージがついて回ってしまっても奇異の目で見られてしまうんだ」

確かに一見すると厳格な女騎士のようにも見えるアリサ。だが奇異の目で見られてしまうというガーデニング趣味からも話してみると気さくな性格からも、本当の彼女は普通の優しい女性である事が伺えた。

「また、水をやりにも来てくれないか？その時はお茶でも出そう」

「いつか必ず行かせていただきます。ありがとうございます」

「こちらこそ、面白い話ができたよ」

そしてまたいつか再び会う約束を交わし、アリサはこの場から去っていった。

「なんつーか、かつけえ……。そこらの男の百倍イケメンじゃねえか……」

何も無い中でかつての夢から戦う理由を見出し、綺麗事ではなく自分の好きな物の為に全てを守り戦う強さと優しさを兼ね備えた騎士。

その生き方は、到底他の誰にも真似できるものではないだろう。

「あれが……ヒーロー……」

いきなりハードルの高さを見せつけられたソウタ。敵わない相手の存在を思い知らされるが、同時に戦う明確な理由はこれから探していつてもいいのだという事も知らされた。

そういった意味では安心もしていたのかもしれない。

「頑張れよ、ニューヒーロー！俺も付き合うからさ！」

「ありがとう。心強いよ」

何はともあれ彼らはこうしてヒーローの道を歩み出した。きつと世界を救うようなスーパーヒーローにはなれないのだろう。

「まあな。あとはあの女か」

「無理強いはできないよ。それよりこれから頑張っていこう」

「ああ。そうだな」

だがそれでも目に見える範囲の身近な世界を守る事はできる。その為に彼らは、これから戦っていくのだ。

同日、中東地域。

「まさかあれは……!」

とある非合法の武装組織の拠点で、見張りが双眼鏡を覗き何かを捉える。

軌道を描きながら低空を駆ける紅い流星。

その正体に気付いた瞬間、見張りの男は赤い光に吞まれて一瞬で蒸発しこの世から消滅した。

「敵襲だ!」

「迎え撃て！ ガキ共を捨て駒にしてでも奴を落とせ！」

直後、敵襲を知らせる警報音が鳴り響き少年兵たちが配置につく中、地対空ミサイルが放たれる。

だが光はそれらを物ともせず突破し地上へと降り立った。

「どうしてヒロイックロボが……！」

その姿はここにあるはずのない存在、ヒロイックロボ。

夜の闇のような黒と、それを照らす月のような黄色の二色の機体は虫ほどの大きさにも見える生身の人間へと銃口を無慈悲に向ける。

「……………めん」

鉄に囲まれたコクピットの中で、少女が囁く。

そこから先は、一方的な殺戮だった。

銃を向けてくる者も、逃げ出そうとする者にも容赦なく銃口を向け、放たれた光線は断末魔を上げる間もなく兵士たちを消滅させる。

そして連れてこられたであろう女子供や寄り添う男たちには傷一つつけず、まるで蟻でも潰すかのように大人の兵士だけを皆殺しにしていた。

「ひびくっ！」

最後に残されたのは、ここまで敢えて生かされたであろう首領の男。

「黒い機体は怯えるその男を拾い上げるとマニピュレーターで握りながら空へと突き上げる。」

「た、助けてくれ！ 望みはなんだ、金か？ 女か？」

「幸せな人……」

「や、やめ……」

そして命乞いをする男の姿に軽蔑の目を向けながら、少女はそれをぐしやりと握り潰してしまった。

「ヒー……ロー……？」

「……来てくれたの……？ 正義の味方が、やつと……」

平和を謳う正義に見放された少年少女たちは、希望に満ちたきらやかな目で見上げる。

手を血で紅く染めた、悪魔にも見える黒いヒロイックロボを。

しかし、その中に知るものは誰もいない。黒いヒロイックロボ、そしてそれを操る少女の内に秘められた闇の存在を……。

第三話 黒のヒーロー

ファルガンで戦う事を決めてから一週間が経ったこの日の朝。何気なくテレビをつけたソウタは何やら物騒なニュースを目にする。

『三日前、中東で活動していた非合法の武装組織が一夜にして壊滅したとの情報が……』
「なんだか物騒だなあ」

近頃よく流れる武装組織の壊滅を報せるニュース。ちやうど一週間前にも同じようなニュースが流れていたが、それ以前にも何度か報道されていた。

その全てに共通するのは、壊滅したのが誘拐した子供を少年兵として使うなど非道な行いをしてきた組織だという事。少年兵や被害者の大人以外の幹部や兵士らが一人残らず殺害されていた事。そして、攻撃には一切実弾が使われていない事である。

ネットではヒロイックロボの必殺技であるラスタ―装備によるものであるという説が有力視されており、それに伴い様々な憶測が飛び交っているが詳細は未だ不明となっている。

「おはよっ！ お兄ちゃん！」

「おはよう、マドカ。トースト焼けてるよ」

「ありがとう！」

ランドセルを背負って階段を駆け下りてくるマドカ。それに気付いたソウタはテレビの電源を切るとトースターから食パンのトーストを取り出して皿に乗せマドカに渡した。

「そういえば俺バイト始めるから、前よりは帰り遅くなるかもしれないけど大丈夫か？」
朝の食卓。トーストにマーガリンを塗りながら、ソウタはガーディアンの事は伏せてアルバイトを始めたという事を伝える。

「私は大丈夫だけど……お兄ちゃん」

「どうしたんだ？」

「そのバイトってもしかして……ロボットに乗って戦うの？」

だがマドカは気付いていた。ソウタのしようとしているアルバイトというものが何を意味するのかを。一週間前にウィズンと戦っていたファルガンのパイロットが兄だということにも気付いていたのだから、そうした考えに行き着くのは当然の事だろう。

「気付いてたんだ」

「なんでそんな……」

「最初は偶然だったんだけどさ。けどあの怪獣が出てきた時、マドカを守らなきゃって思ってた……」

そしてソウタは明かした。この前の新ヶ浜での怪獣事件の際にファルガンに乗り込んで戦った高校生が自分の事だということ。その事が評価されてガーディアン総司令官にスカウトされた事。また先週ウィズンと戦った機体の片方も自分で間違いないという事を。

「危ないことだつてわかつてるよね？」

「わかつてる」

「頑張つてね、お兄ちゃん」

「ああ」

全てを聞いても尚、マドカに兄を止めるつもりはなかった。遊びのヒーローごっことは違う危険な事だとわかっているのならば。

同日、朝の高校の教室。

「ほんつと最近怪獣多いよねー」

「それよりカラオケ行かない？」

「ごっめん！ うち用事あるから！」

一時間目が始まる前で雑談を交わす生徒たち。フウカはその中から抜け出してソウ

タとカズマの元へと足を運ぶ。

「ったく……あんたらが話請けたりしなかったらこんなことには……」

「ご、ごめん……」

「なんだかんだ良い奴だよなお前」

参加しないと思われていた彼女だったが、結果はこの通り。意外とすんなり怪獣と戦う事に参加する事を決めてくれていた。

「一回乗りかかっちゃった船だししゃあないっしょ。借りもあるしね」

「そういうとこだよ」

「それより今日放課後迎え来るんだっけ」

「そのはずだけど……」

そして三人で力を合わせて戦っていく事を決めてから、今日が初めてガーディアン基地に行く日。放課後、授業が終わる頃に車で迎えが来る手筈になっていた。

「授業始めますよー。座ってくださいーい」

話しているうちに一時間目の担当の教師が到着。生徒たちは皆席に戻り、話は打ち止めとなった。

「起立！ 礼！」

その後授業を始めようとした時、突然教室の明かりがちらつき始め、やがて消えてし

まった。

「また電気が……。まあいいわ、始めましょう」

しかしすぐにまた明かりがついた為、結局何だったのか分からないまま授業が始まるのだった。

同日午後、ガーディアン関東支部会議室。

「本日はお集まりいただきありがとうございます」

集まった幹部たちに感謝の意を述べる御法川。今日の会議は予定にあったものではなく、ある事情で急遽行われる緊急会議だ。

「今回の議題は、各地で出没しているこの機体についてです」

御法川は早速モニターに一枚の写真を映し出す。そこに映っていたのは、先日中東に現れた黒いヒロイックロボだった。

「これはどう見てもヒロイックロボではないか！」

今回の議題はその黒いヒロイックロボの対策である。既にこの機体は紛争介入以外にもいくつかのアクションを起こしており、ここ数日の活動の活発化により現場指揮官である御法川の判断で緊急会議が開かれたのだ。

「ヒロイックロボが不法な紛争介入を行ったとなればこれは責任問題になるぞ！」

「誰が、どう責任を取るといふのだね」

「やはりここは現場の指揮を執っている総司令殿か……」

「そもそも君の差し金ではないのかね？」

だがヒロイックロボがガーディアンとの戦争不参加という条約を違反して不法に紛争に介入しているという事態に、幹部たちから発せられる言葉は責任、責任、責任。

「責任のなすり付け合いをしに集めたのではない!!」

問題を棚上げにして責任の押し付け合いに走る彼らの有様に見かねて激怒する御法川。その真剣な眼差しに、幹部たちは一瞬の狼狽えを見せる。

「今重要なのは、不法に各地で怪獣や武装組織、また稀にだがガーディアンにまで牙を向けるこの謎の機体はどう対応するかだ！」

黒い機体の責任を誰に押し付けるか。そんな話で終わるのならば、わざわざ幹部たちをここに集めた意味が無い。御法川はその対策を決める為に、この緊急会議を開いたのだから。

「テロ組織にヒロイックロボの技術が漏洩したとなれば、これは君の責任だぞ！」

「そうだ！ 現場監督は君だろう！」

「っ……………」

だが引き気味になったのも束の間、今度は皆一斉に御法川に責任を押し付けようとする始末。

(少年たち……。やはり君たちがいなければこの組織は……！)

まさに正義の味方の在り方とはかけ離れた伏魔殿。御法川は再びその光景を目の当たりにし、革命の意志を固めるのだった。

「な、なんだ!?!」

「停電……?!」

直後、モニターがぷつりと消え会議室から光が消えた。

一方、放課後の学校では……。

「ちよつとなになに!?!」

「停電か!?!」

こちらも突然停電し、騒然とする生徒たち。

「おいおい、停電しちゃったぞ」

「ダメだ、電話も繋がらない」

ソウタは先に帰っているであろう妹のマドカに電話しようとするが電波は圏外。電

話回線も止まっているようだった。

「どーせまた怪獣のせいでしょ」

「ここ最近の怪獣事件の連続の最中にこの騒ぎ。どうせまたとぶつきらぼうに、冗談交じりでそう口にするフウカ。」

『BIRIBIRAAAAA!!』

直後、視線の向こう。アスファルトの地面を砕き、巨大なロボット怪獣が勢いよく姿を現した。言った途端にこれである。

「ほーら」

「ほーら。じゃねーよ！ どうすんだこれ！」

「とりあえず正門に出よう。迎えが来るかもしれない」

「ああ、そうだな。九条も行くぞ」

「はいはい」

もう怪獣には慣れたと言わんばかりに冷めた様子のフウカを連れて、校舎から飛び出し正門へと向かう。

「にしてもこの前にも増してダツサイデザインだこと。両手マジックハンドで背中にドリルつてマジダサすぎてウケるんだけど」

「言ってる場合かよー！」

確かに今回は弱点を示唆しているわけでもなく、言っている場合ではないのだろうか。今回現れた怪獣はとても奇抜な見た目をしていた。

両手は子供の絵のロボットのようなマジックハンドで、背中には二本のドリル。頭には牛のような角が伸び、とても格好良いとは言えないような奇妙な外観だ。

「でも様子がおかしくないか？」

「言われてみれば動く気配がない……」

その奇妙なロボット怪獣だが、これまでの怪獣のような破壊活動をするのではなく現時に周囲を壊しただけでそれからは動く気配がない。

「あの怪獣が電気吸い取り尽くして、お腹いっぱい満足してことじゃない？ さっきまで電気ブツ切れだったのもそれだったり」

「電気を食ってたって事か。納得」

先程は意味の無いデザイン批評をしていたが、そこはやはりカマガイの弱点を発見したフウカ。現れる前にも電気が消えかかっていたなどの状況証拠から、今回現れたのが電気を吸収する怪獣である事を推察してみた。

「あ、ガーディアンの子車だ」

そうこう話しているうちに、一台の車が正門の前に止まる。シンボルマークが描かれた、ガーディアン専用車である。

「すまないみんな、見ての通り非常事態だ。話は後で構わないかな」

「はい。行こう二人とも」

そして迎えに来た職員の男に連れられ、三人は車に乗り込みガーディアン基地へと向かっていった。

「突然の事ですまないな」

およそ一時間後、ガーディアン基地。職員に連れられてやってきた三人は、御法川によつてブリーフィングルームへと集められていた。

「文句はあの怪獣にでも言つてやりたいけど、マジ何なのあいつ。電話も繋がらないし」

「気づいているかもしれないが、奴は街の電気を吸い取り自らのエネルギーに変換する怪獣だ。恐らくは以前より地下に潜伏していたんだろう」

「あ、合つてた」

「どうやらフウカの推察は正解だったようだ。今回の怪獣は、電気を吸収する怪獣で間違いないらしい。」

「で、チャージできたから喧嘩売りに出てきたつてわけか」

地下から出てきたということは、カズマの言う通り電気を十分に蓄えてエネルギーが満たされたということだろう。

「でもそれじゃなんで動かないの?」

「推測だが、チャージした全エネルギーをヒロイックロボとの戦闘につき込む為だと思われる。破壊活動で無駄なエネルギーを使いたくないんだろう」

「エコ志向なことだ」

そして今怪獣は、活動を停止してヒロイックロボが現れるのを静かに待ち続けている。

「奴はこちらが動くのを待っていると思われるが、奴がいることには電力復旧は出来ないだろう。そこで討伐作戦をこちらで考案した」

暴れ回ってこそいないこの怪獣だが、放っておいてはいつまで経っても電力復旧ができず、時間が経てば経つほど被害は甚大な物となっていくだろう。

この状況を打開する作戦案を説明する為、御法川は紙と鉛筆を取り出しテーブルの中心に置いた。

「目的地に機体を送り込むには上空から投下することになるが、街明かりがない状態での投下は危険を伴う」

「確かに真つ暗闇に飛び降りてビルと激突する危険もあるか……」

鉛筆を走らせながら、現状を説明する御法川。

既に時間は夕方6時を過ぎて日は沈み始めている。街の電灯が消えた状態での暗闇での投下は着地点も見えず、大変危険を伴う。

「そこで予備電力の準備が出来る20時を作戦決行の時間とし、一時的に電力が復旧した瞬間に機体を投下。予備電力を食い尽くされる前に迅速に決着をつける」

「つまり電気ついたらパーツと飛び降りてサクッとぶつ倒すってことでOK?」

「そういうことだ」

その状況を打破する為の作戦は、予備電力の作動に合わせて機体を投下し、吸い尽くされる前に速攻で撃破するという力づく。

だが使える物も少ない今、方法はこれしかないだろう。

「そこで今回の作戦では、初めからフルガンにラスタビーームを携行させた状態で投下する。一応ライフルカノンも装備させるが、保険と思ってくれ」

「わかりました」

そして速攻で撃破するという作戦の為に、今回は始めからラスタビーームを装備して出撃する事になる。基本的には相手の動きを鈍らせてから使う物なのだが、それほど時間の猶予がないという事である。

「結城くん以外の二人は、同時に投下するドローンの映像から彼をナビゲートしてくれ。」

初戦のように気付いた事があれば伝えるだけで構わない」

「りよーかーい」

「はいー!」

「終わったら僕の奢りで寿司でも食べに行こうか。もつとも、復旧作業もあるだろうか
ら明日以降だけだね」

作戦決行は夜の八時。こうして、薄暗い部屋での作戦会議は終わりを迎えたのだつた。

時刻、午後8時0分。只野市上空高度3000m。

「システムオールグリーン……よし」

作戦決行の時間、暗闇と化した街を見下ろしながら輸送機の中でソウタはファルガンの最終確認をする。

『緊張してんのか?』

「勿論だよ。だけど……やるしかないんだ」

『ま、こつちでもサポートするから気楽に行こうぜ』

「ありがとう。頼りにしてるよ」

ラスタービーム、ライフルカノンも装備しシステムも各部動力、駆動系も正常。心の準備も整えて用意は万全。

『投下まで10、9、8、7』

『絶対負けちゃダメだかんね!』

「ありがとう」

足元の街に一齐に明かりが灯った。同時に、投下前の最終カウントダウンに入る。

あとは、降下して一気に敵怪獣を倒して帰ってくるのみだ。

『3、2、1! 投下します!』

「ぐっ……!」

時は来た。

機体を固定するロックが一齐に外され、ファルガンが夜の街へと投下されて強い浮遊感がソウタへと一気に押し寄せる。

直後、突然怪獣の背中のだりりのようなコイルが輝き出した。

「あの光……やばい!」

「っ!」

放たれた稲妻がファルガンの機体を掠める。敵の対空攻撃だ。

当たると機体を減速させずに自由落下で機体を降下させるソウタ。そしてファ

ルガンは、瓦礫と粉塵を巻き上げながら勢いよく道路の真ん中に着地した。

『B I R I B I R A A A A A!!』

電撃ロボット怪獣ビリビラー。

全高26m、重量760t。

地下に潜んで街の電気を吸い取り蓄え、電撃として放出するロボット怪獣である。

「一気にケリをつける！ ラスタアアア!!」

照準を合わせ、ラスタービームを構えるファルガン。作戦通り、一気に決めようとするが……。

『B I R I B I R A A A A A A!!』

「フラッシュ!? 照準が……があつ!」

不意に放たれた閃光で照準が乱れる。目くらましだ。

すかさずビリビラーは雷撃を放ち、ラスタービームの砲身を直撃、大破させた。

「ラスタービーム破損! 発射できません!」

「ちいつ……!」

要のラスタービームが大破した。作戦は失敗だ。

ファルガンは保険にマウントされていたライフルカノンを手にして構え、二本目のラスタービーム投下までの時間を稼ぐ事になる。

「電撃来るよ！ 避けて！」

「しまった……うわあああああつ!!」

「ソウタつ!？」

だが敵の戦力は予想以上だった。絶え間なく放たれる電撃の雨あられに、為す術もなく押されていく。しかし……

「これは……!」

「どうした!」

そんな中、オペレーター女性の一人がレーダーで何かを捉えた。

「西、8時方向から急速に接近する物体を確認！ これは……まさか!？」

その直後、突如空から光線が降り注ぎビリビラーの背中のコイルを撃ち抜いた。

『B I B I!』

「あれは……翼……?」

突然の出来事に、空を見上げるソウタ。

その目に映ったのは、右手に銃剣状の円筒のハンドガンを携えて光の翼を大きく広げる、黒い謎のヒロイックロボの姿だった。

「優先ターゲットは、敵怪獣……」

黒いヒロイックロボのコクピットの中で、少女は呟く。そして、まるで流星のように

降下し粉塵を巻き上げ着地。目にも留まらぬ速さでビリビラーへと襲いかかった。

「ライブラリ照合！ あれは……ファルブラックです！」

「ファルブラックが、何故……!?!」

ファルブラック。その姿を見た御法川は目を見開き驚愕する。

そう、それこそが近頃出没し、紛争地域を蹂躪し回っている謎の黒いヒロイックロボなのだから。

『BIRIBIRIIII!!』

突如現れた二人目の敵へと、電撃を浴びせんと放つビリビラー。

ファルブラックはすかさず飛翔し、空を舞い上から背後へと回り込む。

「無駄」

一撃。叩き込まれた回し蹴りはビリビラーの装甲にめり込み、そしてその760tもの巨体を軽々と勢いよく吹き飛ばした。

「ラスターブラッドガン」

両手をつき、立ち上がろうとするビリビラー。

だがファルブラックはそれを許さない。

右腕を、左腕を。起き上がらせまいと一歩ずつ踏み寄りながらハンドガンの光線で撃ち抜いていくファルブラック。

「これで終わらせる」

そして両足も撃ち抜き地を這う事すら出来なくなったビリビラーに止めを刺すべく、ラストソードのようなナイフを取り出し展開。光の剣を出現させた。

「ラストブラッドセイバー」

四肢も自慢の電撃コイルも失われた怪獣に、もはや抗う術などない。その光の剣、ラストブラッドセイバーで一閃。ファルブラックはビリビラーの胴を切り裂いた。

『BIRIRIRAAAAA?!?!』

「この程度……」

圧倒的な力の前に、為す術もなく爆散したビリビラー。

「なんだよ、あのデータラメな強さ……」

「流石に反則っしょ……」

その光景を目の当たりにしたカズマやフウカは、そしてガーディアンのおペレーターたちや御法川もまた見せつけられたファルブラックの桁違いの強さの前に戦慄するのだった。

「君は……一体……」

そしてソウタは問いかける。ファルブラックに乗る、顔も名前も知らない少女へと。

「あなたは、私を殺せる人？」

「え……」

応じるかのように、ファルブラックはその目をファルガンへと向ける。だが……。

「まずい！ 逃げるんだ結城くん！」

次に彼女が向けてきたのは、ラスタードブラッドガンの銃口だった。

「あなたは、私を殺してくれる人？」

「攻撃してきた!？」

足を掠める光線。咄嗟にファルガンはナイフを引き抜きライフルを向け、臨戦態勢に入る。

「撤退するんだ！ ファルブラックは君が戦って敵う相手じゃあない！」

だが御法川は言う。戦ってはいけなさと。当然だろう、あれだけの次元の違う力を見せつけられたのだから。

「だけど放っておいたら街が……!？」

それでもソウタは退くわけにはいかなかった。自分や大切な人たちが生きるこの街を守る為に。

「大丈夫だ！ それは街は攻撃しない！ だから今は下がるんだ！」

「下がれって言われても……!？」

光の翼を広げ、迫るファルブラック。対するファルガンはナイフを構え、振り下ろさ

れた銃剣とぶつかり合い火花を散らした。

パワーの差は歴然。旧式のファルガンで叶うはずもなく、徐々に押されていく。

「まだ、違う……」

「うわあああつ！」

そしてファルブラックはファルガンを弾き飛ばし、引き金を引いて光線を放ち両腕を撃ち抜いた。

「まだ、足りない……」

戦う力を失ったファルガンを前に、少女は眩く。その後、ファルブラックは翼を広げて飛び立ち夜空の彼方へと消えていった。

「ファルブラック、撤退しました」

「なんだったわけ、今の……」

ファルガンは全ての武器が使えなくなり、戦闘不能に。一方でファルブラックは、無傷で消えていった。見逃してはくれたものの、結果は完全敗北だった。

「無事かソウタ！」

「大丈夫、軽く打っただけで大した怪我もないよ。ファルガンは壊れたけど……」

だが幸いファルガンが中破したのみで、パイロットのソウタはほぼ無傷。偶然ならば運が良かったという他ないだろう。

「今から回収班を回そう。君はそこで待機していてくれ」

「わかりました。ファルガンを壊してしまつてすみません」

「こちらこそ、ブラックが出てくるとは想定外だった。すまない」

ガーディアンの擁するファルガンを破壊された事を気に病むソウタ。だが御法川としてもファルブラックの出現は想定外で、逆にこの程度で済んで良かったというべきところだった。

「何だったんだろう、あれは……」

強力な怪獣を物ともせず打ち倒し、自分でも手も足も出なかつた謎の機体、ファルブラック。

回収を待つコクピットの中でソウタは、強烈な存在感を放つその存在の事を思い浮かべるのだった。

「大丈夫です。身体に異常は何もありませんよ」

「ありがとうございます」

その日の深夜、復旧作業が進む中検査を終えたソウタは医務室を後にしてカズマとフウカの二人と合流する。

「よう。検査どうだった？」

「なんともないよ」

「まったく、心配かけて……。同級生に死なれたら色々アレじゃん」

結局検査結果では何も異常がなく、少し体を打っただけで怪我もなし。勝てなかったことを置いておけば、とりあえずは一件落着だ。

「何事も無かったようによかったよ。そして本当に済まなかった」

「御法川さん……」

その三人のところに行ってきて、頭を下げる御法川。だがソウタたちが望んでいるのは謝罪ではない。

「ファルブラックって何か、聞かせてくれるんだよね？ 怪獣を瞬殺したと思っただけで勝手に襲ってくるしわけわかんないんだけど」

あの機体が何者なのか。それを知る限り教えてもらうのが彼らの望みだった。

「その話は僕の部屋でしよう」

それを了承した御法川は三人を自室へと迎え入れ、資料を広げる。

「早速ファルブラックについてだけど、こちらでもその実態は掴めていないのが実情だ」
まずガーディアンは黒いヒロイックロボを便宜上ファルブラックという名前をつけて呼称しているが、本当にその名前なのかどうかも現状では謎のままである。

「行動は怪獣だけでなく紛争地域の武装組織も攻撃対象にしている、あの機体が壊滅させた武装組織は必ず少年兵を多く使っている組織だった。女子供には傷をつけず、幹部や兵士だけを一人残らず全滅させる。それがあの機体のやり方だ」

「ニユースと同じだ……」

そして御法川の語るファルブラックの行動は、ソウタが今朝に見た紛争地域のニユースと重なっていた。近頃話題になっている武装組織の連続壊滅は、ファルブラックによる出来事だったのだ。

「じゃあなんでソウタに攻撃を仕掛けてきたんだよ」

「不明だ。以前よりヒロイックロボに攻撃を仕掛けてくることも稀にあったが、毎度機体を破壊されてもパイロットは無傷か軽傷だった。よってガーディアンに対しては敵対行動を取っても、殺意はないと踏んでいる」

またファルブラックはこれまでもヒロイックロボにまで攻撃を仕掛けてきていた。しかしその時は敵を皆殺しにしていた武装組織の時とは異なり、機体は破壊されてもパイロットに犠牲者や重傷者が出ることは決してなかった。

目的は不明だが、恐らくは手心を加えられていたのだろう。

「マジで何がしたいんだろ」

「テロリストは皆殺しにするような奴だ。恐らく怪獣や武装組織と戦う目的と、ガー

ディアンと戦う目的はまた別にあるんだろうけど……」

まだ判明していないところも多いが、ひとまずはファルブラックの行動指針は分かった。だがもう一つ大きな不可解な点がある。

「あの強さ、手も足も出なかった……」

「当然だ。現行のヒロイックロボと、あのファルブラックでは機体のポテンシャルが違い過ぎる」

それは怪獣もヒロイックロボもまるで寄せ付けない、別次元とも言える圧倒的な強さだ。

「絶大な基本性能もさることながら、光の翼による飛行能力と運動性や、連射可能な複数のラスター装備。見た目こそヒロイックロボに似てはいるが、テクノロジーの次元が余りにも違い過ぎる」

飛行能力。必殺技であるラスター装備の連射。圧倒的な基本スペック。

それらは御法川の言う通りヒロイックロボのテクノロジーを大きく逸脱したものであり、外観こそ近いものの性能面ではヒロイックロボというカテゴリに収まるかどうかすら怪しいレベルに至っていた。

「それこそ過去のヒーローと魔王との戦い。その時代のヒーローや怪獣に匹敵する可能性も捨てきれない程にね」

「あの頃の戦いは、まだ現代科学じゃ解明できない次元だつて……」

数十年前の戦いで以降、当時の戦いで使われたテクノロジを解明しようと人類は努力してきた。その結果膨大なエネルギーを消費するビーム兵器の一種、ラスタール装備などの成果は生まれたものの、完全に解明するには至っていない。

怪獣の強さでさえ、現代のものでは過去のものの半分にも至っていないと言われていたのだ。もしも何らかの形でファルブラックにその時代のテクノロジが組み込まれているとするのなら、別次元の高性能も説明がつくだろう。

「もしその時代の魔法すら内包した超技術を手に入れてファルブラックに組み込んだ人間が悪意のある人間だつたとしたら……もしもその技術がロボット怪獣に組み込まれてしまえば、今の戦力ではとても対応できなくなるだろう」

「ちよつとそれヤバくない……?」

基本的には無辜の民には危害を加えないファルブラックで済めばいい。

だがもしもファルブラックを建造したのが悪意のある集団であれば。もしくはその彼らが解明した過去の技術が悪意のある者たちにより転用されたのなら。

そのテクノロジがロボット怪獣に組み込まれた時、スーパーヒーローがいなくても世界は間違いなく地獄と化すだろう。

「その事態に備える為にも、僕はガーディアンの改革を進めなければならない。これが

「私も協力を頼む」

「ファルブラックの出現でその最悪の事態が現実的となった今、それに対抗し技術革新を進めガーディアンを増強する為にも御法川は組織改革が必要だと考えているのだ。」

「ちよつと……考えさせてください」

「これまででは敵は怪獣だからと戦ってきた。だが今のソウタには一つ思うところがあり、すぐに答えを出すことはできなかつた。」

その日の深夜、只野市を一望できる高台の公園にて。

「ヒーロー……身近な世界を守る、か……」

一度家に帰ったソウタは、夜風を浴びようとここまで散歩に来ていた。

「考えているのは、やはりこれからの事。今までは、マドカやカズマ、フウカや学校の友達といった身近な人々を守る為に、相手は人ではなく怪獣だからと戦ってきた。」

「でもファルブラックは……相手は人間なんじゃないのか……?」

しかし今度の相手はヒロイックロボ。自分と同じ人間である。しかも聞こえてきた声は、年端もいかない少女のそれだった。

「人間同士で戦うんじゃ、俺はどうすれば……」

想像もしていなかった事態に、思い悩むソウタ。

そんな彼の視界に、深夜二時にも拘わらず小さな人影が写った。

「女の子……?」

その視線の先にいたのは、小さな女の子。白いワンピースを身にまとった、銀色の髪と赤目の可愛らしい少女だった。

第四話 燃える中東

深夜にも拘わらず、一人で高台から街を見下ろす少女。

ソウタは一瞬その神秘的でもある光景に呆然としたものの、流星にこの時間は危険だと恐る恐る声をかけようとする。

「あなたも、居場所がわからないの……？」

「っ……!？」

しかし見られていないのに向こうから話しかけられ、ソウタは思わず驚き一歩引き下がった。

「それとも……他のことで迷ってるの？」

そしてこちらへと振り向く少女。そのルビーのような赤い瞳は、まるで何もかもを見通しているかのようにだった。

「君は？ こんな時間にここにいと危ないよ」

ソウタは彼女が何者なのか、尋ねると同時に家に帰るように促そうとする。

「帰る場所はない……。迷子、なのかな……」

しかしそれはできなかつた。彼女には、帰るべき家がなかつたのだ。

「家があつて、迎えてくれる人がいて……それつて、とても幸せな事なの。そして私は、幸せに選ばれなかつた」

何やら重々しい彼女の言い草から察するに、ただの家出少女というわけではなさそうである。それよりも、遥かに重い背景がある様子だつた。

「私、6歳の頃から中東にいたの。何のために生きてるかも分からないまま、言われるがままに戦いながら……」

「そんな事つて……」

「けどやつと歸つてくれた。私の居場所は残つてなかつたけど、それでも……」

彼女は日本人ではあるものの、訳あつて幼い頃から中東の紛争の只中で生きてきた。時には人を殺し、殺されそうにもなつたのだろう。

そんな境遇で生きてきた彼女だつたが、巡り巡つてようやく帰国する事ができた。その頃には、家も何もなくなつていたのだが。

「歸つてきてよかつた……」

しかしそれでも少女は幸せを感じていた。消耗品のように使い潰されてきて、いつ死んでしまうかもわからなかつた彼女にとつて、再び故郷であるこの国に戻る事が出来たのはまさに奇跡としか言いようがなかつたのだ。

「ごめんなさい、こんな話を聞かせてしまつて……」

「俺たちにとっては当たり前前の事が、とても幸せな事……か……」

自分たちには想像もつかないような壮絶な世界。その真つ只中で、目の前にいる少女が生きてきたという事を知ったソウタの心が揺らぐ。

(正義つて、何なんだろう……)

御法川の言うように紛争には関わらない。ヒーローとして、本当にそれだけでいいのか。そもそもヒーローとは何なのかという迷いが彼の心に芽生え始めていた。

「ありがとう、聞かせてくれて」

その答えを見つけるには、長い時間がかかるだろう。だが、自分がヒーローとして戦う事の意味を考えると、この点では少女との出会いは決して無意味ではなかっただろう。

「それじゃまた……」

話を終えると、そう言つて立ち去ろうとする少女。そんな彼女を咄嗟にソウタは呼び止めて尋ねた。

「俺は結城ソウタ。君は？」

「水無瀬クオン」

水無瀬クオン。それが、その薄幸の少女の名前。

「また会ったら、良かったら話をしよう」

「うん。またね」

そして再び出会ったらその時もまた、今日のように話そうという約束を交わしてソウタとクオンはこの場で別れるのだった。

それから一ヶ月……。

「中東……あの子がいた場所か……」

「どったの？そんな物思いに耽ったような感じで」

飛行中のガーディアンの輸送機の中で、物思いに耽るソウタにカズマは声をかける。

「なんでもないよ」

「ならいいけど、本番でハマしないでね」

そしてフウカは何を悩んでいるのかには興味がなかったものの、これだけはとそう釘を刺すのだった。

「にしてもまっさか海外とはなあ」

この輸送機は今、自動操縦で中東のサウジアラビアに向かっている。こうなった理由を説明するには、一週間前まで遡ることになる。

今から一週間前のガーディアン支部にて……。

「すまないが、君たちには中東のレバスタン共和国まで行ってもらいたい」

「はい？」

御法川の突然の発言に、思わず声を上げるフウカ。突然中東まで行けと言われたらこ
うもなるのは当然だろう。

「中東地域では石油や宗教を巡って何度も紛争が繰り返されてる事は知っていると
思う。ガーディアンとしては紛争介入はできないんだけど、今回は紛争とは訳が違う」

「怪獣がでてきたー！とか？」

「その通りだ」

そして御法川の前置きを遮るように適当に当てずっぽうで発言するフウカだが、それ
は大正解だった。

「近頃石油産出国を狙って、大型のロボット怪獣が出没している。行動目的は恐らく油
田に対する破壊工作。どこのテロ組織の仕業なのかはわからないけど、こいつを放置し
ておけば大規模な中東戦争とオイルショックの再来を引き起こしかねない」

ここ最近、潤沢な石油資源を有する中東諸国を狙ってロボット怪獣が出現しているの
だという。もしもその怪獣により油田が壊滅した場合、被害は人類の文明全体にまで及

びかねない。

当然あちらで対応できればいいのだが、中東諸国は政治的・軍事的問題でガーディアンの展開とヒロイックロボの導入が進んでいない。そして今、救援要請が送られてきたというわけである。

「うっわ、責任重大……」

「なんで俺たちなんですか？もつと強い人たちを送ればいいのに」

だが妙なのは人選だ。想定される被害は人類全体にとつて甚大だというのに、どうして各国ガーディアンのトップエースたちではなく素人同然の自分たちが送られるのか。それがソウタにはどうにも想像がつかなかった。

「残念だが、ガーディアンには各国の政府も絡んでいてね。どの国も他国の為に主力を割きたくないだろう」

「随分と悠長だなおい」

「情けないけど、それ程までにガーディアンは劣化しているという事だよ」
「要するに俺たちは余り物つてわけね」

しかしその理由というものが、いかにも現実の難しさを表したようなものだった。所詮相手の怪獣は一体で、しかも情勢が複雑な地域の支援という事でどこの国も戦力を出し渋っていて日本もその例外ではないのだという。

ヒーローとしても問題だが、世界の危機にしては随分と悠長なものである。

「君たちには本当に済まないと思うけど、これに勝てば人々は君たちの力を認めるしかないだろう。よろしく頼む」

そして御法川は、ここでソウタたちの実力を人々に証明するつもりでもある。もしも認めさせることができれば、軍人的な考えに染まった幹部たちも彼らの存在を無視できなくなるだろうという考えだった。

こうしてソウタたち三人は、石油産出国を襲う怪獣を倒す為に中東へと飛ぶことになった。

輸送機にて。

「そういえば考えさせてくれとか言ってたけど、答えは見つかったのか?」

窓から空を眺めるソウタに、未だはつきりしていない一か月前の御法川の頼みに対する答えをどうするつもりなのかをふと尋ねるカズマ。

「まだ答えはわからないけど……それを見つける為に戦い続けてみるよ」

対するソウタの答えは、まだはつきりはしていない。だがそれをはつきりさせる為に、ヒーローとして戦い続ける事は心に決めていた。

「着陸に入るのでシートベルトをお願いします！」

「はい」

そうして話しているうちに輸送機は高度を下げ、着陸準備に入ったようだ。

「そういえば二人はなんで戦うの？」

着陸までの間、ソウタが振った話題は戦う理由。これからの自分の事を考える為にも、二人の理由を聞いておきたかったのだ。

「うちのは映えるからかな？ 友達とみんな怪獣やつつけたーって！」

「お前らしいな、九条」

まずフウカは話題作りの為。実際に彼女は怪獣撃破に貢献した話を雑談のネタにしていて、流石に同級生が怪獣を倒したともなると充分友達の興味を引くことができていた。

「どうせあんたは男のロマンとかそんなんっしょ？」

「女のくせによくわかってんじやねえか」

そしてカズマはフウカの言う通り、男のロマン。要するにヒロイックロボが好きだからである。

「はいそれ男女差別です」

「なっ、てめえ！」

「てめえじゃありませんお姫様とお呼び！」

「お姫様でもねえだろ！」

当然理由はそれだけではない。街や日常を守りたいという思いも当然あるが、それらの軽い理由が彼らのモチベーションの一つになっているのは確かだろう。

「あの……さ……」

「どーしたの？」

そんな彼らの話を聞いたソウタは、自分の中の煮え切らない思いを二人に打ち明けることを決めた。

「正義の味方って、やっぱり平和を守る為に戦わないといけないのかなって思ってた……」

「そりゃまたどうして」

一見すれば、彼の言う事は至極当然の事にも聞こえるだろう。

だがクオンと出会った今、平和な街を守る為に戦い人間同士の戦争には介入しない。そんなヒーローだけで本当に救われるべき人を救えるのかという疑念がソウタの中にあつた。

「別にどうだっていいと思うぞ？ 好きな女の為に戦うヒーローもいれば復讐の為に戦

うダークヒーローだっているし、理由どうこうは気にしなくていいんじゃないか」

「ありがとう、カズマ」

とはいえカズマの言う通り、ヒーローの形は決してひとつではない。それを聞いたソウタは思った。色々な形の正義があるのなら、きつとクオンのような人を救える正義もあるはずだと。

本当に正しい正義というものはどこにあるのか。その答えを見つけるのは、かなり遠い先の話になりそうだと。

「はいそこまで！ 気晴らしに帰国したらみんなでお茶しない？」

「お、いいな！ ソウタも行こうぜ！」

「そうしようかな」

ここで重い話は聞き飽きたと言わんばかりにフウカはその話題を強引に打ち切りお茶会に誘う。

「お、着いたか」

そうして帰国後の予定ができたところで、輸送機はレバスタン共和国軍基地に到着。タラップが付けられ、ガーディアンズの職員たちに続いて三人は輸送機を降りた。

「本日は御足労いただきありがとうございます」

出迎えにやってきたのは、いかにもエリート然とした軍の士官たち。

「いえ、こちらこそお出迎えありがとうございます」

「早速部屋に案内しますのでこちらへどうぞ」

丁重に案内をする彼らに連れられてソウタたちは基地内を歩いてゆき、物々しい雰囲気の一室の前へと辿り着いた。

「こちらでお待ちいただけますか？」

「わかりました。ありがとうございます」

扉を開けて中へと進む三人。明かりがつけられると、そこはガーディアンとは色々と異なる形のブリーフィングルームだった。

「はあ……何なのあいつら！」

「歓迎ムード……ではなかったね」

早速椅子に座り込み、憤りを露わにする。別に案内をしてくれた士官たちに不満があったわけではない。むしろ彼らは予想以上に丁寧な対応で驚く程だった。

だが問題は周りにいた兵士たち。到着早々彼らを睨みつける者や嘲笑う者、中には唾を吐きかけようとする者までいたのだ。

「多分救援求めたらこんなガキ三人が送り込まれてきたからだろうさ。頼りにされてないぜ絶対」

恐らくそれは、救援としてやってきたのが年端もいかなない少年少女だったからだろう。要するに舐められているということだ。

「うちらも手伝うからあんなアホ共の鼻、軽くこじ開けちゃつてよ！」

「わかつてる。頑張るよ」

その事は逆に一同の心に火をつけた。必ず怪獣を倒し、自分たちを嘲笑した兵士たちの鼻を明かしてやろうとそう誓うのだった。

「失礼します」

そんな時、ドアを開けて入ってきたのは筋骨隆々とした色黒の大男。なかなか威圧的な風貌だがその物腰は低く、見た目ほどの威圧感を感じさせない。

「あなたは……」

「レバスタン軍大佐、モハメド・イブラヒムです。まずは部下たちの非礼をお詫びしたい」

彼の名はモハメド。この国の軍の大佐という高い階級を持つ人物であり、彼こそがガーディアンへの救援要請を政府に提言した張本人でもある。

「いえ、特に何かされたわけでもないのです」

「こちらとしてはあなたたちに縋るしかないというのに……」

敵の怪獣は強大で、レバスタン軍の現行勢力ではとても対抗できない。それがわかっていながらせつかく来てくれた救援を嘲笑う自分たちの部下に呆れた様子で、モハメドはそう言つて頭を下げる。

だがソウタたちも自分たちの力不足は自覚している手前、そこまで言われたとあつて

はそれ以上何も言うことはできなかった。

「本題ですが、こちらが確認されている怪獣の写真になります」

そして話は本題へと移り、モハメドは一枚の写真をモニターに映し出す。それは、他国で撮影されたターゲットの怪獣の姿だった。

「へえ、今回はそこそこかっこいいじゃん。顔は雑だけど」

白っぽいグレーの身体に、流れる血かマグマのような淡く光る赤いライン。全身には多数のキャノン砲を装備し、顔こそやや不細工なものの今回の怪獣はフウカから見ても珍しく格好良いと思えるものだった。

「既に三方国の油田がこの怪獣によつて破壊されています。そして怪獣の進行ルート进行分析した結果、次に現れるのはこのレバスタンです」

次に映し出されたのは、地図で示された怪獣の予測侵攻ルート。これまでの行動指針や地形から計算されたこのラインが示すのは、次に狙われるのはこのレバスタン共和国ということである。

「お願いします。どうかこの国の……この国に住む人々の未来を、守ってください！」

「頭を上げてください。頼りないかもしれないかもしれませんが……その時は全力で戦います」

「ありがとう、少年たち……」

そしてその予測が示す、怪獣の現れる時間。それは夜明けとほぼ同時だった。

翌朝、レバスタン油田付近の街。

「ファルガン、起動します！」

敵は砂漠を越えて、日の出と共にやってくる。緊張が漂う中、ソウタはファルガンを起動させる。

「前口上どーする？」

「こんなのはどうだ？」

気晴らしの為、基地の中に設けられた仮設司令室でフウカとカズマは前口上について相談する。ファルソードに乗るアリサは、それを持っていた。それならソウタにも必要なのではないかと考えた次第であった。

早速カズマは、考えた口上をメールでソウタに送り付けた。

「そうだね。これで行こうか」

「よしっ！」

ソウタも気に入ったようで、結果採用となった。

戦いには無意味な会話ではあるが、気晴らしとしては上手く作用しソウタの気持ちも幾分か楽になっていた。

「敵怪獣、第一警戒ラインを突破！」

ガーディアンから派遣されたオペレーターが叫ぶ。昇る太陽と共に、敵怪獣が現れた瞬間であつた。一歩歩く度に地面が揺れるような感覚が伝い、今回の怪獣が只者ではないと知らしめてくる。

「希望の光で、闇を照らす！」

そしてソウタは口上を叫ぶと、グリップを握り締めファルガンは銃を構えて歩き出した。

「警備隊など足止めにもならん。無駄な犠牲を出さない為にも彼らに任せるしかないか……」

その様子を仮設司令室から見守るモハメド大佐。やはり、少年たちに任せる事には彼も不安が無いわけではなく、勝利と共にソウタの無事を心の中で祈っていた。

「敵怪獣、東から接近。ファルガン、北上します」

しかしファルガンの動きにはおかしなところがあつた。怪獣はアラビア砂漠を通過して東から向かってきている。だがファルガンはそこに向かつていくことなく、何故か怪獣から逃げるように北上し始めたのだ。

「敵はノロマだから、仕掛けるなら奇襲攻撃だ。そこから東に移動して、俺が指示したら南下して敵の背後から一気に仕留めろ！」

「わかってる。指示は任せた！」

これこそが、カズマと考えた作戦。今回の怪獣は今までと比べても非常に鈍足である。その為旋回能力も低いと考え、敵怪獣の後ろへと回り込んで後方から攻めるというプランだった。

「あーあ、うちは蚊帳の外かあ」

自分抜きで作戦が進んでいる事に若干の寂しさを覚えるフウカ。

そうしていると、今までは日の出の逆光でよく見えなかった怪獣の姿が、今はつきりと見えるようになってきていた。

『GYAAAAA!』

重炎ロボット怪獣メラドガン。

全高30m、重量1400t。

圧倒的な重装甲とパワー、そして大量の火炎砲による大火力を誇るまさに歩く要塞とでも言うべき強力な怪獣である。

「敵怪獣、第二ラインを通過」

怪獣がさらに迫る。そしてファルガンは、怪獣の侵攻ルートを外れて東へと走る。

(クオン、君みたいな子はもう二度と……)

そのコクピットの中で、ソウタは一週間前の事を思い浮かべた。この中東で紛争に巻

き込まれ、全てを失った少女の姿を。

もしも怪獣メラドガンに石油を奪われたら、残された石油を巡ってまた新たな紛争が始まるだろう。そうなれば、クオンのような子供たちがまた増える事になる。それだけは、絶対に許すわけにはいかない。

「第三ライン、通過！」

「行け、ソウター！」

合図が告げられた。瞬間、ファルガンは方向転換しメラドガンの進路上に南下しながらライフルを構える。

「ライフルカノン！」

『GYAAAAA!』

そして引き金を引き、死角から砲弾を浴びせていく。だが、何発撃っても装甲には傷一つつかず金属音を立てながら弾き返されるだけだった。

「やっぱりだめだ！」

「時計方向に回り込みながら距離を詰める！」

しかしライフルが弾かれるのは想定内。方向転換して火炎弾の弾幕を張りつつ砲口を向けようとするメラドガンの後ろに回り込むように、動きながら次の攻撃方法を講じる。

「これ……甲羅に隙間あるじゃん。そこ狙えない？」

戦いの最中、怪獣を観察していたフウカは気付く。全身を流れる赤いライン。それが装甲の隙間となっている事に。

「炸裂ナイフ！」

それを聞いたソウタはすぐさま爆薬を仕込まれた炸裂ナイフを抜き、背後から突撃。赤いライン目がけてその刃を突き立てた。

『GYAAA!』

「通らない!? うわああああっ!!」

だがそこにすら攻撃は通らず、逆に尻尾で殴りつけられ返り討ちにされてしまう。

「ソウター！」

「うっそ、左腕損傷率40%!? 一発殴られただけで!？」

「なんて硬さにパワーだ……。これじゃ……」

「こんなもんどすんだよ……」

咄嗟に左腕でガードしたものの、その一撃だけで左腕はほぼ半壊。その凄まじいパワーの上に無敵にも思える防御力。

まるで弱点が見当たらず八方塞がりかと思われたその時、フウカはふとある事に気付く。

「えーつと……何あれ。足跡？」

彼女が目を向けた先。そこにあるのは、メラドガンの足跡だった。

「なんだよ九条。今それどころじゃ……」

「あの足跡、なんかおかしくない？」

「言われてみれば、妙に黒いというか……」

その足跡は、普通に出て来たにしては妙に黒々としており、フウカはそこに違和感を感じていたのだ。

「軍人さん、あそこにドローン飛ばして写真撮れる？」

「わ、わかった。やってみよう」

「焦げてんじやねえのか？ どうせ」

試しに中継車からドローンを飛ばし、メラドガンの足元へと近付ける。

「ドローン、到着しました」

「もつと近付けて！」

そしてさらに接近し、至近距離から足跡の映像を捉えたところでフウカの予想は確信となった。

「ねえソウタ！」

「九条さん!？」

「あいつじゃなくてき、あいつの足跡を撃ってみて！」

「足跡!？」

足跡を撃てという突然の意味の無きような指示に、ソウタは戸惑いを見せる。

「いいから早く！」

「わかった！」

だが策がないのも事実。これが勝利に繋がるのならと、彼は半ば自棄になってメラドガンの通り過ぎた足跡へ向けてライフルを撃ち込んだ。

「足跡が……燃えた……？」

するとどうか。ライフルを受けた足跡は、何故かその後メラメラと燃え始めたのだ。

「そもそもあんなデカくてパワーもある上に火炎弾も撃ちまくれるような怪獣が、国境超えて油田壊して回れるのがおかしかったの！」

「それって……」

「多分、そいつは地面を踏み抜いてスポンジみたいに染み出した原油を吸い上げてエネルギーにしてるからガス欠しないんだよ！」

フウカの言う通り、メラドガンほどのパワーと重量を持つ巨大ロボット怪獣が無補給で暴れ回りながら中東を横断するなど有り得ない。ならば考えられるのは、稼働しながらのエネルギー補給。

このメラドガンは一步步く度に足の裏から地面深くまで衝撃波を放ち、水の染み込んだスポンジを押し込むように地下の埋蔵されたものや石油管の中の石油を染み出させて、それを吸い取る事で動力源としていたのだ。

「つまり何とかして足の裏に火をつけたら……!」

「足の裏から引火して、内部から破壊できる!」

「そゆこと!うちつてば天才?」

つまり弱点は、石油吸入口がある足の裏。なんとかしてそこに火力を叩き込む事ができれば、内側からダメージを与えられるかもしれないのだ。

「でもどうすんだ? 地雷は条約で禁止されて全処分されてるはずだから……」

「とりあえず方法はうちとこいつが考えるからあんたは戦いに集中して!」

「わかった!」

とはいえ、その為の策はまだ考えられていない。それを二人が考えている間、ソウタは時間稼ぎに集中するしかない。

「頼むぞ、少年たち……」

異常なパワーと防御力で無敵とも思われた怪獣メラドガンに対し、とうとう弱点を突き止めるまでに至った彼ら。そんな三人の活躍に、モハメドの思いは疑念から期待へと変わっていくのだった。

「ライフルもナイフも効かない……。ならここは死角に回りながら時間を稼ぐ！」

倒す事はひとまず置いておいて、火炎弾の雨あられを射程範囲から外れる事で避けつつ注意を引き時間稼ぎに専念するファルガン。

幸い動きが遅いせいで、迂闊に攻めずに避けるだけであればそこまで難しくはないようだった。

「思いついた？」

「全つ然だ。何せ怪獣の重量がどう見ても桁違い過ぎる」

一方でカズマたちはというと、足の裏に攻撃する方法に悩んでいた。

「うちは一つ思いついたけど……ソウタ、多分めっちゃ難しいよ？」

「それしかないならやるしかない！」

そんな中フウカがある案を考えついた。しかしそれは、彼女の言うようにとても難しいものだった。

「まずは正面で距離を取って。それで敵が動き出したら、その瞬間に足と地面の間にグレネードをぶち込んで爆発させる。できる？」

敵の攻撃を避けながら、メラドガンが足を上げたタイミングを狙って足元にグレネードを撃ち込み足の裏で爆発させる。しかも横からではグレネード弾が足の下を通り抜けてしまう可能性が高い為、正面から。

正確な狙いは勿論のこと、正面から敵の攻撃を確実に避ける反射神経と、踏み下ろす足の裏に直撃させるタイミングも重要になる。

「わかった。それでいこう」

かなりの難しきだが、それでも策はこれしかない。ソウタは覚悟を決め、グレネードをライフルに装着させて攻撃を仕掛けた。

「あとは距離を取って引き付けたら……」

そして一定の距離を保ちながら、ライフルを一発、また一発と浴びせ注意を引いていく。

狙い通りメラドガンはこちらへ向かってくるが、直後には視界を覆い尽くさんばかりの火炎弾が迫ってきた。

「弾幕が濃すぎて……!」

距離を取っている為避けることはなんとかできるものの、火炎弾に視界を阻まれ思うように照準が定まらない。

だがいつまでもこうして撃たれ続けているのも危険だ。次足を上げた瞬間。そこを狙って……。

「当たれええええっ!!」

引き金を引き、ファルガンがグレネード弾を放った。

「外した!？」

だがその弾丸は足の下を微妙に逸れ、尻尾の付け根へと命中した。当然、そんなところに撃つてもダメージはない。

「もう一回やるしか……!」

すぐさま射程内から退避するファルガン。そしてもう一度、リベンジに飛び込もうとしたその時だった。

「攻撃!? 怪獣に……!」

後ろから砲弾が浴びせられ、メラドガンの注意がそちらへと引き付けられる。

「こちらはレバスタン陸軍だ! 作戦は聞いた。敵はこちらで引き付ける!」

そこにいたのは、レバスタン軍の戦車隊。思いもよらぬタイミングでの援軍だった。

「税金の使い所だぞ! ありったけ撃ち尽くせ!」

「日本人にばかりかっこつけさせるか! 軍の意地の見せ所だ!」

「敵怪獣、出動した陸軍部隊にターゲットを変更!」

いくら撃つたところで、メラドガンには傷一つ付けることはできない。それが分かっているながら、注意を引くためだけに兵士たちは大砲を撃ち続けた。

自分たちの祖国を守る為に、最初は馬鹿にしていた遠い島国から訪れた少年たちが戦ってくれている。その姿にいても立つてもいられなくなった彼らは、少しでもその助

けになるのならと駆けつけたのだ。

「後は頼んだぞ、ヒロイツクロボ！」

「はい！」

これならいける。当初の作戦とはかけ離れてしまうが、ソウタにはその確信があった。

（失敗したら、あの人たちの覚悟が……）

それに兵士たちの覚悟を無駄にしない為にも、失敗するわけにはいかない。

「いつけええええっ!!」

叫びを上げ、背後から突撃するファルガン。そしてメラドガンの足元にスライディングを決めると、ライフルの砲身をすかさず浮いた足の下にねじ込み、引き金を引いた。

『GYAAA!?!』

直後、片足が内側から爆散し絶叫を上げながら倒れるメラドガン。至近距離から放ったグレネード弾は見事足の裏へと直撃したのだった。

「目標、脚部破損！」

「よっしや成功だ！」

「やったあ！」

考えた方法とは違ったものの、作戦に成功して歓喜するカズマとフウカ。

「全軍撤退だ！ 急げ！」

「ラストービーム投下します！」

そしてレバスタン軍も脚部破壊を確認すると同時にすぐさま撤退。直後、上空の輸送機から投下されたラストービームを受け取ったファルガンはその銃口を、起き上がろうともがくメラドガンへと向ける。

「照準セット！」

狙いは、足が爆散した跡の傷口。

「ラストアアアア!! ビイイイイイイムツ!!!」

『GYAOOOOOOOOOOO!!?!?』

叫びと共に放たれた光線は、メラドガンを包み込んだ。そしてその光は傷口から怪獣の全身へと入り込み、内部から跡形もなく爆散させた。

「これが俺たちの力だ！」

「おおおおお!!」

「よっしゃあ！」

「いえーい！」

結果的に皆の力を合わせて戦ったこの戦い。その結果は見事大勝利に終わった。

そして関わった者は皆、ガーディアンも軍も問わず一斉に歓喜の声を上げるのだっ

た。

「負傷者の救助を急げ！ 重傷者が優先だ！」

「救護班、こつちも頼む！」

メラドガン撃破後、レバスタン軍基地。

先程は歓喜ムードだったがいつまでもそうしているわけにはいかず、今は怪我人の救助など事後処理に追われて慌ただしくなっていた。

『戦闘モードを解除。通常モードに移行します』

そんな中、機体の戦闘モードを解除してファルガンから降りるソウタ。そんな彼を出迎えるように、カズマとフウカの二人はそこで待ち構えていた。

「ヒーローのお出ませ！」

「それは恥ずかしいからやめてくれるかな」

「やるじゃんあんた！」

皆で勝ち取った勝利とはいえ、一番大変な役割を果たしたソウタに賞賛の声を浴びせる二人。それに対してソウタは少しくすぐったい気持ちになっていた。

「九条さんのおかげだよ。ありがとう」

「名前がいいよ。フウカで」

「わかった。ありがとう、フウカ」

「どもどもー」

「俺もいいか？」

「いいよー」

こうして海外での戦いも経て、彼らの結び付きは強くなっていく。

「君たちのお陰でこの国の人々の未来が救われた。ありがとう」

「こちらこそ軍の協力がなければ勝てませんでした」

「それでも君たちの力がなければなし得なかつた勝利だ。誇ってくれ」

そして共に国を救った戦友として、握手を求めるモハメド。そんな彼に応じて、三人はそれぞれ彼とも握手を交わすのだった。

一方その頃、日本では……。

「こちらです、御法川さん」

「ついに量産体制が整ったか」

ガーディアン関東支部格納庫。ここで技術者に案内された御法川は、そこである物を

見上げていた。

「最新型ヒロイツクロボ、HR-07ファルガノン……」

そこにはまるで赤鬼のような、かつてないヒロイツクロボの姿があった。

第五話 紅の砲鬼

レバスタン共和国の一件からさらに一ヶ月。いつも通りガーディアン支部へとやってきたソウタたちだが、今日は何やらいつもよりも騒々しい様子だった。

「やあ。君たちか」

戸惑う彼らの前に現れた御法川。そんな彼は何故か、どこか楽しげだった。

「御法川さん、一体どうしたんですか？」

「君たちも見に来るといい。面白いものを見せてあげよう」

「面白いもの？」

そして三人は、御法川に連れられて基地の中を進んでいくのだった。

それから数分ほど。辿り着いた先は、ヒロイックロボの格納庫だった。

「うわ、なんだよこれ！ まさか……！」

扉を開けて中に入った先。そこに佇んでいたのは、見たことのない赤色のヒロイックロボだった。

「一か月前……ちようど君たちが中東まで行っていた間に量産体制が整った新型機、フアルガノンだ。今日ロールアウトされたばかりで大忙しさ」

短い二本角の頭部に、力強さを感じさせる太い手足。さらに目を引くのは、背中に二門装備された大口径のキャノン砲。フアルガンやフアルソードと比べて重量感に溢れたこの機体が新たなヒロイックロボ、フアルガノンである。

「すっげえ！ 見ろよソウタ、まだ未発表の新型ヒロイックロボだぜ！」

「強そうだなあ……」

公式発表よりも先に新型ヒロイックロボを見られた興奮で今にも飛び上がりそうなカズマ。一方ソウタは、茫然と見上げながら思わずそんな感想を漏らしていた。

「なんていうか……赤鬼？」

「その通りだ九条くん。あの機体は赤鬼をモチーフにデザインされている。悪くないだろう？」

フウカの予想した通り、この機体のモチーフはおとぎ話にも出てくる赤鬼だ。確かに強そうに見えて、御法川も気に入っているようだがやはり一つ気になる点があるだろう。

「正義の味方っぽさとしてはどうかと思うけどね」

そう、鬼といえば基本的には物語における悪役。ヒーローのデザインとしては若干

ひっかかるものがあった。

「ファルブラックに触発された開発陣がダークヒーロー路線で押し切った結果だそう
だ」

「自由かよ」

だが、やや悪役感が否めないのもどうやら開発陣の狙い通りらしい。ファルブラックに對抗したダークヒーロー的デザインを目指したらしいが、張り合う所がおかしいとも言える。

「背中のキャノン……もしかして支援砲撃型か？」

「惜しいね」

その武装配置を見たカズマは、このファルガンが支援砲撃型の機体だと予想するが、それは間違いだという。

「確かに元々は支援砲撃型として開発がスタートしたが、そこで我々は致命的な欠点に気付いた」

「致命的な欠点？」

開発開始時点の構想では、カズマの言う通り支援砲撃型として設計されていた。だからそのコンセプトには、ある重大な欠陥があったのだ。

「ヒーロイックロボの戦闘は基本的に1対1。つまり単なる支援砲撃型では出る幕がない

という事だ」

「いやそれ最初に気付こうよ」

それは、ヒロイツクロボの戦闘にそもそも支援砲撃型というカテゴリーが必要ない事だったのだ。なんともいえないミスに、フウカはそうツツコミを入れる。

「そこで設計を見直し、格闘能力も付加して遠近両用の高性能機として完成したのがこのファルガンだ。性能面では、運動性以外の全てにおいてファルガンを上回る機体に仕上がっている」

ならば殴れるようにして近接戦にも対応させようと再設計した結果生まれたのが、このファルガンである。その性能は凄まじく、現行機の中では間違いなく最強の機体だと言えるだろう。

「そーんな虫のいい話ある?」

「お、おい!」

しかしそんな都合のいい話に怪しさを感じ取ったフウカはそう尋ねる。カズマは失礼だと止めようとするが、御法川はその質問に答えてみせた。

「まったく、九条くん。君は本当に鋭い子だ。二度も見ただけで怪獣の弱点を読み解き勝利に貢献しただけのことはある」

どうやら、本当にその都合が良すぎるまでの話を覆すような欠点があるらしい。

「最大の欠点はコストだ。当初の想定を遥かに上回る性能と引き換えに費用も増大して、製造費用だけでなく一度の出撃にかかる費用もファルガンの1.7倍かかってしまう。正直、配備できたとしても全体の5%が限度だ」

確かに性能は非常に高いが、とてつもなく高価。それがファルガンのほぼ唯一にして最大の弱点だった。

「世知辛いですね」

「現実はそのようなものさ」

ヒーローという夢のある世界で、最大の弱点として出てくるものが金という世知辛い現実。ロボットを使っているからには避けては通れない問題ではあるが、目を背けたくない話ではある。

そんな話をしていると、ファルガンのコクピットからパイロットが降りてソウタたちの元を訪れ、声をかけてきた。

「君が噂の高校生ヒーローか」

「俺を知ってるんですか？ あなたは……」

「まだ公表はされていないがガーディアン内では噂になっただけ。俺は八木コウイチロウ。このファルガンのパイロットだ」

八木コウイチロウ。髭をたくわえた40代程の男で、身体は筋肉質。如何にも歴戦の

パイロットといった雰囲気醸し出していた。

「ファルガンのパイロットの結城ソウタです。まだアルバイトという形ですが、よろしくお願いします」

「ああ。よろしく頼む」

互いに自己紹介を済ませたソウタと八木。そんな中、カズマは格納庫を見渡しあるものを見つけた。

「おい、何だあれ」

それはまるでトレーラーのようにも見えるがサイズは遥かに大きく、ヒロイックロボ一機を乗せてもまだスペースがある程の巨大な車両だった。

「気付いたか。あれはヒロイックロボ支援用トレーラー、Gキャリアーだ」

「Gキャリアー……?」

「操縦に必要な人数は二人。連結するユニットによってヒロイックロボ輸送や戦闘支援、避難民の救助・輸送や仮設病院など様々な機能を付与できる新型スーパーマシンだ」

その車両の名はG ガリエアン キャリアー。目的に応じて様々なユニットを連結する事ができ、それによって戦闘支援から災害派遣までありとあらゆる役割を担える、まさにスーパーマシンと呼ぶに相応しい代物である。

「すつげえ、なんでもありじゃねーか!」

「その通り。そしてこの第一号に乗るのは、君たち二人だ」

しかもなんとこの一号機に乗るのは、カズマとフウカの二人だという。それは、これまで色々な形でソウタの助けになってきた二人がよりスムーズにサポートを行えるようにという計らいだった。

「うっそマジで!?!」

「つしゃあ! ガーディアンの最新型一番乗りかよ!」

予想外の展開に驚くフウカと、ガーディアンの新型機の初運用をできるといふ夢のような出来事に歓喜するカズマ。

だがこうして新しい機体を託すという事は……。

「その為にもまずは運用訓練が必要だね」

「待って、訓練ってことは……」

「これから君たちも忙しくなるぞ?」

当然、それには訓練が必要となる。その事を聞いてもカズマのテンションは最高潮のままだが、フウカは面倒だと一人項垂れるのだった。

街を模したバーチャル空間。ここで今ソウタは、自分が初めて戦った怪獣であるカマ

ギラーと戦っていた。

「照準セット！ ラスタービーム！」

『KAMAGIRAAA!!』

ファルガンの放つラスタービームで爆散するカマガラー。同時に、被害総額や撃破タイムなどを示すリザルト画面がモニターに現れた。

『目標を撃破しました。 訓練を終了します』

「はあ……」

訓練を終え、汗を拭いながらシミュレーション用コクピットから降りるソウタ。そんな彼を出迎えたのは、訓練を見ていた八木だった。

「まだ一月半だというのになかなかやるじゃないか」

「ありがとうございます」

実際に訓練を見ていた彼のソウタに対する評価は、ひとまず上々だった。

「技術面ではまだまだ改善点があるが、それを補うだけの判断力が見て取れる」

「やっぱりまだまだですよね……」

「まだ伸び代がある、と考えるんだ。その判断力に技術が伴えば、きつと君はガーディアンでも指折りのエースになれる筈だ」

「ど、どうも……」

八木から見たソウタの評価は、経験が少ない故に技術力は低いが、それを補う程の判断力の高さは一人前以上のレベルというものだった。

もしも操縦技術も身につけることができれば、八木の言うようにいつかエースになる日も遠くないかもしれない。

「それにだ、戦闘データを見たが凄じやないか。特に中東の怪獣、コードネーム《メラドガン》はエースでも苦戦するレベルの強さだ。確かに経験は少ないが、その少ない経験の質は新人の域を超えている」

さらに称賛したのは、中東の一件での怪獣メラドガンの撃破。この怪獣は熟練のパイロットである八木でも戦えば苦戦するレベルで、とても並の新人に倒せるものではないのだそうだ。

「つまりだ。自信を持って、少年」

「はいっ！」

「おう。頑張れよ」

八木の言葉に励まされ、ソウタはある程度の自信を得た。そして指摘された操縦技術も努力して伸ばそうと決意するのだった。

本人には自覚はないが、八木は教える者としては褒めて伸ばすタイプでもあるのだらう。

「じゃあな。応援してるぞ」

「あ、あのー！」

そして去ろうとする八木を呼び止め、ソウタは彼に一つ尋ねる。

「八木さんにとつての戦う意味……正義ってなんですか？」

それは今ソウタが最も思い悩んでいる課題。正義についてだった。

「意味……か。そうだな、正義とは違うかもしれないが、金の為かな」

「お金……ですか？」

対する八木の答えは、金の為。自他問わずこれまで出てきた中では最も正義からかけ離れたようにも聞こえるだろう。

「好意的な言い方をすれば家族の為だ。妻や子供を養う為に金を稼いで、その過程で敵を倒して街や人を守る。そんなもんさ」

だがそれこそが彼にとつての正義だった。怪物を倒し、家族の為に金を稼ぐ。その家族にとつては、間違いなく彼はヒーローなのだろう。

「ヒーローは神様でもなんでもない。そんな大層なもんじゃないんだよ。特にヒロイツクロボなんてもんがある今の時代はな」

昔は正義のヒーローといえは今より高尚な存在だった。中には神秘的とすら言われた事さえあった。

だが今はどうか。人間がヒロイックロボという巨大な機械人形を作り、人間がそれを操縦してヒーローと名乗っている。そのどこに高尚さや神秘性があるというのだろうか。

「ま、何があつたかは知らないがせいぜい悩みな。少年」

「あ、ありがとうございます！」

こうしてまたソウタは、新たな正義のひとつのあり方を知った。いつか彼が、自分にとつての本当の正義を見つける時は来るのだろうか……。

その日の夕暮れ時。暗くなってきた帰路を行く中、ソウタは八木の言葉をふと思い出す。

「そういえば給料入ってたなあ。マドカにたまには贅沢でもさせようか」

そして浮かんだのは、いつも家の事を頑張ってくれている妹のマドカの顔だった。ガーディアンから貰った給料で、彼女にもたまには美味しい物でも食べさせようかと考えたのだ。

「おかえりお兄ちゃん！」

家に着くと、いつも通りマドカが出迎えてくる。音が出ているテレビにふと目をやる

と、今話題になっている女兒向けのバトルアニメが流れていた。

「ただいま。夕飯は用意してる?」

「ただだけど……」

「じゃあ給料が入ってたからさ、一緒に回転寿司でも行こう」

「え、ほんと!? やったあ!」

そしてマドカが夕食をまだ用意していないことを確認すると、ソウタは彼女を回転寿司に誘って無事この後行く事が決まった。

「着替えて準備したら行こうか」

「うんっ!」

午後七時頃。日が暮れた夜道をソウタとマドカは二人で歩いていった。

「久しぶりだね、こうして二人で出かけるのも」

ソウタがヒロイックロボに乗り始めてからおおよそ三ヶ月程。それからというもの、二人で過ごす時間は少なくなってしまうていた。

「仕方ないよ。忙しいんでしょ? 最近」

「心配かけてごめん」

「生きて帰って来るなら文句ないよ？ 私は」

「そう言ってくれると助かるよ」

マドカとしては心配してはいないといえは嘘になる。だが彼女は信じていた。ヒーローが負ける筈はないと。そして、ウィズン襲撃の時に自分と学校の友達を守ってくれた兄は間違いなくヒーローであると。

「お父さんもお母さんも外国だし、私に家族はお兄ちゃんしかいないんだからね？」
「わかってる。死なないよ、絶対」

二人の両親は海外出張で遙か遠く。仕送りこそあるものの、ソウタが高校に入ってからマドカとの二人で暮らしてきた。

親戚もまた九州という海を隔てた遠い場所に住んでいて顔も覚えておらず、マドカにとって今家族と言えるのは兄ただ一人なのだ。

「マドカを悲しませたくはないからね」

マドカを一人にしない為に、負けるわけにはいかない。ソウタがそう決意する中、事は起きた。

『SYAAAAAAAA!!』

けたたましい咆哮を上げながら、再び怪獣が現れたのだ。

「怪獣!？」

光線ロボット怪獣スプラッシュャー。

全高24m、重量620t。

全身に埋め込まれた水晶からシャワーのように無数のレーザー光線を放つロボット怪獣である。

「きゃあああああああ！」

「怪獣だー！ 逃げろー！」

無差別に光線を放つ怪獣スプラッシュャーから逃げ惑う人々。その流れに逆らい、ソウタは立ち向かう決意を固めた。

「お兄ちゃん……」

「大丈夫だよ」

そして心配するマドカを安心させるために手を握りながらソウタはスマートフォンを手にしてガーディアンと連絡を取り始めた。

「御法川さん！ 今現場近くにいるのでファルガンを送ってください！」

『すまないが今回はファルガンはオーバーホール中だ。それに……』

しかしソウタのファルガンは今オーバーホールの最中で、戦う事はできないらしい。このままでは街は守れない。焦るソウタに、御法川は諭すようにこう告げた。

『今日は大人に任せてくれ』

直後、空から怪獣の目の前に何かが見れ、瓦礫を巻き上げながら地面に着地する。それは背中に二門の大砲を背負った正義の赤鬼……ファルガンだった。

「ファルガン!?! ということは……!」

「ファルガノンの初陣だ! この戦い、勝利で飾るぞ!」

その機体に乗っていたのは、あのベテランパイロットの八木だった。

「行こう、マドカ。一緒に避難しよう」

「うん……!」

彼ならきつと大丈夫だろうと信じ、ソウタはマドカの手を引いて避難所へと向かう。

そして今、ファルガノンの初陣の幕が上がった。

「ライフルカノン!」

ファルガノンの先制攻撃。牽制にファルガンと同型のライフルカノンを放ち、スプ

ラッシャーの動きを抑え込もうとする。

「バリアか!?! ならば!」

だが突如その前に現れた光の壁が砲弾を阻み、防いでくる。所謂バリアだ。

ならばとファルガンは取り出した大きな刃と鋼鉄の棒を連結させ、巨大な大斧とし

て構える。

「ガノンアックス!」

対怪獣用重戦斧、ガノンアックス。ファルガンでは装備できないほどの重量を持つこの斧を軽々と振るい、ファルガンはブースターを吹かして敵の懐へと突撃した。

「喰らえッ！」

『SYAAAAAAAAA!!』

一撃。重い一撃がスプラッシャーに叩き込まれ、衝撃が突き抜ける。

そしてスプラッシャーは吹き飛び空中で一回転しながらビルに叩きつけられ、崩れ落ちた。

だが直後、すぐさま起き上がりその瞬間全身の結晶体から無数の光線がファルガンへと放たれた。

「光線か!? くっ……!」

咄嗟に構え、身を守るファルガン。そこに光線が突き刺さり、視界を光が覆い尽くした。しかし……。

「ダメージ軽微……それにこのパワー!」

光が消える。視界が戻った時、八木がモニターを見渡すと表示されたダメージはごく軽微だった。外から見ても、装甲が熱で少し歪んだ程度の損傷。殆ど無傷と言ってもいいほどにダメージは見受けられなかった。

「とんでもない機体だ、このファルガンは!」

コクピットの中で、自身の機体のその圧倒的な性能の前に八木は思わず驚嘆の声を上げるのであった。

一方その頃、ソウタはファルガノンが戦っている轟音を背に、マドカの手を引いてシエルターを目指し走っていた。

「もうすぐでシエルターに着くよ。まだ走れる?」

逃げ惑う人混みの中、息を切らしたマドカに気付いたソウタは道の脇に止まって彼女に声をかける。

「今日は……甘えていい?」

「いいよ。背負ってあげるからほら、乗って」

そしてそう言つて彼はマドカを背中に負ぶつて、再びシエルターへと向かい始めた。

「ありがとう……」

「回転寿司はまた明日にしようか。倒壊しなかったらだけど」

この状況ではもう約束通り二人で回転寿司を食べに行くことはできない。もしこの戦いで倒壊してしまえば、明日というのも叶わなくなる。マドカを喜ばせる為にも、ソウタは目的の店が倒壊しない事を祈っていた。

「あのね、お兄ちゃん……」

「どうしたんだ？」

「この頃怪獣が多くて……ひとりぼっちで、ずっと怖かったの」

一方マド力は、怪獣が出てくるにも拘わらず兄は戦わずに自分の傍にいてくれているこの滅多にない状況で、自分の気持ちを暴露する。

「けど、お兄ちゃんが戦ってくれるから大丈夫って、そう思ってきたんだよ……」

毒茨怪獣ウイズンの襲撃で、助けてくれたファルガンに乗っていたのが自分の兄だと知った時はとても嬉しかった。この思いに間違いはない。

「それでも……お兄ちゃんがあそこで戦ってるより、こうしてお兄ちゃんがそばに居てくれる方が、ずっと安心できるなあ……」

だが戦ってくれているのが自分の兄だと知っても尚、それよりもこうして傍にいてくれる方がずっと彼女の心は満たされていたのだ。

「ごめん。そばにいられなくて」

「ううん、いいの。お兄ちゃんはやりたいことを見つけたんでしょ？ それなら応援するよ」

しかしそれは兄を縛り付けたくはないという思いか、それとも正義のヒーローを独占してしまふことへの後ろめたさか。いずれにせよ、彼女に兄を止めるつもりはなかつ

た。むしろ、戦うのならその背中を押すつもりでいた。

「でも……その分、二人の時は甘えさせて欲しいなあ……」

「わかった」

そして彼女は、二人でいる時間は今まで以上に兄に甘えようと誓う。

「それじゃまずは、シエルターに急ごう」

「うん……!」

一緒に食事をしに行くという計画は台無しになったものの、マドカが思いを打ち明けることで兄妹二人の絆を深める事はできた。

だがまだ安心はできない。彼らの運命は、今も怪獣と戦う赤き鬼へと託されることになる。

『SYAAAAAAAAA!』

「クソッ!一撃一撃は防げるが、この弾幕じゃ近づけない!」

一方、無敵の強さを誇ると思われたファルガノンは意外にもスプラッシュャーに苦戦していた。

確かにダメージは軽微だが、視界を潰す無数の光線はファルガノンの進撃を阻み続け

ていた。

「こうなつたら……!」

このままではジリジリと追い詰められてしまう。状況を打開するべく、ファルガノン
は一旦攻撃を中断しスプラッシュャーの前から退いた。

「こつちだ! ついて来い!」

八木の狙い通り、その後を歩いてくるスプラッシュャー。追ってくることを確認しながら、
ファルガノンが斜面を降りた先。

「いつまでも少年たちにはかり任せている訳にもいかないのでな!」

そこは、人気も建物もない広々とした治水緑地だった。

「一気に決めさせてもらおう!」

『SYAA!』

誘い込まれた事に気付いたスプラッシュャーは慌てて斜面の上へ上がろうとする。だが
がそれも八木の狙い通り。

「そらそらそらア!」

ライフルカノンが無造作に放ち、敵を斜面の上へとさらに追い立てていく。

そしてファルガノンの背中中のキャノン砲が前に倒れて肩に固定され、スプラッシュャー
の背中を捉えた。

「これでトドメだ！」

コクピット内にスコープとトリガーが現れ、八木が照準を定める。

「ツインラスター！ ビイイイイムウツ！！」

『SYAAAAAAAAA!?!?』

直後、キャノン砲から凄まじい光が放たれ斜面を登りスプラッシュャーを爆散させる。そしてその光線はそのまま天へと突き抜け、やがて消えていった。

これがファルガノンの必殺技、ツインラスタービーム。ファルガノンのラスタービームを連装式にしたもので、その威力はラスタービームの二倍。あまりの破壊力に街中での使用が制限された、最強の名に相応しい必殺技である。

「状況、終了ー！」

こうして新たなヒロイックロボ、ファルガノンの活躍により街の平和はまた無事に守られたのだった。

それからしばらく後、怪獣による火災の消化も終わり避難勧告が解除されてシエーターから解放された人々がごぞつて出てくる。

その中に紛れてソウタとマドカもはぐれないよう手を繋いで外に出て夜空を見上げ

た。

「折角久しぶりに二人でのお出かけだったのに、散々だね」

「まあ、次があるさ」

「次……そうだね」

マドカの言うように、せっかくの二人での外食が怪獣のせいで台無しになるという散々な夜だった。だが決してこれつきりではない。生きている限り、時間はまだあるのだから。

「あ、そうだ！ お金いっぱいあるなら買って欲しいものがあるんだけど……」

「何？」

「コートにワンピースに肌着でしょ？ あとポーチに手鏡に……」

だが代わりにと言わんばかりにあれもこれもと欲しいものをねだるマドカ。

「分割で頼むよ」

「仕方ないなあ」

流星にそんな数を一気に買うことは出来ず、戸惑いながらもソウタは分割して買ってやる事を約束した。

「ちゃんと全部買ってもらうんだから、絶対死んじやダメだからね！」

「わかってるよ、マドカ」

「それならよろしいっ！」

つまり欲しいものを全て買うまでは少なくとも、ソウタは死ねなくなつたというわけである。

これもまた、マドカなりのソウタに対する励ましである。だがソウタは、妹の容赦のないおねだりの費用に頭を抱えるのだった。

同日、某所。

「やはりこの程度の怪獣では対応できなくなっているか」

モニターに囲まれた薄暗い一室で、今回のファルガンとスプラッシュャーの戦いを見ている者がいた。

それだけではない。他のモニターにはカマギラーやウイズンやビリビラー、メラドガンなど様々なロボット怪獣の戦闘データが映し出されていた。

「こちらが脱走した例の機体から送信されたデータになります」

そんな彼の元に一人の女が現れ、一本のUSBを手渡す。

「よい、下がれ」

「はい」

それを受け取ると男は女を退がらせ、USBをコンピューターにはめ込みその中のファイルを開いた。

「彼女とファルブラックの同調率が予定通り上昇しているか……」

そこに映し出されたのは、ファルブラックと裸の少女のCGモデル。そして、その双方の同調率を示すパーセンテージのグラフだった。

「いくら我々の手から逃れようとしても、決してあの娘は逃れられない……」

男は、そのデータに満足するとワインをくゆらせながらフレームに収まった少女の写真を、敵意と慈愛が入り交じったような目で眺める。

「魔王復活の日は近い。その日が訪れた時、人類は再び恐怖の渦に呑まれることになるだろう！」

そして彼は、自身の野望の成就を確信しながら不敵な笑みを浮かべるのだった。

夜の暗闇の中、少女は佇む。どこか遠い街か星か、はたまたそれよりも遠い場所を眺めながら。

「っ……っ……」

突然少女は頭痛に襲われ、その場にうずくまった。

「急がないと……」

悟る。自身に残された時間が、限りなく少ないという事を。

「早く会わなきゃ……。私を……。殺してくれる人に……」

そして少女は自らの意思で歩き出した。自らが望んだ、処刑台への階段を。

第六話 久遠の夢

ファルガノンの一件から数日後。

「よう、ソウタ」

「ああ。なんだ、カズマか」

「なんだってなんだよ!？」

放課後の教室で、いつも通り話し掛けてきたカズマをソウタは適当にあしらう。日直の仕事を早く済ませてガーディアン支部まで行きたい彼に、今ここで雑談をするつもりはなかった。

「それよりさ、今日の用が済んだら飯食いに行かね? フウカの奴も誘ってさ」

「ごめん、マドカともう約束をしてるんだ」

「回転寿司だっけか。そりゃ仕方ないな」

そしてカズマは今日のガーディアンでの用事が終わった後にいつもの三人での食事に誘うが、生憎今晚はマドカと行き損ねた回転寿司に行く約束があった。

「ま、日直頑張れや。先行つとくから」

「わかったよ」

用が済むと、先に荷物を纏めて教室を後にするカズマ。

「あ、おつかれちゃーん」

「おつかれー」

直後、教室の前を通り過ぎたフウカとも挨拶を交わした。

中東での一件以降は、互いの仲も進展し学校でもフウカとは友達として話す機会が増えているのだ。

「俺もさっさと済ませて帰るか……」

後は日直の仕事が残るのみ。手早く掃除も済ませ、戸締りも確認して鍵を職員室に戻したところで仕事は終わる。

「失礼しましたー」

そして職員室で一礼し立ち去ると、そのまま玄関で靴を履き替え校舎の外に出た。

「さてと、そろそろ行かないと……」

学校での用は済み、次はガーディアン。そう思って支部に向かおうとしたその時だった。

「……………」

「あの子は……」

ふと遠くに見えた人影。それにはどこか見覚えがあった。

白いワンピースに包まれた華奢な身体に、輝くような銀色の髪の少女。間違いないそれは、ソウタの知る人間だった。

「ま、待って！」

慌ててソウタは、その姿を追いかける。心配してか、はたまた別の感情か。とにかく彼は、少女の事が放っておけなかったのだ。

「はあ……はあ……」

「ソウタ君……だったかな……。久しぶり……」

「クオン……」

追い付いて足を止めたその場所にいたのは、やはり彼の知る人物。中東でのテロや紛争で全てを失いこの国に戻ってきた少女、水無瀬クオンだった。

「せっかくだから街、一緒にどうかね」

なんの巡り合わせか、また会うことができた。この機会にと、ソウタは御法川にメルで今日はガーディアン支部には行けない旨を伝えてクオンを連れ、街の方へ向けて歩き出した。

それから街に着いた二人は、クオンの空腹を癒やす為にとまずはハンバーガーチエー

ンに立ち寄った。箸もまともに使えないであろうクオンでも食べやすいようにと気を遣つての選択だ。

「ありがとう、買つてくれて……」

「お金はそこそこあるからいいよ、これくらい」

ベンチに座つてクオンが頬張るのは、ポリウム満点なビッグサイズのハンバーガー。お淑やかな印象のある彼女だが、意外と食欲は旺盛なようだ。

ソウタはそんな様子を、安いハンバーガーを齧りながら微笑ましく見守っていた。

「平和……だね……」

そしてクオンは、戦地では食べられなかった美味しい物を食べて、笑顔で街を行き交う人々の姿を見てそう呟く。

大人も子供も関係ない、人間同士が殺し合う日常を何年も過ごしてきた彼女にとつて、この光景はあまりにも新鮮に映っていた。

「怪獣は出るけどね」

「それでも、私のいた場所に比べたら……」

勿論この街も、怪獣が現れるなど平和とは言い切れない。だが、それでもクオンが見てきた世界に比べたらずっと穏やかで安心できる場所に違いないだろう。

「こうしてるとなんだか、デートみたいだね」

「でー……………と……………？」

男女二人で街に出掛けて、一緒に軽い食事をして何気ない話を交わす。まるでちよつとしたデートのようだと言いが、クオンはその意味を理解していないようだ。

「ご、ごめん。分からなかった？」

「分からないけど……………どうしたこと……………？」

「こうしてたら恋人同士みたいだねって思ってたよ」

「不思議だね。まだ出会って二回目なのに」

そしてその意味を知ったクオンは、笑いながらそう口にする。

「ははっ、そうだね」

確かにソウタとクオンは偶然二回会ったというだけで、特別な関係でも何でもない。その二人がこうして今デート紛いの事をしているというのは不思議なものである。

「ねえ、ソウタ君……………」

「何？」

ハンバーガーを食べ終えたクオンは包み紙を丸めて袋に捨てると、新たに話題を切り出す。

「あなたはなんの為に……………戦っているの……………？」

「っ……………！」

そして、空気が変わった。

「ヒロイックロボに乗って危ない戦いをしに行く理由を、教えて……」

何故かクオンは、ソウタがヒーローとして戦っている事を知っていたのだ。彼女が何を考えているのかは解らないが、その質問にソウタは自分の思いそのまま答える。

「妹や友達、他にも目に見える範囲の……守れる世界の人たちをこの手で守りたいから、かな」

「やっぱり、あなたなら……」

その答えを聞いたクオンは、笑みを浮かべて告げる。

「自由、平等、世界平和……。そんなからっぽの言葉よりずっと強くて、本気の思いなんだね……」

「君は、一体……」

まるで自由や平等、平和というような言葉を信じていないかのような言葉に、ソウタはそう尋ねる。

「だから、幸せに選ばれなかった。それだけ……」

一体これまでクオンがどれほど凄惨な世界を見てきたのか。平和な世界で生きてきたソウタには、その言葉からそれを推し量る事はとても出来なかった。

その後少しだけ街を回り、最後に来たのは二人が初めて出会った高台の公園だった。

「付き合ってくれてありがとう。楽しかった……」

「それはいいんだ。けど……」

ここまで案内してくれた札を言うクオン。だがソウタの中には何か引つかかるものがあつた。

「なんで君は、そんなに悲しそうな顔を……」

楽しかったと言う割には、クオンの表情は心から笑つてはいなかった。まるで何かの感情を押し殺して、無理に笑っているようだったのだ。

何故と問うソウタに、クオンは答える。

「死ぬしか、ないから。私が生きてたらみんなが不幸になる。みんなだけじゃない、私自身も……」

「死ぬしかないって、どういう……」

「私、呪われてるから。世界中のみんなを不幸にする呪い……」

だがソウタにはクオンの言う意味が理解できなかった。彼女が死ぬ事を強いられる程の、世界中の皆を不幸にする呪いというものの存在が。

「だから、そうなる前に私は死ななきゃいけないの」

「呪いって、そんなのって……!」

「私ね、天国に行きたいの。肉体を脱ぎ捨てた人が行き着く、永遠の楽園に……」

そしてクオンは願っていた。いつかその呪いから解放され、楽園に至る事を。

「生きてたってどうしようもないけど……天国になら、私の幸せもきつとあるはずだから……。お父さんとお母さんも、きつとそこに……」

「天国だなんて、そんな……」

「天国なんてない。それは、幸せな人の理屈……」

天国なんて幻想だと、そんなソウタの考えをクオンはそう切り捨てる。

「紛争、貧困、飢餓……。どう生きたって、幸せになつてなれっこない人たちがいるんだよ。天国っていうのはね、そういう人たちにとっての最後の希望なの」

戦争に巻き込まれて家族も自分の人生も、全てを幼くして失った彼女は信じるしかなかったのだ。天国という名の救いの存在を。

「だから私は正義の味方になろうとした。そうすれば、天国に行けるって信じて……」

「正義の味方って……」

「こんな自分勝手なヒーロー、天国に行けないかもしれないけど……。それでもせめて、苦しまないで消えてなくなれたらいいなって……」

「そんな考え……。そんな生き方、悲し過ぎる!」

正義の味方。ヒーロー。また彼女が何を言っているのか分からなかったが、そんなソウタでもこれだけは理解できていた。クオンのような年端もいかない少女が選んでいい生き方ではない事は。

「君がどんな生き方をしてきたのかも、君の言う呪いが何なのかもわからない！ けど、死ぬ事を希望に……死ぬ為に生きるなんて、君みたいな優しい女の子がそんな……！」
 暗い闇の中で生きる彼女を光の世界に引き込もうとソウタはなんとか説得しようとする。

『GRAAA A A A A A！』

その時、高台の下の街にそれは現れた。

「あれは……怪獣……？」

凍結ロボット怪獣フリグラス。

全高29 m、重量750 t。

絶対零度の冷気を操り、この世のありとあらゆるものを凍らせてしまうロボット怪獣である。

「ありがとう、ソウタ君」

怪獣フリグラスが現れた瞬間、クオンの目つきが変わった。

「クオン！ 君は！」

「待つてる。あなたが私を殺してくれる日を」

そしてクオンはソウタにそう言い残すと、彼に背を向けて高台の崖から飛び降りる。その瞬間辺りに突風が吹き荒れ、咄嗟にソウタは近くの街灯にしがみついた。

「これは……ファルブラック……!?!」

直後、崖の下から現れたのは黒いヒロイックロボ、ファルブラック。開いたそのコクピットに見えたのは、クオンの姿だった。

「またね。次顔を合わせる時は、私はきつと……」

「クオン、行っちゃダメだ！ クオンツ!!」

ソウタは叫び、止めようとするもクオンはコクピットのハッチを閉ざし、ファルブラックは敵怪獣へと一直線に向かって行った。

ついにソウタは知ってしまった。ファルブラックのパイロットの正体を。そしてようやく悟った。自分がクオンに抱いていた感情が何なのかを。

「御法川さん！」

そこから先は迷いはなかった。すぐに彼は携帯電話を取り出し御法川へと電話をかける。

『分かっている。合流ポイントを送信した。急いでそこに向かってくれ』

「わかりました！」

そしてメールで送られてきた地図を頼りに、全速力で走って合流地点の交差点へと向かう。

「クオン、君は絶対に俺が助ける……!」

ついに見つけたのだ。たった一つの、一番守りたいものを。

故に走る。街の平和などの為ではない。たった一人の少女を守る為に。

「おつまたせー!」

合流地点に着くと、そこには既にカズマとフウカの乗るGキャリアーが到着していた。

「ファルガンは荷台の上だ! さっさと行ってこい!」

「わかってる!」

カズマに急かされながら、ソウタは荷台に積まれたファルガンのコクピットに乗り込み起動させる。

「お前さ、なんか吹っ切れたか?」

「守りたい人ができたんだ」

「どつたの? 初恋?」

「……そうかもしれない」

戦う理由を見つけた彼にはもはや迷いはない。怪獣を倒しくオンを助ける為、ファル

ガンが今立ち上がった。

「今からその子を助けに行く。付き合ってくれるよね」

「当然だろ！」

「で、その相手って誰？ 可愛い？」

友達の色恋沙汰となると年頃の少女らしく興味津々になるフウカに、ソウタは指差し告げる。

「今、あれに乗って戦ってる」

「おいおい、まさか……」

「そのまさかだよ」

「ファルブラックかよ!?!」

そしてその少女が、かつてソウタの乗るファルガンを一方的に倒したあのファルブラックのパイロットだと知るや否や、カズマは驚愕の声を上げるのだった。

「驚いてる場合じゃないっしょ！ ドローン飛ばすよ！」

「お、おう」

ひとまずその話は後にして、Gキャリアーは偵察用無人ドローンを射手し、同時にファルガンも凍てつくような寒さと化した街に突入した。

「なんで、来たの……?」

「街を守るガーディアンだからさ。それに……」

一人で戦うつもりだったクオンはソウタに問う。対するソウタは、銃を怪獣に向け構えながら答えた。

「本当に救いたい人を見つけたから」

「そう」

『GRAAAAAAAAA!!』

咆哮を上げ、臨戦態勢に入るフリグラース。もう時間はない。

「私も殺させはしない」

ファルブラックもまた腰を落として拳を構える。そして一歩足を踏み込んだ瞬間

……。

「私を殺してくれる、あなたという人を」

今、戦いは始まった。

「ファルブラック及びファルガン、敵怪獣と交戦開始！」

一方その頃、ガーディアン支部の指令室も戦闘態勢に入りオペレーターがフリグラースとファルブラック、ファルガンの交戦開始を伝える。

「世界が、大きく動こうとしている……」

怪獣の急激な増加に近頃のファルブラックの活発化。ついにはそのファルブラックとの共闘。目まぐるしく変化する状況に、御法川は大きな変化の予兆を感じ取っていた。

「どうすんの、この意味不な状況！」

「ソウタがああ言うならファルブラックは味方だ！ 少なくとも今はな！」

またこの異常な状況の中、カズマとフウカはソウタを信じてファルブラックを味方と判断し行動を始める。

「ミサイルとキャノン装填！ いつでも撃てるようにしておけ！」

「おっけー！」

これまでソウタの戦いを遠くでサポートしてきただけの二人だったが、今回はGキヤリアーでの初の実戦になる。

一層気を引き締めて、カズマは操縦桿を握りフウカは火器管制の操作に入った。

「まずはライフルで牽制を！」

そしてファルガンが牽制にライフルで先手を打つ。

『GRAAAAA！』

「効いてるのか……？」

吸い込まれるように命中する砲弾。絶叫を上げるフリグラーには効いているようにも見えるが、目立った傷は見えない。

「だめ、避けて」

「来る!?!」

フリグラーの口の中が青白く輝き出す。咄嗟にファルガンとファルブラックが避けようとした直後、その口から勢いよく光線が放たれた。

「このッ!」

すんでのところまで避け切ったファルガンはすぐさま銃を構え、反撃に出ようとする。

「弾が出ない!?!どうして!」

だが、銃の故障なのか引き金を引いても引いても弾が出なくなってしまったのだ。

「やらせない」

ソウタを殺させまいと、ファルブラックが格闘戦を仕掛けようとする。

「くっ、これじゃ……」

だが怪獣の纏う冷氣はファルブラックの稼働限界の温度を遥かに下回っていて、後退を余儀なくされた。

「さっきのは多分冷凍ビームあたりじゃない? 直撃食らったビルは凍りついてるし、直撃受けてない銃も近かったから凍っちゃったんじゃない?」

フウカの言う通り、今の攻撃は絶対零度の冷凍光線。その一撃はビルすらも一撃で凍らせ、かすりすらしなかったライフルカノンすらも凍結させ故障させてしまったのだ。

「とりあえずドローン送って確認するぞ。操作出来るか?」

「訓練通りっしょ? 余裕余裕!」

絶対零度の冷気を操る常識外れの怪獣フリグラーズ。相手が未知の領域の存在である以上、その影響を探るしかない。

カズマの指示で、フウカは飛ばした偵察ドローンを敵の近くに送り込んだ。

「ラスターブラッドガン」

そしてファルブラックもラスターブラッドガンで光線を放ち攻撃を仕掛ける。

だが熱の塊である光線も、絶対零度の冷気の障壁に阻まれ殆どが掻き消され、命中したところでかすり傷にもならなかった。

「ビームも温度を下げて弱体化……。厄介な相手……」

当たらなくとも近づくだけでライフル程度なら破壊されるほどの冷凍光線に、近づくこともできずラスタービームすら殆ど効かない冷気のバリア。

機械としての限界があるヒロイックロボにとっては、まるで無敵にも思える相手である。

「うっそ!」

「どうしたー！」

「あの怪獣の周りの温度、マイナス160℃もあるよ！ あ、ドローン壊れた」

近づいた瞬間故障してしまったものの、測定できた敵の周辺温度はなんとマイナス160℃。

「ファルガンの耐えられる温度はせいぜいマイナス80℃……。あれじゃ近づけねえぞ……！」

その温度は、ファルガンの防寒限界を二倍も下回っていた。この時点で、ファルガンのカタログスペックではフリグラーズには近付く事すら叶わないという事になる。

「私が接近戦を仕掛ける。ラスターブラッドセイバー」

ならばとファルブラックは熱の剣であるラスターブラッドセイバーを手に、接近を試みる。

『GRRAAA A A A A A!!』

「そんなの、当たらない」

光の翼を広げ空を舞い、冷凍光線を躲しながらフリグラーズに肉薄し、剣を振り上げるファルブラック。

だがその瞬間、目に見えて出力が下がり機体の表面が凍りつき始める。咄嗟にクオンは操縦桿を引いてフリグラーズから距離を取った。

「やっぱり、この温度じゃ近づけない……」

マイナス160℃ともなると流石にファルブラックでも活動できないようだ。近づくことができず、射撃も弱体化させられる圧倒的な強さを誇る怪獣を前に八方塞がりだと思われたその時だった。

「寒過ぎて近付けない……。あつ」

「どうしたフウカ！」

「作戦、思いついちゃった。あんた、ミサイルを時限爆弾にして撃てる？」

「時限信管だな。そりやできるが……」

ふとフウカがその攻略方法を思い立つ。それに必要なものは、時限信管のミサイルだという。

「よし！ ソウタ、今からラスタービーム飛ばすから受け取って！」

「ラスタービーム!? 効かないって言うてんだろ！」

「これでいいの！」

「わかった！」

効かないというのにラスタービームなどと正気を疑うカズマの声を押しわけ、Gキャリアーに積まれたバズーカを射出させるフウカ。

ソウタはそれを受け取ると、即座に展開させて肩に担いだ。

「ファルガン、ラスタタービーム装着！」

「信じるしかない。彼らを……」

ファルブラックならばともかく、ファルガンがラスタター装備を使うとなるとエネルギーの問題でそれが最後の一撃となる。

一見すると無謀な賭けにも見えるが、これまでも機転を利かせて様々な脅威を乗り越えてきた三人ならば勝算があるのだろう。そう信じて、御法川は指令室から彼らの戦いを見守る。

「ファルブラック、聞こえる？ そつちにも作戦伝えるからちやーんと聞いてて！」

「……うん」

「これからトレーラーに積んでるミサイルをありったけあいつに、取り囲むみたいに叩き込む！」

まずフウカの作戦の第一段階は、ミサイルでの飽和攻撃。時限信管は、近接信管では接近した時点で故障の危険がある為だろう。

だが時限信管で距離を取って起爆させたところで大したダメージは与えられない。

「もしかして……温度を上げる気か？」

そこまで読み取ったカズマは、ようやくフウカの狙いに気付いた。

「こそ。ミサイルの熱で温度を上げて、下がりきる前の一瞬に全力のビームをぶち込む

！　できそ？」

ミサイルは一瞬の間冷気を中和する為のもの。そうして温度が上がった一瞬に最大出力のビームを浴びせるといふ作戦だった。

「それしかないならやるしかない！」

「私も、付き合う……」

他に策がない以上、ソウタもクオンもフウカの作戦に乗る事を決める。しかし口で言うのなら簡単だが、この作戦には問題もある。

「多分爆発の熱も一秒もたないから、タイミングが大事になるけど……」

周囲の温度を上げた瞬間に最大出力の必殺光線を叩き込むという作戦だが、爆発の一瞬に頼る為タイミングが非常にシビアになるのだ。

「信じるよ。ラストビーム、起動！」

「ラストブラッドガン、フルバーストモード」

それでも二人は、成功を信じてビームのチャージを始める。

「チャンスは一回だよ！　ミサイル、一斉発射！」

そしてGキャリアーが全てのミサイルハッチを展開し、内蔵されたミサイル全てを一斉に放った。

「5、4、3……」

それと同時に、タイマーを見ながらカズマがカウントダウンを始めた。

一秒、また一秒と時間が迫る中ビームのチャージも終わり、ソウタは呼吸を整え心を落ち着かせる。

「2、1……」

時は来た。一斉に爆発し、ミサイルの炎がフリグラーズを包み込む。

「これで決める……!!」

「いつけええええ!!」

その瞬間、二人は引き金を引きラスタービームが、ラスターブラッドガンが放たれた。もしこれで倒せなかったらと、息を呑む一同。

『GRAARRARRARRA?!?!』

直後、絶叫を上げるフリグラーズ。そしてそれは全身から光を放ち、次の瞬間大爆発を起こして砕け散った。

「勝った……勝ったんだ……!!」

「やったあ!」

「マジかよ……」

無敵とも思われた怪獣の撃破に歓喜の声を上げるソウタとフウカ。一方カズマは、まだ勝ったことが信じられない様子だった。

「ありがとう、ソウタ」

「一緒に行こうクオン！ そうすれば……！」

その後、一言言い残し翼を広げて去ろうとするファルブラックをソウタは止めようとする。

「次会う時はきつと、殺してくれるよね」

「ダメだ！ くそつ、動けよファルガン！」

だがペダルを踏んでも操縦桿を倒しても、ファルガンはびくりとも動こうとしない。そしてコクピットに大量に出てくる警告表示。

実は離れて戦っていたとはいえ周囲の気温はマイナス80℃を下回り、ファルガンの限界を超えていたのだ。故に、ここに来て無理が祟り故障してしまったのだろう。

「信じてる。あなたなら、私に……棺の中で夢を見せてくれることを」

この戦いでクオンはソウタたちを認めた。彼らこそが、自分を呪いから解放してくれる存在だと。

「それがきつと……幸せな夢だつて」

「ダメなんだよそんな風に考えちゃ！ きつとそれ以外の道だつて……！」

そんな生き方をしてはいけないと、ソウタは必死に説得する。

しかし今のファルガンでは止めることもできずファルブラックは空高くへと消えて

いった。

「なんで……なんでなんだよッ!!」

モニターを殴りつけ、悔しさを顕にするソウタ。本当に一番守りたいものをようやく見つけたというのに、結局何も出来なかった。

「こんなのじゃ……ダメだ……!」

そして彼は誓うのだった。今のままではだめだと、今よりずっと強くなる事を。

その後、ガーディアン支部の格納庫にて。

「あーあ、ダメだなこりや。フルメンテ確定だ」

「げえ、徹夜確定じゃん……!」

回収されたファルガンを目の当たりにして嘆く整備士たち。完全に動かなくなるまで壊れてしまったのだから無理もないだろう。

「おい、大丈夫かソウタ!」

「変な作戦やらせちゃってごめん! 大丈夫!?!」

「問題ないよ」

ファルガンはそのような状態とはいえ、パイロットであるソウタは幸い無傷。

無事を確認し合う彼らの元に、御法川が現れた。

「御法川さん……」

「今日もよくやってくれたね、三人とも」

今回の怪獣だが、あまりの強さに既にソウタたちとファルガンでは勝てない事も想定されてファルソードやファルガノンを含めた複数機での対処も準備されていた。

だがファルブラックの加勢もあつたとはいえ、見事彼らは怪獣フリグラーズを打ち倒した。その働きは既に、当初の御法川の期待を遥かに超えたものだった。

「俺……見つけました」

「見つけた？」

そんなソウタが見つけたというもの。それが何なのかを御法川は問う。

「これまでは身近な世界を守りたいと思って戦ってきたけど、その境界が曖昧で、そのせいで踏み切れないところもあつて……」

身近な世界を守る。そう思つてこれまで戦ってきた彼だったが、それでもまだ曖昧なものがあり理由としてははっきりしていなかった。

「けど、やっとわかつたんです。俺が一番、この手で救いたいものが」

だがようやくはっきりとした守るべきものをソウタは見つけた。それが何なのか、気づいたように御法川は言う。

「初恋、かな？」

「……はい。小さな頃から不幸という不幸を一身で背負つて、満足に幸せも与えられずに生きてきた一人の女の子を……俺は助けたいって思えたんです。心の底から」

「君がそこまで言う相手は……」

ソウタにとつて戦う理由として足るほどの守るべき相手。それに興味を隠せない御法川はもう一度尋ねた。

「水無瀬クオン。ファルブラックのパイロットです」

その答えは、彼を驚かせるには充分なものだった。

「なるほどね」

そして事情を聞いた御法川は、納得したようにそう頷く。

「個人的な理由ですみません」

「いや、いいんだ。むしろ君を選んで正解だったよ」

自分が想う少女の為に戦うという個人的な理由の為にファルガンを使う事に引け目を感じるソウタだったが、御法川の考えは逆だった。

「想い人の為。それ以上に人間が強くなれる動機はないだろう」

「ありがとうございます……ございます」

「決してその子をこれ以上不幸にするんじゃないぞ。生かすにしても、殺すにしてもだ」
「……はい」

クオンを救う為に戦う事を選んだソウタだが、それがこの先彼女にどのような結末を齎すのかはわからない。

だがそれが、決して彼女を不幸にする事はないようにと御法川はそう釘を刺すのだった。

「とまあ話しておいて早速ですまないが……」

クオンとファルブラックについては一通り話したところで、御法川は話を変える。

そこで告げられた言葉は、ソウタにとってはとても衝撃的なものだった。

「結城くん。君には、ファルガンを降りてもらおう」

突然の宣告。その言葉に、彼はただ立ち尽くすことしか出来なかった。

第七話 究極の力

「ファルガンを降りろって……どういうことですか！」

突然の宣告に戸惑うソウタ。これまで共に戦ってきた機体であるファルガンを手放せなどと言われては当然だろう。

そんな彼に対し、御法川はその真意を告げる。

「結論から言うと、もう君のファルガンは限界だそうだ。短期間でのファルブラックを含めた強敵との戦い続けるに加えて、先の凍結怪獣との戦いで追い打ちをかけられた。これ以上あの機体を使い続けるのは難しいだろう」

これまでソウタのファルガンは、ウイズンやビリビラー、メラドガンといった様々な怪獣と短期間で戦ってきた。

それらは現代のロボット怪獣の中でも特に強力な類であり、加えてファルブラックとの戦闘。さらには今日のフリグラスとの戦いで甚大なダメージを受けてしまい、ついに機体が限界に達してしまったのだ。

「でもファルガンがなかったら……」

「ファルガンは量産機だ。その気になれば予備パーツは幾らでもあるし、乗り換えもで

きる」

とはいえファルガンは量産機。日本国内だけでも20機あまりが配備されており、全世界で完全な状態にある機体は300を超えている。補充しようと思えば予備は幾らでもあるのだ。

「だけど僕は、君たちにとつてもはやファルガンでは力不足だと考えている」

しかし御法川の意図は、そことは別にあつた。

「力不足……?」

「今回の件で確信したよ。これから君たちはさらに強力な怪獣や、ファルブラックとも戦う事になるだろう。そうなると、最も低コストの量産機であるファルガンのスペックでは足りないだろうとね」

ソウタをファルガンから降ろす理由。それは、この先彼の前に更なる強敵が立ち塞がる事を見越しての事だつた。

実際作為的なものなのか偶然なのかはわからないが、彼らは怪獣の中でも有数の強敵たちと戦ってきている。それらはこれまでファルガン一機で対処出来た事自体が称賛すべきものであつた。御法川はこの機会に、ソウタの機体を更新しようと考えているのだろう。

「それならファルソードですか?それともファルガン……」

「詳しくは明日話そう。学校には連絡しておくから、明日は欠席して早めに来て欲しい」
「わかりました」

ともあれ今はもう夜の七時を過ぎている。話の続きは明日として、今日この場は解散となった。

そして帰りのタクシーの中。

「いやー、やってみたらできるもんだね！」

「あんまり調子乗るなよ？」

「わかってるわかってる！」

G キャリアーでの初陣の大成功でやや浮かれているフウカ。カズマはそんな彼女を窘めようとするが、あまり耳には入っていない様子だった。

「ソウタ、大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫」

そんな中でもフウカは、どこか思い悩んだ様子のソウタに気付くと声をかけ、ソウタは笑って大丈夫だと返す。

「御法川に何言われたんだ？」

「ファルガンを降りろってさ」

「はあ？ なにそれおかしくない!？」

だがカズマの問いに今日起こった事を話すと、フウカは即座に抗議の声を上げた。

「早い話、ファルガンじゃ性能不足だつてさ。多分新しい機体を用意してくれてるんだと思うけど……」

「そのファルガンもぶっ壊しちゃったからな」

「そんなら大丈夫だから気にしない気にしない!」

しかしその裏の事情を知ると彼女は、大丈夫だとソウタを励まそうとする。

(新しい機体に乗ればクオン、君を救い出せるんだろうか……)

カズマとフウカは、ソウタがファルガンの事で思い悩んでいると思っっているがそうではない。

ファルガンではない、新しいヒロイツクロボ。その力があれば本当にクオンを救えるかという事だった。

「あ、そうだ!」

「どうした?」

そんな事はつゆ知らず、フウカはある事を思いつく。

「ソウタって今日妹と回転寿司行ってくつて言ってたよね!」

「え、まあ……」

「それ、みんなで行くようよ！」

そして時間は夜の九時前。

「えつと……よろしくお願ひします」

店員に案内され、回転寿司店のテーブル席に座る三人。またそこにはもう一人、マドカの姿もあつた。

「ちよつと待て。お前の妹マジで可愛くね？」

「マドカちゃん超可愛い！うちの妹にしていい？」

周りが歳上ばかりで緊張している様子のマドカ。その可愛らしい姿に、カズマとフウカは思わず釘付けになる。

「あはは……」

マドカは幼さを残しながらもどこか大人びた雰囲気があり、その容姿は素朴でありながら美少女と言つても差し支えない程である。

自分の妹の可愛らしさが絶賛されているという状況に、ソウタはただ苦笑いしかできなかつた。

「兄がいつもお世話になってます」

「俺たち二人ともお前の兄貴に命を救われてここにいるわけだから気にすんな。年上とか気にしないで友達と思ってくれ」

「そそ！ てわけでお姉ちゃんともお友達になろー！」

「ありがとうございますっ！」

こうした形で顔を合わせたからには、カズマもフウカもマドカとは友達の妹ではなく、対等な友達という関係を望んでいた。

それもあつて彼らがスムーズにマドカと打ち解けていく中、ソウタは寿司の注文をする為のタツチパネルに手を伸ばす。

「みんな、何か頼んで欲しいのあるかな」

そして最初にそれぞれどのような寿司を頼むかを尋ねた。

「俺えんがわで」

「うちはビントロ！」

「私はかにみそ軍艦にしようかな」

そんな彼に各々が頼んだネタは、どれも一風変わったものばかり。敢えてマグロやサーモンなどのメジャーなものではなく、スーパーの寿司では食べられないような物を選んでいた。

特にマドカは小学生らしくない選択である。

「じゃあ俺はこれで」

ちなみにソウタが頼んだのは赤貝。

こうして四人は、他愛ない雑談を交わしながら回転寿司での夕食を楽しむのだった。

「ふう、たくさん食べたあー！」

そして夜10時頃。家に着いた途端にマドカは満足気にソファに倒れ込んだ。

「お兄ちゃんの友達、いい人たちだったね」

初めて顔を合わせた、兄の友人であり戦友の二人。始めは緊張していたものの、話してみるとマドカの予想以上に親しく接してもらい上手く打ち解ける事が出来ていた。

それと同時にマドカは、兄が付き合っているも安心出来る友人たちである事を確認し安心していた。

「あの二人がいたから俺はこれまで怪獣と戦ってこれたんだよ」

「そうなんだ」

実際マドカは知らないが、これまでもソウタは何度もフウカの機転、カズマの知識や行動力に救われている。その戦いの経験の数々は、充分二人を信じる理由に値するもの

に違いないだろう。

「で、お兄ちゃん。フウカさんの事は好きなの？」

だがそれはそれとして、同じ年の思春期の男女が仲良くしているとすればやはり勘ぐってしまうもの。

「勿論だよ。大事な仲間だし、友達だからさ」

当然ソウタは、フウカの事が好きかと言われたら否定はしない。突然無茶に引き込んでしまったとはいえ、今では共に戦う仲間なのだから。

「そうじゃなくて、女の子として気になるかってこと！」

「……それは一人、別にいるんだ」

しかしマドカが期待していたような恋愛感情はフウカに対しては抱いていない。

「フウカさん以外にいるの？」

「ごめん、今は詳しくは話せない」

その相手とは、あのファルブラックのパイロット。どんな秘密を抱えているのかさえ知れない彼女の問題に、マドカを巻き込むわけにはいかなかった。

「でもいつか紹介するよ」

だがそれは今の状況での話。テロや紛争といった闇の世界で生きてきたクオンをいつかは光の世界へと救い出し、マドカとも顔を合わせられる日が来る事をソウタは信じ

ていた。

「お兄ちゃんが好きな人かあ……」

「あ、明日学校休んでガーディアンに行くから帰る時間がいつになるかわからないよ」

「うん、わかったー。それじゃおやすみー」

こうして今日もまた一日が終わる。

明日という日に、全てが変わる事など全く知らぬまま……。

翌日、約束通り学校を休んでガーディアン支部を訪れたソウタは、出迎えに来た御法川と共に目的の場所へと向かって廊下を歩いていった。

「すまないね。わざわざ来てもらって」

「いえ。俺にもきつと、必要な事ですから」

「水無瀬クオンの為、かな？」

「……はい」

ファルガンを失ったソウタは、今すぐにも新しい力を必要としていた。自分の為ではなく、救いたい少女の為に。

その為ならば学校を一日休む程度ということはない。それよりも彼は、早く新し

い機体がどのような物なのかを確かめたかった。

「来てくれ。こつちだ」

御法川にそう言われて乗り込んだのは、普段から何気なく使っているエレベーター。ソウタが不思議に思っていると、御法川は行き先のボタンを不規則に押し始める。すると、エレベーターは地下に向かって動き始めた。

「どこに向かってるんですか？」

「地下13階だよ」

地下13階。そうは言うものの、案内表示にそのような階はない。だがエレベーターは、表示を超えてさらに地下へと向かっている。

実は先程御法川が不規則に行き先ボタンを押していたのは、隠された地下へと向かうパスワードを打ち込んでいたのだ。

「こんなところが……」

「ここにあるのは、極秘プロジェクトで開発されたものだ。絶対にまだ口外しないと約束できるかな」

そして辿り着いた地下13階にあったのは、嚴重にロックされた大きな扉。その先に隠されているのは、未だ世間には知られていない存在である。

「……はこ」

「では、開けるぞ」

扉が開き、光が漏れ出す。

一瞬ソウタは目を覆い、その後瞳を開けるとそこにはまだ見たことのない一機のヒロイックロボが佇んでいた。

「こ、これは……？」

「HR—EX01ファルブレイヴ。勇者の名を冠する、究極のヒロイックロボだ」

それこそがガーディアンが密かに開発していた究極のヒロイックロボ、ファルブレイヴである。

「ファル……ブレイヴ……」

ミリタリー調のファルガンとは似ても似つかない、ヒロイックな白い機体。頭には黄金のブレードアンテナが三本伸び、その背中には四枚の羽根を背負っている。

その姿は、まさに勇者と呼ぶに相応しい英雄的なものだった。

「御法川さん。お二人をお連れしました」

「うわっ、なんだこれ！」

「つつよそー」

ファルブレイヴの姿にソウタが圧倒されていると、遅れて研究員に案内されたカズマとフウカもやってきた。

「どうして二人も……」

「連携するんだから、知っておく必要はあるだろう?」

彼らがここに呼ばれた理由は、Gキャリヤーで共同戦線を張る故に事前に知らせておく為。そう、つまり……。

「それってまさか……」

「この機体のパイロットは結城くん。君だ」

この極秘開発された最強のヒロイツクロボ、ファルブレイヴはこれからソウタの機体となるのだ。

「どうして俺なんかが……? もっと強い人は沢山いるのに……」

「この機体は、これからの戦いの主人公となる人間をパイロットとする事を想定して開発されているんだ。そしてガーディアンにおいて適性が一番高いのは君だ」

この機体のコンセプトは、物語の主人公となるに相応しい機体。つまり過去に魔王を討ったヒーローに代わる、新世代のスーパーヒーローとしてこの機体は開発された。

そして御法川がパイロットに求めていたのは技術ではなく、主人公としての素質。

これまでのソウタたちの活躍をその目で確かめた御法川は確信していたのだ。このファルブレイヴのパイロットに相応しいのはソウタなのだ。

「それに……お姫様を助けるのは勇者と相場が決まっているだろう? やはりこの機体

は、君にこそ相応しかった」

その上、今の彼の目的は一人の少女を救う事。まさに勇者の名を冠するに相応しい目的とも言える。

「俺が……この機体を……」

だがソウタにはまだ実感がない。成り行きでファルガンに乗り戦い始めたとはいえ、このような短期間で機密レベルの最新型に乗るなどと想像もしていなかったからだ。

「乗ってみるかい？」

そんな彼に、御法川はとりあえずの試乗を提案する。

「いいんですか？」

「シミュレーターだけだね。二人はいつも通りアシストをしてやってくれ」

「はい」

「わかりました！」

条件はいつも通りカズマとフウカのバックアップ付き。二人はその為にコンピュータの前に陣取ると、慣れた手つきでオペレーションシステムを起動させた。

『シミュレーションモードを起動します』

「な、なんだこれ……」

一方でソウタはコクピットに乗り込んで起動させた矢先、思わず驚愕してしまう。

「デュアルバッテリー、斥力式飛行装置……!? 内蔵式ラスタビームにラスタセイバーも標準装備……」

直列配置された二基の動力源スーパーイオンバッテリーに、斥力を発生させて空を飛ぶ飛行装置。さらには外付けで装備するまでもなく複数のラスタ装備を内蔵までしているのだ。

出力がファルガンの二倍を超えているなど、カタログスペックを見るだけでも異次元のレベルである。

「御法川さん、なんなんですかこれはー」

「試してみるといい」

まるでゲームでチートを使ったかのようなスペック表示に、馬鹿にされていると思いきや憤るソウタ。

そんな彼に仕向ける為、御法川はUSBをコンピュータに差し込み仮想敵の怪獣を送り込んだ。

『標的、カマガリタイプ。機数12』

敵はソウタたちが初めて戦ったロボット怪獣カマガリ。だがその数はなんと1212だった。

「12体!? 無茶苦茶ですよこんなの！」

「いいから戦ってみるんだ。死にはしない」

「もうどうにでもなれ! ファルブレイヴ、テイクオフ!」

一体でさえ手を焼くロボット怪獣が12体。絶望的な状況だが、所詮シミュレーターではない。ソウタは半ば自棄になりながらファルブレイヴを怪獣軍団の中へと突撃させた。

「ラストアアアビイイムツ!!」

一体一体相手にしてはキリがない。開幕早々ファルブレイヴは高出力のラスタービームを掌から放ち、薙ぎ払う。

『K A M A G I R A A A A A A A?!?!』

「三体は倒せたけど……こんなの……」

爆散する三体の怪獣。残りは九体。

だがラスタービームを使っただけからには残り九体分のエネルギーなど残っていない。そう思っていたのだが……。

「エネルギーが……全然減ってない……!?!」

ラスタービームを撃ったにも拘わらず、残りエネルギーはなんと九割を上回っている。

ファルガンならば既に残り三割を下回っているとところだが、ファルブレイヴはこの程

度の消費など物ともしていなかった。

「ソウター！ 後ろからくるぞー！」

「くっ……！」

カズマの警告に反応し、咄嗟に操縦桿を引くソウター。

その瞬間、ファルブレイヴの背中の中羽が輝き出し機体が空高く舞い上がった。

『KAMAGIRAAAAA!!』

直後、地上のカマギラー軍団から一斉に怪光線が放たれるが、その光は全てバリアに阻まれて霧散した。

これがファルブレイヴの特殊装備、リパルシヨンリフター。機体の周囲にリパルシヨンフィールドを展開し、敵の攻撃を斥力により防ぐと同時に機体と地面の間にも斥力を発生させて飛行すら可能とする非常に強力な装備である。

「ラスターセイバー！」

『KAMAGIRAAAAA?!?!?』

そして光の剣を展開し急降下。カマギラーの一体を脳天から両断し爆散させた。

ラスターセイバー。ファルソードのラスターソードをベースにして、ファルブラックのラスターブラッドセイバーを目標に開発された上位装備だ。

「おいおい、なんだこりゃ……」

「どんだん怪獣消えてっつてない?」

そこから先は、あまりにも一方的だった。空を舞い、光線を弾き、光の剣で怪獣たちを切り裂いていく。

「エンダースラツシュ!」

やがて最後の怪獣もラスターセイバーに両断され、爆散。

『目標を撃破しました。訓練を終了します』

同時に、訓練の終了を告げるアナウンスが鳴りシミュレーションが終了した。

「12体の怪獣を、一分もしねえで……」

「うっそでしょ……」

表示されたクリアタイムは、57秒。カマギラー一体あたりで考えると五秒以下という驚異的な結果である。

「ファルブレイヴ……。この力があれば、クオンを……!」

ヒロイックロボという枠を超越した、究極の戦闘ロボットと呼ぶに相応しい圧倒的な戦闘力。これがあれば、同じく強大な力を持つファルブラックとも渡り合いクオンを救う事も出来るという確信をソウタは得ていた。

「御法川だ。何があった」

だがその時、御法川は電話を耳に当て不穏な表情を浮かべていた。

「何だと!？」

「どうしたんですか?」

「君たちも一緒に来てくれ」

そしてファルブレイヴのお披露目を切り上げ、慌ててソウタたちを連れて上の階に上がろうとする。その理由とは……。

「敵の……犯行声明だ」

「お待ちしておりました」

それから数分後。彼らが指令室に到着した時には既に他の職員たちも集結し、臨戦態勢に入っていた。

「繋いでくれ」

そして御法川が席につくと同時に、指定されたチャンネルで通信回線を開く。

『よくぞ現れた、日本国ガーディアン総司令官、御法川ケンジ』

直後、画面に現れたのは男だった。顔は影になってハッキリとは見えないが、クオンにも似た銀髪に美しくも筋骨隆々とした肉体を持ち、容姿端麗な人物である事が窺える。

「何者だ！」

『我々は黒曜旅団。魔王を復活させ、世界に恐怖と絶望による平穏を齎す者だ』

男は宣言する。黒曜旅団と呼ぶ組織の蜂起を。そして、魔王復活の始まりを。

「魔王復活だと？」

「おいおい嘘だろ……」

「魔王ってあの魔王？」

魔王復活という言葉に、辺りには動揺が広がる。

魔王とは、過去にこの世の物理法則とは異なる体系の魔法科学という超科学を手に乗った如く世界に宣戦布告をした侵略者。魔法科学により産まれた怪獣は、通常兵器を物ともせず世界を蹂躪した。

怪獣や魔王はヒーローに倒されたものの、その影響は今でも残っている。その魔王が復活したとなれば、ヒロイックロボでは対抗出来ない可能性が極めて高いのだ。

『何十年もの昔、魔王が死んでから世界は変わったか？否！人類は墮落し、過ちをも繰り返し、来る日来る日を怠惰に過ごしているに過ぎない！』

そして魔王が倒れてから数十年。人々は怪獣の再来を恐れヒロイックロボを建造したものの崩壊しかけた文明を建て直す事はなく、2010年代後半レベルまで後退した文明の中で今を生きている。

10年代後半の街並みの中に、ヒロイックロボという巨大ロボットが存在しているという歪な光景が、それを証明している。

『故に我々は、魔王を復活させる！ 絶望による支配で墮落した人類を矯正し、価値のある明日を迎える為に！』

ヒーローの代替品に守られながら、古い文明や戦争といった過ぎ去った過去を繰り返すだけの人類を男は墮落したと断ずる。

そして黒曜旅団の目的は、そのような世界を変える事だという。

「ふざけたことをー」

当然御法川はそんな事は認めない。今を生きる人々の暮らしを守る事が、ガーディアンの使命なのだから。

『手始めに我々はガーディアン関東支部を消滅させ、意志の証明とする。その様子は、全世界にリアルタイムで中継される』

そして、終末の時は訪れた。

『行け、究極怪獣ゼットラゴンよ！ 人類よ、恐怖せよ！ 今こそ、絶望の宴の幕開けだッ!!』

「上空に高エネルギー反応！これは……超空間ゲート!?!」

「バカな！ その技術は今の人類にはない筈だ！」

鳴り響く警報。同時に、支部付近の上空にモニターが異様な物を映し出す。それは、ワームホールのような巨大な穴だった。

超空間ゲート。これもまた、過去に魔王が齎した魔法科学の産物の一つだ。

「敵怪獣、現れます！」

そして現れた巨体。その風貌は凶悪でありながら洗練されたデザインを持つ、まさに機械仕掛けの邪竜と呼べるものだった。

『ZEGYAAAAA!!』

究極ロボット怪獣ゼットラゴン。

全高30m、重量999t。

黒曜旅団の超科学の粋を集めて建造された史上最強、究極のロボット怪獣である。

「自動防衛システム起動！ 八木のファルガノン及び、藤堂のファルソードを発進させろ！」

「了解！ 両機、発進スタンバイ！」

敵は危険だ。そう判断した御法川はすぐさま自動防衛システムの起動、そしてファルガノンとファルソードの発進を命じる。

「目標、第一防衛線を突破！」

無尽蔵に防衛システムから放たれるミサイルに機関銃の雨あられ。だがゼットラゴ

ンはそのような攻撃などものともせず防衛ラインを突破していく。

「超空間ゲートから出てきたんだ。ただの怪獣ではない筈だが……」

だがここまでは通常の怪獣でも考えられる範囲内。超空間ゲートから現れる怪獣が普通な筈がないと、御法川が警戒した矢先だった。

「これは……目標に超高エネルギー反応を確認！」

ゼットラゴンの頭部装甲が展開し、頭そのものがビーム砲に変形。凄まじい光を放ちながらチャージを始める。

「まずい！ 全員、伏せろッ！」

『AAAAAAAAAAAAAAAAッッ!!!』

そして、光が放たれた。

「光線、地下区画に到達！ シェルター第一層、第二層突破！」

地下シェルターの下にある指令室にまで衝撃が伝わる程の威力。その一撃、たつた一撃で頑丈な多層シェルターのうち二層が突破された。

「まずい、これ以上撃たれては……！」

この場所のシェルターの層は全部で四層。もしも次光線を撃たれてしまえば、その全てが破壊されゼットラゴンの侵入を許してしまう。それだけは何としても避けなければならぬ。

「ここから先には行かせない！」

「ファルソード、援護するぞ！」

最悪の状況下で、敵の侵攻を阻止する為にアリサのファルソードと八木のファルガノンが立ち向かう。

この二機こそが、今の関東支部が用意できる最高の戦力である。

「俺も行かなきゃ……！」

「行くな結城くん！ブレイヴの機体は調整中だ！」

彼らに続いてソウタも出撃しようとするが、新たな専用機であるファルブレイヴは最終調整が終わっておらず未完成の状態であり、とても出撃できるものではない。

「我が剣の錆となれッ！」

「こいつはおまけだ！ ライフルカノン発射ッ！」

ブロードソードを抜き、ファルソードが突撃する。そしてファルガノンが二丁のライフルカノンで援護し、二機がかりでゼットラゴンへと攻撃を仕掛けた。

「こいつ、無傷か!？」

しかし、ライフルの砲弾は甲高い金属音を立てながら装甲に弾かれ、そこには傷一つついていない。

「ファルソードの剣を物ともしないとは……うぐっ!？」

そしてファルソードの剣すらも弾き、尻尾のカウンター攻撃でゼットラゴンはファルソードを地面へと叩きつけた。

「藤堂ッ！」

『ZEGYAAAAA!』

さらに追撃。ゼットラゴンは太い腕で掴みかかり、ファルソードの左腕を引きちぎった後機体を投げ飛ばした。

「左腕が……!?!」

「脱出しろ、藤堂ッ!!」

左腕全損、その他も中破。ファルソードはもはや限界であり、庇うようにファルガノンが前に立つ。

だがその瞬間、再びゼットラゴンの頭部のビーム砲が展開し二機を捉える。

『AAAAAAA!!!!』

「ぐあああああつ!!」

「ぐ……う……!!」

そして放たれた光線が、ファルソードとファルガノンの二機を纏めて貫く。

瞬間、強制的に脱出装置が作動しコクピットが遠くへと射出され、同時に二機は爆散。

そのままゼットラゴンは振り下ろすように光線をシエルターへと照射し始めた。

「ファルガノン及びファルソード、撃墜！ 脱出装置の作動を確認しました！」

「あの二人をこんな簡単に……!?」

まもなくして、シエルターが全て破壊され最後の防衛線が突破されてしまう。

パイロットの二人は恐らく無事とはいえ、ファルソードとファルガノンが為す術もなく倒される程の圧倒的な強さ。もはや現状の戦力で、ガーディアンがゼットラゴンに対抗する術はない。

「敵怪獣、基地内部へ降下中！」

「全職員を退避させろ！ 機体はファルブレイヴを最優先に搬出！ 指令室も各員の退避を確認次第放棄する！」

もはや勝敗は決した。御法川は遺憾ながらも支部の放棄を決め、脱出の指示を出す。

「うちらも逃げよう！」

「ソウター！ お前も……」

そしてカズマたちもまた逃げようとするが……。

「おい、お前……どこ行つたんだよ……」

今さっきまではいたはずのソウターの姿が、ここにはなかった。

「これは……敵怪獣、来ます！」

『ZEGYAAAAA!!』

次の瞬間、隔壁を突き破って指令室にゼットラゴンが現れた。

「嫌……こんなところで……」

「マジかよ……」

世界に対する見せしめのつもりなのだろう。司令室へ向け、ビーム砲を展開するゼットラゴン。

ある者は怯え竦み、ある者はこの場から逃げ出そうとする。

「ソウタあああああ!!」

そんな中、フウカは叫ぶ。今まで共に戦った、ヒーローの名を。

「させるかああああ!!」

次の瞬間、ゼットラゴンの頭上から何かが激突しその巨体を叩き伏せた。

「ファルガン!?!」

「ソウタ……!!」

そしてカズマとフウカの視界に映ったもの。

それは、一部のフレームが剥き出しの状態でありながら最後の力として最強の敵に立ち向かおうとするファルガンの姿だった。

「そこ……離れろおお!!」

ゼットラゴンと取っ組み合い、共に更に深い地下へと落ちて行くファルガン。

そして空中でゼットラゴンの手を振りほどくと、すかさずバズーカを構え巨体へと向ける。

「ラスターアア！ビィビィイム!!」

瞬間、凄まじい威力の光線が放たれゼットラゴンを直撃し地の底へと叩き落とした。

「ダメだ、エネルギーが切れるぞ!」

一見するとファルガンが押しているように見えるこの状況。だがここでファルガンはラスタービームを使ってしまった。残り少ないエネルギーでゼットラゴンと戦うのは絶望的だろう。

そう思われたが……。

「あれは……予備のバッテリーを全てラスタービームに括り付けているのか……!?!」

いつもよりどこか歪な形状をしているラスタービームバズーカ。それをよく見ると、なんと予備のヒロイックロボ用のスーパーイオンバッテリーが幾つも括り付けた上に、ケーブル剥き出しで強引に接続されていたのだ。

「やめるんだ結城くん! そんな使い方をしたら爆発するぞ!」

それはまさに捨て身の特技。バチバチと音を立てて爆発寸前のラスタービームを携え、ファルガンは今最後の戦いに臨む。

『ZEGYAAAAA!!』

先に底に降り立ったのは、ゼットラゴンだった。

ゼットラゴンは降り立つと同時に暴れ始め、地下13階の施設を完膚なきまでに破壊し始めた。

「地下13階、全壊！ ファルブレイヴ、破壊されました！」

やはり人が乗っていないければ脆いものである。地下13階設備と同時に、希望であるファルブレイヴもまた破壊されてしまった。

「ファルブレイヴが……人類の希望が……」

究極のヒロイックロボ、ファルブレイヴの喪失という事態に打ちひしがれる御法川。

「おっさん！ ロボ一つ壊されたくらいで何へコタレてんだよッ!!」

「カズマあー！」

そんな彼を、フウカの制止を振り切りカズマは首元を掴んで怒鳴りつける。

「あいつは……ソウタは！ 今たった一人で、しかも旧式のファルガンで！ 俺たちの最後の希望として戦ってくれてんだよ!!」

先輩二人が倒され、ファルブレイヴも破壊された。絶望的としか言い様がない状況で尚ソウタは、限界を迎えたファルガンで戦っている。しかも、地下という脱出装置が使えない閉所で。

「テメエはその意志を無駄にする気か！ 組織改革とやらに利用するだけ利用しておい

て、あいつの事はその程度にしか見てなかったのかよッ!!」

しかし御法川がここで投げ出してしまえばその覚悟も無駄となってしまう。カズマにはそれが決して許せなかった。

「やはり君たちを選んで正解だったよ」

御法川は思い出した。かつてソウタとカズマ、フウカの三人に見た真のヒーローの姿の片鱗を。

そして奮い立たされた彼は、再び総司令官としての命令を告げる。

「総員、全設備及び装備を放棄し、自身の安全を最優先とし退避を急げ！ 全人員の安全を確保次第、我々はこの支部から脱出する！」

「無事でいろよ、ソウタ……！」

ガーディアン関東支部は、こうして最期を迎えた。

脱出準備が進む中、カズマは胸の内で祈る。今も一人戦い続けるソウタの無事を……。

「もつてくれファルガン！ これが最後の仕事だ！」

鳴り響く警報。

溢れ出るような警告表示。

それらがファルガンの限界を五月蠅く伝えるも、ソウタは一步も下がらない。ゼットラゴンを討ち、皆の元へ帰る為にも。

「ライフルカノン！」

『ZEGYAAAAA!』

燃え盛る地下13階に降り立った瞬間、ラスタービームを置いてライフルカノンを構え引き金を引く。

当然ダメージは通らないがそれでも撃ち続けながら、炸裂ナイフを手に突撃する。

「何が人類が墮落しているだ！」

そして首の関節にナイフを突き立て爆破。傷口にライフルの銃口を突き入れ、何度も繰り返し引き金を引いた。

「一緒に戦ってくれるカズマとフウカも！ガーディアン先輩たちも！いつも不安に耐えながら俺を待っていてくれるマドカも！」

ズドン、ズドンと銃声が響く中ソウタは思い起こす。

時に友達として、時に戦友として共に過ごしてきた二人を。

正義のあり方の一つを教えてくれたガーディアン先輩たちを。

危険とわかっていながら自分の事を待っていてくれる妹のマドカを。

「自分を犠牲にこの世界を守ろうとしたクオンもー」

そして、呪いをその身に宿し絶望の底にいなながらも正義の味方であろうとしたクオンを。

「お前たちの言うように墮落なんかしちゃいないッ!!」

ヒーローとして戦い始めてから、幾つもの出会いがあった。その中の誰一人として、黒曜旅団の言うように墮落した人間などいなかった。

『ZEGYAAAA!!』

もがき苦しむように絶叫を上げながら、ゼットラゴンはファルガンを振り払う。

「うわああああっ!!」

壁に叩きつけられたファルガンはその場に倒れ込み、コクピットは更に警告表示に囲まれた。

「死ぬのか、俺は……」

頭から血を流し、ぼんやりとした意識の中視界にはビーム砲を展開しようとするゼットラゴンの姿が映る。

その時、ソウタは一瞬死を覚悟する。

「いや、まだだ……!」

だが倒れたファルガンの傍には、先程置いたラスタービームがあった。

「俺はまだ、何も救えちやいない……!」

まだ諦めるには早い。ラスタービームを手に、大切なものを守る為再びファルガンは立ち上がる。

「ラスター……!」

狙うは敵の頭。残った全てのエネルギーをラスタービームへと込める。そして……。

『AAAAAAAAA!!!』

「ビイイイイイイイムツ!!!」

燃え盛る炎の中、二つの光線が激突した。

一方その頃、ガーディアンの職員たちはGキャリアーと並走する複数台のバスに別れて、ガーディアン支部を脱出し街へと向かっていた。

「ソウタ……大丈夫かな」

「あいつの事だからそう簡単にくたばりやしねえよ」

Gキャリアーを運転しながら、カズマとフウカの二人はそんな会話を交わす。

「嘘……!」

「何があった!」

そんな中、パソコンで基地内の状況をモニターしていたオペレーターが突然、パソコンを落として眩き、御法川は状況を問う。そして伝えられた報せは……。

「ファルガンの信号、途絶しました……」

黒曜旅団の宣言。そしてゼットラゴン襲来という惨劇から翌日。

「ガーディアン関東支部跡地から中継です。この通り、現場は惨憺《さんさん》たる状況となっており、現在調査隊が死傷者や現状の確認の為調査している最中となります」

「うわあ、こりやひどい……」

「無事だよな、ソウタ……」

荒れ果てたガーディアン支部の跡地には、多くのマスコミや警察が集まり騒然としていた。

様子を見に来たカズマとフウカは、見慣れた光景が崩壊した生々しい姿に驚愕する。

「調査隊が何か発見したようです。行ってみましょう」

そうしていると、基地で何かが見つかつたらしくマスコミが一斉にそちらへと向かつていく。

「私たちも行ってみよ」

「ああ」

マスコミの集団の後を追ひ、二人もその現場へと駆け足で向かう。

「これは……怪獣の残骸です！」

そこにあつたのは、破壊され機能を停止した究極ロボット怪獣ゼットラゴンの残骸。それがクレーンで引き上げられ、業者に回収されていた。

「そしてあちらは……生存者です！」

「なっ……！」

そしてもう一方は、良い意味で衝撃的なものだった。

「全身が融解したファルガンのコクピットから、なんと少年が救出されました！状況から見るに、彼が今回の過去最悪の怪獣を撃破したのでしようか！」

原型は辛うじて保ちながらも、表面が熱でドロドロに溶けて壊れ果てたファルガン。そのコクピットがバーナーで切り開かれ、中から傷だらけのソウタが救助されていたのだ。

「生きてたのか、ソウタ……！」

「行こう！ あいつの所に！」

ソウタが生きていた。その事実には喜々としながら、二人は救助隊の元へと駆け出して

いくのだった。

それから少しして、二人が救助隊の元へと辿り着くとその時には丁度応急処置が終わり、担架で救急車へと運ばれようとしているところだった。

「君たちは……」

すぐさまソウタの元へ駆け寄ろうとすると、二人の道を塞ぐように救助隊員が立ちはだかる。

「こいつの友達です！ ガーディアンでも一緒に戦っていて……」

「そうか、君たちが情報にあった二人か」

だが二人の顔を見ると情報が伝わっていたようで、隊員はすぐに状況を理解しソウタの容態を説明してくれた。

「命に別状はないが、見ての通り重傷だ。目を覚ますまでも時間がかかるだろう」

「でも、よかった……」

「ああ、そうだな」

裂傷や火傷、骨折など負傷箇所は数多く決して無事とは言えない。目を覚ますにも時間が必要だというが、それでも生きていた事に安心してフウカは膝から崩れ落ち、カズ

マは抱き上げるようにその身体を支えた。

そして次に隊員は、回収されたゼットラゴンを指差しながら告げる。

「あれを彼がやったのなら、本当に彼は英雄だよ。もしもあの怪獣が街に解き放たれていたら、被害は何千何万と増えていただろう」

ゼットラゴンが街に到達した場合の予測被害は、これまでのロボット怪獣のそれを遙かに上回っていた。それこそ彼の言うように、何万人の犠牲が出てもおかしくなかっただろう。

だからこそ彼は敬意を表していた。絶望的な状況にありながら、最後まで守るべきものを守り抜いたソウタの戦いに。

「だってさ、ソウタ。あの戦い、お前の勝ちだよ」

何はともあれ、ゼットラゴンは破壊され、辛うじてだが生き残ることができた。ソウタの戦いは、カズマの言う通り勝利と言っても過言ではないだろう。

同日。東京、秋葉原。

『ガーディアン関東支部での事件以降、現在の所旅団の動きは見られず……』

ファルブラックの整備部品の代用品調達にこの街に来ていたクオンは、電気屋のテレビでガーディアン関東支部壊滅のニュースを目にしていた。

「お嬢ちゃん、うちでバイトしない？ 給料は弾むよ？」

「時間、ないから……」

そんな彼女の姿を見てメイド喫茶のスカウトが声を掛けてくるが、拒否してクオンはその場から立ち去る。

「そう、もう時間はない……」

今の彼女にはもはや、そのような事に付き合っている余裕などない。

「黒曜旅団……あなたたちの好きにはさせない」

ガーディアンが壊滅し、黒曜旅団が動き出した今、街を守る事が出来る存在はファルブラックただ一つなのだから。

第八話　そしてここから

いつもと変わらない街並み。

いつもと変わらない服を着て、いつも通り人々が通り過ぎていく。

そんな何も変わらない当たり前の毎日。

しかし黒曜旅団の宣言と、関東支部壊滅を皮切りに多発した、超空間ゲートをを用いた奇襲攻撃による各地のガーディアンの壊滅で、その景色は崩壊の道へと向かいつつあった。

明かりが消えたビルや店の数々。

怪獣の襲来と、人々の暴動で荒廃した街並み。

当たり前の日常は、音を立てて崩れ落ちていく。

そしてガーディアン関東支部崩壊から二ヶ月。

「雨……」

雨が降る荒れ果てた街の中、傘を差して一人フウカは呟く。

行き交う人々の会話も、アスファルトを切り裂くタイヤの音も、はしゃぎ回る子供たちの声も、全てが雨音に掻き消えた。

「なんで、こうなっちゃったんだろ……」

『東京都渋谷区で市民による暴動が続いています。現在確認できる死傷者の数は……』
「ひつど……」

ネットニュースを見ても暴動の話ばかり。

明るい話題を探そうにも、そんなものを発信する余裕など今は誰にもなく過去のコンテツを頼りに平和だった頃を懐かしむしかなくなっていく。

これが、ヒーローを失い怪獣の恐怖と不安に人々が支配された結果だった。

「おいフウカ、こんな所で女一人じゃ危ねえぞ」

「そんなの、今じゃどこでも一緒でしょ？」

そのような状態で尚外に一人というフウカに見かねて、カズマが声をかける。

「実際の所フウカの言うようにどこでも危険なのだが、そのような事を言っている場合ではない。」

「まーだこんな女が残ってたとはなあ！」

「おいおい嬢ちゃん、誘ってんのか？」

「違いねえ！」

「一緒に俺らと遊びに行こうぜエ！」

フウカという可憐な女子高生を見つけて、続々と寄ってくる荒くれ者たち。

ある物は手に武器を持ち、彼らはフウカを脅すように迫ってくる。

カズマの言うように、これが今のこの国の現実なのだ。

「やだ」

しかしフウカは平然と彼らの脅しを、何を言っているんだこいつらとは言わんばかりに突き放した。

「やめとけお前ら」

「なんだてめえ」

「こいつは俺の連れだ。手出すなよ」

そしてそんな彼女を庇うようにカズマは一步前に出て拳を構える。

相手が鉄パイプなどといった武器を持っている以上確実に勝てる自信はないが、それでもフウカを守る為にカズマは戦う事を決心していた。

「連れだかなんだか知らねエが、話してんのは俺たちだ。部外者はすつこんでろ！」

「ぐっ！」

「カズマ！」

先手を打ったのは荒くれの方だった。その中の一人が駆け出し、カズマの腹を殴りつけ拳が突き刺さる。

「先に手エ出したのはお前らだからな！ 恨むんじやねえぞ！」

「へぐっ!？」

直後、カズマは殴りかかってきた男の顎に強烈なアッパーを叩き込み、舌を噛ませてノックアウトした。

「このの野郎ッ！」

「おっと危ねえ！」

それを皮切りに、次々と荒くれたちが襲いかかる。

振り下ろされた鉄パイプを靴で防ぎ、鳩尾や股間といった急所を狙って一撃でのノックアウトを狙っていく。その戦い方で、カズマは辛うじて一人で複数人と渡り合う事が出来ていた。

「ねえ、なんか武器ある？」

そんな中、カズマばかりに戦わせている事を気に病んだフウカは戦う為の武器がないかをカズマに訊ねる。

「こいつらが持ってた鉄パイプだ」

「えー、ださーい。日本刀とかないのー？」

「あるわけないだろ」

「んじゃ重いし傘でいいや」

気に入る武器がないと決まれば手に持っていた傘を閉じて武器にして、フウカもまた

喧嘩の中に飛び込んでいく。そして……。

「必殺！ 鼻血ロケーツト！」

荒くれ者の鼻の穴目掛けて傘を突き刺し、一撃でノックアウトしてみせた。

フウカの攻撃を食らった荒くれ者は、鼻を押さえながら悶えているが鼻血は出ていない様子。どうやらフウカの想像通りとはいかなかったようだ。

「えっげつねえ……」

「加減したら負けるし」

あまりにも容赦のない攻撃だが、成人男性の相手に対しフウカは女子高生。彼女の言うように、加減をしてはととも敵わないだろう。

「でも所詮不安に駆られてチンピラごっこで発散してる奴らだ。喧嘩慣れてないのは俺らと同じだな」

だがいくら荒くれ者とはいえ、相手はいつ怪獣の脅威が襲い来るとも知れない状況の中で不安と恐怖から暴走した人間である。喧嘩に関しては、カズマたちと同様素人同然だった。

「それにしてもカズマ、上手くない？」

「(こんな)時世だからな。ネットで調べた」

そしてカズマは、こうなる事を想定してインターネットで人間の急所の突き方を調べ

ていた。ここが、カズマが荒くれ者たちを圧倒できた力の差の正体である。

倒した相手の持つていた鉄パイプをカズマが拾う。

鉄パイプを手に構えたその時、相手の男のうちの一人が凶器を持ち出した。

「調子に乗ってんじゃねえぞ、ゴラァ!!」

「マジかよー!」

持ち出されたのは、刃渡り20cm程の包丁。ここに来て本気で殺しにかかってくるという展開に緊張しながらカズマは身構える。そして……

「死にさらせエー!」

包丁の先を向け、男が突っ込んでくる。覚悟を決めるしかない。そう思いながらカズマが強く鉄パイプに力を込めたその時だった。

「くだらない事を」

「なんだこの男……ぐおっ?!」

気配もなく、突如現れた30代ほどの銀髪の男がポケットに手を入れたまま、包丁を持つた荒くれ者を軽々と蹴り飛ばしたのだ。

「ぎげやがって!」

直後に荒くれ者がもう一人、ナイフを手に銀髪の男に襲いかかる。

「所詮一時の衝動に駆られただけの俗物……」

「ぐああっ!!」

だが銀髪の男はその攻撃をひらりと避け、一瞬で後ろに回り込みうなじに手刀を叩き込んで一撃で気絶させた。

「相手にするまでもない」

「こんな奴相手にしてられるか! ずらかるぞ!」

まるで映画やアニメのような、現実離れた圧倒的な強さ。

銀髪の男のその力を目の当たりにした荒くれ者たちは、次々と恐れをなして逃げ出していたのだった。

「あ、ありがと……」

その後、助けてもらった礼を言うフウカ。しかしカズマは、その男に只ならぬ何かを感じていた。

(ぜってえやべえぞコイツ……!)

この男は危険だと、彼の勘が告げているのだ。

「旅団長閣下。例の怪獣の準備が出来ました」

「そうか。よくやってくれた」

「まさかてめえ……!」

そんな中、銀髪の男の元にやってきた女が告げた言葉から、カズマは男の正体に気が

付く。

「てめえ、黒曜旅団のボスか！」

「ちよつと、マジ……?？」

何故このような場所にいるのかはわからない。

だが印象的な銀髪に旅団長、怪獣という言葉。そう、この男こそが黒曜旅団の首領だったのである。

「だとしたら、どうするといふのだ」

「ぶっ倒すッ!!」

日本のガーディアンを壊滅させ、ソウタに重傷を負わせ、この国を荒廃させた主犯が目の前にいる。

今こそそれを倒すまたとない機会だと、カズマは鉄パイプを手に銀髪の男に向かっていく。

「虚しいな」

「ぐあっ!？」

だが対する男は、カズマが鉄パイプを振り下ろすよりも速く懐に潜り込み、無防備な腹を殴りつけダウンさせた。

「大丈夫!？」

直後、慌ててフウカはカズマの元へと駆け寄る。そして腹を抑えて蹲《うづくま》るカズマを見下ろしながら、男は告げる。

「覚えておくといい、少年。正義などでは、本当に救うべきものを救えなどしないという事を」

「どういう……意味だ……!」

「それで救えるのは、恵まれたほんの僅かな人間だけだ」

銀髪の男はそう言い残すと、女と共にカズマたちに背を向けて去っていった。

「待て!」

「無茶しちゃダメ!」

そして後を追おうとするカズマだったが、フウカに制止されてその足を止めた。

追おうとしたのは、銀髪の男を倒したかったというのもある。だがそれ以上に理解出来なかったのだ。正義を否定しながら、まるで誰かを救おうとしているかのような言葉を残した男の、その真意が。

「救うべきものを救えない……か……」

降り注ぐ雨の中、カズマは呟く。

正義では救えないもの。それが何なのか、今の彼にはそれを理解することは出来な

かった。

一方その頃、結城家では……。

「マドカ、手伝える事はないかな」

「傷は大丈夫なの？お兄ちゃん」

「もう大丈夫だよ」

そこには、外の喧騒とはまるで別世界の、長閑《のどか》な光景が広がっていた。

学校も休校になり、一日中ソウタとマドカがこの家で二人で過ごす。そんな毎日が、一ヶ月近く続いているのだ。

「それじゃ、ゆで卵の殻剥いてくれる？」

「わかった」

この日の夕飯は、卵と豚肉の甘辛煮込み。その為のゆで卵の殻剥きをマドカから頼まれ、ソウタはテレビを見ながら卵の殻を剥き始める。

『本日午前10時頃、博多駅付近に怪獣が出現しました。被害は……』

「くっ……！」

だがいくら平和に過ごしているとはいえ、やはり怪獣の数は以前よりも増えている。

その度に戦いたいと、この手で誰かを守りたいとソウタは拳を握り締めていた。

「いいんだよ。もうお兄ちゃんは充分戦ったから、ね？」

「ごめん、マドカ……」

だが、もう彼が戦うことはできない。瀕死の重傷を負い、マドカには耐え難い程の不安と悲しみを与えてしまった。

医者の話ではソウタの意識がない間、見舞いに来る度に泣きじやくつていたという。

そこまで辛い思いをさせてしまった以上、もう彼が戦うことはできないだろう。

「この音……ポストかな？ 珍しいね」

不快なニュースが流れるテレビを消して、黙々と卵の殻を剥いていると玄関の方から、カランというポストに投函される音が鳴った。

「俺が見てくるよ」

このご時世でチラシなどは配られていない。個人宛ならば誰なのか。それを確かめる為、ソウタは玄関へと赴く。

「手紙？ 誰から……」

そしてポストを開けると、そこには一枚の手紙が届いていた。送り主の名前を確かめると、そこに記されていたのは……。

「御法川さん!？」

御法川ケンジ。崩壊したガーディアン関東支部の総司令官の名だった。

「誰？」

「えっと、学校の先生だよ。先生」

「そっか。中入ろう！」

もしもガーディアンから連絡が来たとなれば、またマドカに心配をかけてしまう。

それを避ける為、ソウタは学校の先生だと誤魔化し様子を見に来たマドカと一緒に家の中へと入っていった。

（もしも自分の意志で、再び戦いたいと願うなら連絡してくれ……か……）

手紙を開けてみると、記されていたのはそのような内容の文。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「ああ、今行く」

だが今となつては関係のない話である。

（俺はもう戦えない。マドカの傍にいなきやいけないんだ……）

もうこれ以上戦つて、マドカに辛い思いをさせる訳にはいかないのだから。

その夜、町外れの山岳地帯。

「旅団長閣下」

「わかっている」

「それでは……」

「今こそ只野市に怪獣を解き放ち、あの女を引きずり出すのだ」

「ここから、また新たなる戦いが始まるうとしていた。

「かしこまりました」

銀髪の男が指示すると、突如辺りに暴風が吹き荒れる。

そして大地を割り、木々を薙ぎ倒し、森の中から現れたもの。それは……。

「大翼怪獣フレアノドン、蹂躞せよッ！」

大翼ロボット怪獣フレアノドン。

全高34m、重量620t。

大きな翼を広げ、空から狙いを定めて地上の敵を狩る飛行型ロボット怪獣である。

（結局俺は、ヒーローにはなれなかった……）

そしてソウタは、ベッドで横たわるマドカの手を握りながら手紙の事を思い出していた。

「お兄……ちゃん……」

(でも……きつとこれで良かったんだ……)

怪我での入院から退院して以降、彼はこうして毎日寝付くまでマドカの手を握っている。こうしているのも、マドカに不安な思いをさせない為だ。

「おやすみ、マドカ」

その後手を離し、ソウタも自分の寝室に向かおうとしたその時だった。

『G A A A A A A A A A!!』

「この声はまさか……!」

突如、大気に凄まじい咆哮が響き渡る。

「空を飛ぶ、怪獣……!?!」

咄嗟に窓を開け、外を見渡すとそこには空を自在に飛び回るロボット怪獣の姿があった。

「逃げるんだよ早く!」

「逃げるつたつてどこに!」

口から火球を吐き、地上を爆撃する怪獣フレアノドン。

人々が恐怖し、逃げ惑う中、それは現れる。

『G A A A A!?!』

「あの人を……あの子の住む街を……壊させはしない」

黒と黄色の、夜空のような色。そして桃色に輝く光の翼を背負ったヒロイックロボ、ファアルブラックだ。

「ファアルブラックだ！」

「この際誰でもいい！ 怪獣を倒してくれ！」

世間ではインターネットで都市伝説のように扱われていた、正体不明の存在であるファアルブラック。善か悪かすらも分からないその存在に人々は期待を託す。

（みんな知らないんだ。あの機体を動かしているのが、あんな女の子だってことを……）
そうして継る人々は想像もしないだろう。自分たちが継るファアルブラックに乗っているのは、テロで全てを失った、年齢もいかなない少女だということを。

「ラスターブラッドガン」

ファアルブラックが取り出したのは、銃剣付きのビーム拳銃、ラスターブラッドガン。

「逃がしはしない」

引き金を引き、光線を放ちながらクオンはフレアノドンを追い立てていく。

光線を躲しながら飛び回るフレアノドンは、突然高度を上げ始める。

「高度を上げていく？ ……まさか」

ファアルブラックの直上を陣取り、嘴を開くフレアノドン。そしてファアルブラックを照

準に捉えると、口から次々と火球を放った。

「くうっ！」

だがファルブラックは、攻撃を受けたまままるで避けようとしなない。

何故攻撃を避けないのか。地上から見えていたソウタは気付いた。

「まさかクオン、街を庇って……！」

もしも避けてしまえば、火球は街へと降り注ぐ。だからクオンは街を庇う為に、避けて攻撃を耐え続けているのだ。

怪物が高度を上げたのも、これを狙っての事なのだろう。

「彼の……ソウタの暮らす街は……壊させはしない……！」

「ダメだ、あのままじゃクオンが！」

このままではファルブラックもやられてしまう。そうなればこの街も、クオンも無事では済まないだろう。

「自分の意志で、再び戦いたいと願うなら……！」

この状況でやるべき事。それをソウタは理解していた。

マド力をまた傷つける事になるかもしれない。だがそれでも、やらなければならない事が彼にはあるのだ。

「御法川さん！」

『分かっている！ 既に準備はしてある！ 君は今すぐ駅前広場に向かってくれ！』
「わかりました！」

家の階段を駆け下りながら、御法川に電話をかけるソウタ。

向こうはどうやら既に準備が出来ているらしく、合流ポイントは駅前広場との事だ。

「お兄ちゃん……？」

電話を切ると、ソウタの後ろには騒動で目を覚ましたマドカが様子を見に来ていた。

「ごめん、マドカ。お兄ちゃん、やっぱり行かないといけないんだ」

「なんで!? お兄ちゃんがヒーローになんてなる必要のないに——」

そしてソウタがこれから戦いに行こうとしている事を知るや否や、目に涙を浮かべながら止めようとする。

彼女は恐れていたのだ。もう一度戦わせてしまえば、今度こそ帰ってこないかもしれない。だから彼女は、必死にソウタを止めようとする。

「そうだね。俺がヒーローになる必要なんてない」

だが彼は、決してヒーローなどになりたい訳ではない。

「だけど俺には、好きな人がいるんだ。そしてその人は、今もあの空でみんなを命懸けで守ってる。その子を助けに行きたいんだ。だからごめん」

ただ一人の少女を守りたい。その思いが、ソウタを戦いへと突き動かしているのだ。

「……わかった。でも条件！」

それならば、もはや止められまいとマドカは諦める。しかしその為には、一つの条件があった。

「次からは、私も連れて行つて。私もお兄ちゃんの力になりたい！」

これ以上、心配して待つだけというのは耐えられない。だから彼女は願った。自分も戦いに強力し、少しでも兄の力になる事を。

「危ないよ」

「わかつてる！」

「……なら、頼んでいいかな」

「頑張るよ」

彼女の制止を振り切つて戦う以上、断る事もできない。これからはマドカの力も借りる事を約束し、ソウタは玄関の扉を開ける。

「それじゃあ……行つてくる！」

「頑張つてね、お兄ちゃん」

そして自転車に飛び乗ると、駅前へと続く道を全速力で駆け抜けていった。

(みんなのヒーローになんてなれなくたっていい！)

数十年前のような、無敵のヒーローになど、なるつもりはない。

(だけどあの子が泣いて終わる最後なんて……そんなもの絶対に認めないッ!!)

ただ、少しでもクオンの涙を拭えるのならと。その為に、ソウタは戦いへと向かう。

「駅前広場……ここか……」

そして駅前広場に着くと、そこには強く風が吹き荒れている。ふと空を見上げると、そこには巨大な輸送機が滞空していた。

「聞こえるか結城くん！ 今からヒロイックロボを投下する！ それが、君の機体だ！」
「っ……………」

咄嗟にソウタが物陰に隠れると、広場から大地を叩きつける轟音が響き、アスファルトが撒き散らされる。

その後衝撃が収まり、ソウタが広場に出るとそこには一機のヒロイックロボが鎮座していた。

「これは……ファルガン？ いや、違う……」

色も外観も、一見するとファルガンに見える。だが、外観にはライトグレーが増えて頭部には二枚のブレードアンテナが増設されるなど、所々ファルガンとの差異が見られるその機体へ乗り込むと、ソウタは早速ファルガンと同じように起動させる。

『EXエクスファルガン、通常モードから戦闘モードに移行します』

そしてモニターが点灯すると共に今、起動シーケンスが始まった。

『セーフティシャッター作動、モニター展開。エネルギーライン全回路接続。火器管制システムの安全装置を解除。データリンク開始。電圧正常。油圧正常。イジエクシオンシート、パラシユート共に正常。デュアルスーパードライオンバッテリー出力、190%で安定』

外観は確かにファルガンに近かった。だが表示されたパラメータは、ファルガンというよりファルブレイヴに近いような圧倒的な数値を示している。

リパルシヨシリフターこそないものの、この機体が他のヒロイックロボとは別次元に位置している事は確かである。

『ウエルカムスーパードライバー。EXファルガン、戦闘モードで起動しました』

「エクス……ファルガン……」

過去の全てのヒロイックロボを超える、新たなヒロイックロボの原点。その名は、EX^{エクス}ファルガン。

『その機体はファルガンの残存機をベースに、回収したファルブレイヴの使用可能な部品全てを流用して新たに組み上げた、君専用のファルガンだ。自由飛行能力こそないが、機体性能は既存の機体とは比較にならない最強の機体となっている』

ファルガンをベースに破壊されたファルブレイヴのパーツを組み込み、新たな機体として組み上げられた最強のヒロイックロボ。

『世界最強のヒロイックロボ……。その力、君が正しいと信じる事の為に使ってくれ』
ガーディアンのパイロットとしてではない。結城ソウタという個人として戦う為に与えられた新たな力が今、起動する。

「飛ぶことはできない……。でも、跳ぶ事なら！」

目指すは空で戦うクオンの元。ソウタは全力でバーニアのペダルを踏みしめ、そして

……

「EXファルガン、テイクオフツッ!!」

最強の力が今、夜空へと飛び立った。

「ほらカズマ！ あれ！」

「あれは……。ファルガン!?!」

人々が逃げ惑う街から、カズマとフウカの二人もその姿を捉える。

そして直感的に分かっていた。それに乗っているのが、ソウタだということ。

「だめ、このままじゃ……」

フレアノドンの口から、紅い炎が溢れ出す。そしてその瞳に捉えたファルブラックへ向けて火球を放ったその時だった。

クオンが思わず目を瞑った時、辺りに爆音が鳴り響く。次の瞬間、目を開けた彼女の目に映ったのは爆炎の中から現れるEXファルガンの背中だった。

「ファル……ガン……?」

「助けに来たよ、クオン」

ついにクオン……ファルブラックと肩を並べられる程の力を手に入れた。

これならば、クオンを救う事もできる。そう信じて、ソウタはEXファルガンのライフルを怪獣へと向けた。

「ラスタービームライフル！」

『G A A A A A A A!』

そして引き金を引いた瞬間放たれた光線は、フレアノドンの翼を掠めて動きを鈍らせる。

直後、EXファルガンの機体は地球の重力に引かれて街の中へと落下し始めた。

「翔べー! EXファルガンツ!!」

次の瞬間、ソウタがバーニアのペダルを踏むと再び機体は空へと舞い上がった。

ファルガンではなし得なかった芸当だが、パワーアップしたEXファルガンの性能ならば自由飛行とまでは行かなくとも推力だけで空を飛ぶ事も可能となっているのだ。

「行こうクオン! 一緒に!」

「うん……!」

肩を並べたEXファルガンとファルブラックは、共通の敵であるフレアノドンへと銃

口を向ける。

「空中での機動力ならブラックの方がきつと上。私が回り込んでそっちに追い込む」

「そこを俺が食い止めるから、二人で一気に仕留めよう！」

そして作戦を決めると、二機は同時に動き出した。

「ラスターブラッドガン」

まずは空戦能力に優れるファルブラックが、ラスターブラッドガンを撃ちながら死角に回り込み追い込んでいく。

フレアノドンも両翼のバルカン砲で応戦するもそのような攻撃などファルブラックの前では豆鉄砲ではない。クオンは軽々と機体を操り砲弾をかわしていく。

「どこに逃げても無駄」

フレアノドンもブラッドガンの光線をかわしながら飛び回るが、その動きはクオンの狙い通り。

「来た！」

その正面にいたのは、既に銃口をフレアノドンへと向けたEXファルガンだった。

「ここで食い止める！ 行けえ！」

『G A A A A A A A!?!』

フレアノドンは咄嗟に反応し避けようとするが時すでに遅し。ビームライフルから

「ごめんなさい。あなたとは一緒に行けない」

「え……」

ファルブラックはその手を跳ね除け、ラスターブラッドガンとEXファルガンへと突き付けた。

「決着をつけよう。あなたと私の出会いに……。そして、私の最悪の人生に……」

この日の夜は、まだ明けない……。

第九話 激突! EXファルガンVSファルブラック

「決着つて……どういふことだよ!」

一時は共に戦ったにも拘わらず、突如銃口を突きつけてきたクオン。彼女が言った決着の意味をソウタは問う。

「わかってるんでしょ? でもソウタは優しいから、わからないふりをしてる」

「それは……!」

だが本当は解っていたのだ。クオンが何を望んでいるのか。そしてその願いを叶えた果ての結末を。

「そんな優しいあなたが好きだった。だから……」

そしてクオンは、これまで二度の出会いでソウタの優しさに触れてきた。いつまでも手を繋いで、共に生きていく事を夢見た事すらあった。

「その優しきで、私を殺して」

だからこそ、クオンは願った。自分の命の終わりが、彼の手によって迎えられる事を。ファルブラックが、引き金に指をかける。次の瞬間、銃口から光線が放たれEXファルガンは寸前で回避。間髪入れず、ファルブラックが突撃し放った拳をEXファルガン

が受け止めた。

「どうしても、戦うしかないのか……!」

「あなたが死んで私が残れば世界は滅ぶ。それが嫌なら……私を殺すしかない」

「そんな結末……俺は嫌だ!」

両者の機体性能はほぼ互角。夜の街を舞台に、激しい格闘戦が繰り広げられる。

拳と拳が、銃剣とナイフが火花を散らしぶつかり合う。拮抗する戦いの中、状況を崩したのはEXファルガンだった。

「まずはファルブラックを破壊する!」

突き出された拳を弾き、生まれた一瞬の隙を突いてファルブラックを蹴り飛ばすEXファルガン。対するファルブラックは咄嗟に翼を広げて減速し、夜空へ向けて一気に上昇した。

「そう。そんな優しいあなただから、安心して命を差し出せる」

「どこに俺が君を殺す理由があるっていうんだ!」

「もう二度と、繰り返さない為……」

ただ単に死にたいだけなら、他の方法もあった。だがそれではまた第二第三の自分を生み出してしまう。

そうさせない為にもクオンは戦っているのだ。

「手を差し伸べてくれるなら、その手で亡骸を抱いて欲しい。それだけで私は幸せだから……」

「そんな幸せ、認めてたまえるものか!」

そしてソウタは、クオンを救う為にファルブラックを破壊しようとしている。

彼女の命の行く末を巡って二つの願いが交錯し、それぞれファルブラック、EXファルガンという強大な力となって激突する。

「君は何も知らないだけなんだ! 本当の幸せの意味も、それがどんなものかも!」

バーニアを噴射し、空高く飛び上がってEXファルガンがラスターセイバーで斬り掛かる。

対するファルブラックもすかさずブラッドセイバーを抜き、二本の光剣が衝突して火花を散らした。

「ならあなたは私の何を知ってるの? 家族を殺されて、人としての尊厳も全部取り上げられて……その上死ななきや世界が減ぶなんて突きつけられて……!」

鏢迫り合いの最中、クオンは自分の思いを告げた。

まだ15にもなっていない少女にも拘わらず、彼女はこの世の不幸という不幸を寄せ集めたような境遇で生きてきた。

始めから平和な世界など知らなければまだ救いはあつただろう。だが日本で生まれ

た彼女にとっては平和こそが当たり前で、一瞬にしてそれが崩れ落ち思い出を胸の奥底に封じながら紛争の中で戦ってきた。

その上さらに突きつけられた呪いの現実。これほどの不幸に追い詰められ、ならばせめてと死が救いだと思っていて終わろうとした。

「その何も知らない優しさで、私がどれだけ苦しい思いをしてるか、あなたにわかるの……!?!」

「があっ!!」

ファルブラックが剣を振り払い、EXファルガンを地面へと叩き落とす。

世界を救う為に終われるのなら、それで充分な幸せだと受け入れようとした。

だがソウタとの出会いがその思いを変えた。変えてしまったのだ。

「私はもういいの……。人並みの幸せは手に入らなくても、あなたがいてくれたら……!」

彼となら、いつまでも一緒にいたい。そう願ってしまった。

「あなたが終わらせてくれるだけで、きつと私は充分に幸せになれるから……!」

これは妥協だ。一緒に居られないのなら、せめてその手で終わらせてもらおうと。

「だからもう死なせて……! 私を早く楽にしてよ!」

クオオンの思い描いた最期を迎える為、ファルブラックはブラッドセイバーを構え斬り

掛かる。

「初恋なんだ!!」

だがEXファルガンはその一撃を弾いて、カウンターに放ったビームライフルがブラックの肩アーマーを掠めた。

「初めて会った時から気になってた!　そして二回目でわかったんだ!」

そして剣を振るいながら、今度はソウタが自分の想いをぶつける。

「俺は君の事が好きなんだ!　物静かなところも、ちょっと無知なところも、その綺麗な

銀色の髪も赤い眼も!　好きだから一緒にいて欲しいんだ!」

どれだけクオンが辛い思いをして来たか、平和な日本という国で生きてきたソウタには知る由もない。だがそれでも、彼は好意を抱いてしまった。

「だから死んで欲しくないんだよツ!!」

再び剣と剣がぶつかり合い、激しく火花が舞う。

好きだから、一緒にいたい。クオンに死んで欲しくない理由など、それで充分だった。「私の事が好きならお願いくらい叶えて!」

激しいエネルギーのぶつかり合いで、互いの剣の柄に亀裂が入り、スパークを起こして煙を上げる。

やがて互いの光剣は爆発し、戦いは拳と拳の殴り合いと化した。

「離れたくないなら、それならお願いだから私と一緒に死んでよッ！」

「君が本当にそうしたいならそれでもいい！」

高度を上げながら、壮絶な格闘を繰り広げるEXファルガンとファルブラック。

互に残る武器は銃とブラックの銃剣、そしてEXファルガンのナイフ。戦いは次第に、空中での射撃戦へと発展する。

「けど本当は生きたいんじゃないか！」

そしてまだ死という結末で妥協しようとするクオンに、ソウタは叫んだ。

「君はあの時死ぬしかないと言った！　だけどそれは、本当は死にたくないからじゃないのか！」

いつかの高台の上で、彼女は言った。自分は「死ぬしかない」のだと。だがその中で、一度も「死にたい」とは言っていなかった。

それは、本当は心の中では生きたいと思いつけていたからだろう。ソウタはそう指摘する。

「確かにそうかもしれない……。けど、だめなの！」

それを否定する事は、クオンには出来なかった。だが事はもはや、彼女の意味でどう

にかなるような話ではなかった。

その頃。

「おい、見てみるよ」

「ヒロイックロボだよな、あれって……」

行き交う街の人が、一斉に空を見上げる。その目に映ったのは、今のこの国には存在しない筈のヒロイックロボが二体。

それらが戦う光景に、何人かが空へとスマートフォンを向けて映像を捉える。

そして誰かがふとSNSへとその映像をアップロードすると、瞬く間に再生数が爆発的に増え始めた。

『なんでヒロイックロボ同士で戦ってんの?』

ヒロイックロボ同士で戦っている状況に首を傾げる者。

『片方ブラックじゃねーか』

その内一方が都市伝説サイトで知られるファルブラックだと指摘する者。

『つか強すぎワロタwww空飛んでるしwww』

『今現地だけど、この前に空飛ぶ怪獣秒殺してて草生えた』

『これは草』

『こんな奴らいたら怪獣とか余裕でしょ』

日本中の様々な人々がその投稿にコメントを残すが、その中でも特に目立ったのが二機の圧倒的な強さへの言及だった。

『ぶっちゃけた話、どっちが勝つと思う?』

そしてこのコメントを皮切りに、さらに話はヒートアップし始める。

『おい、見てみるよこれ!』

『めっちゃバズってんじゃない。何それ』

ファルガンの飛び立った地点へと向かうカズマとフウカもまた、スマートフォンからその投稿を見ていた。

『あの戦いの生配信?!』

そしてその爆発的に閲覧数を伸ばす投稿が、今繰り広げられているEXファルガンとファルブラックの戦いだという事を知ると、フウカは思わず驚愕する。

『別の動画サイトでも生放送の視聴数が全部で百万超えてるぞ』

『何が起きてんの……?』

さらに様々な動画サイトで生中継までされ、それらの視聴数も同じく爆発的に増加している。

一体今何が起きているのか、二人にはとても理解が追い付かなかった。

「よく来てくれたね、君たち」

「御法川のおっさん……」

そんな二人の前に現れたのは、久方ぶりに会う御法川。

「これ、どういうこと!?!」

「これは……そういうことか」

御法川にフウカが携帯の画面を見せつけると、彼は頷き状況を理解したようだった。

「あの戦いから、希望が広がっていくか……」

「希望……?」

「全国のガーディアンが壊滅して、この国が恐怖と不安に包まれて荒廃したのは知っての通りだ」

「ああ。嫌ってほどにな」

二ヶ月前の超空間ゲートによるゼットラゴン襲撃以降、ヒーローという存在を失い怪獣に蹂躪される他になくなったこの国は人々の心も荒み、荒廃しつつあった。その実態は、カズマとフウカも体験した通りだ。

「そんな中で現れたのさ。怪獣を物ともしなかった、無敵のヒロイックロボが……。しかも二機もね」

「その二つ、今戦っちゃってるけど？」

「それでいいんだ。あの二人が戦い、力を見せつけるほどそれが人々にとっての希望となる」

そうして多くの人々が諦めていたその時、現れたのがEXファルガンとファルブラック。失われた他のヒロイックロボの追従を許さない、圧倒的な力を誇るニューヒーローの登場である。

彼らが何を思い、何のために戦っているかなど知る由もない。

だがこの時、不特定多数の人々によって拡散された映像は新たな正義の味方の力を民衆に知らしめ、再びその心に希望の光を灯していたのだ。

「だめって、何が！」

「黒曜旅団の目的を止める為には、私が死ぬしかないから」

「黒曜旅団……!?!」

激しい戦いの中、クオンの口から呪いの真実が語られる。

「このファルブラックは黒曜旅団が作った機体……。その目的は……魔王の復活」

「まさか……!」

「私の身体の中には、魔王の欠片が眠ってるから。あなたが好きだって言ってくれた銀色の髪も赤い眼も全部そのせい。だから私は死ななきゃいけないの」

「それが……君の呪い……」

出自不明のヒロイツクロボ、ファルブラック。その正体は、黒曜旅団が魔王の器として建造した、ヒーローとはかけ離れた闇の機動兵器だった。

そしてクオンがその身に秘めた呪いの正体とは、死んだ魔王の一部だった。

「そう。だから魔王が復活する前に……私を殺して」

このまま生き続けては、いずれ魔王が復活してしまう。その事を未然に防ぐ為に。そして無駄だと証明し、二度と繰り返させない為に彼女は戦って死ぬ事を願ったのだ。

「だからって……だからって！ それで君が死んでいい理由になる筈がないんだ！」

ソウタは許せなかった。黒曜旅団の野望の為にクオンが死ななければならぬ現実が。

「君が何と言おうと、俺は君を諦めない！ そんな理由でなんて、絶対に認めないッ！」

その現実を打ち壊す為に、EXファルガンはナイフを構えて夜空を翔ける。

「やめて……もうやめて……！」

そして頭部に刃を突き立てようとしたその時、それは起こった。

「せつかく頑張って諦められたのに……！ やつと死ぬ覚悟だつてできたのに……！」

突如現れた障壁に阻まれ、刀身が砕け散る。直後、紅い幾何学的な模様が空中に浮かび上がって夜空を覆い尽くした。

「これは……!?!」

「生きたいなんて、思わせないでツ!!」

同時にファルブラックの両肩の、目のような模様が妖しく激しい光を空に向けて放つ。

魔王復活の時が今、訪れようとしていた。

「何だよ、あれ……」

待機していたGキャリアーの元に辿り着いたカズマたち。

そこでカズマは、謎の模様に覆い尽くされた空を見上げ呆然とする。

「わからないが……あれは恐らく魔法的なものだ。アレがあるということはファルブラックには……」

以前より御法川は、ファルブラックには過去の超技術が使われているのではないか。それが高性能の源なのではないかと推測していた。

「かつての魔王軍の技術が、そのまま使われている……」

それが今、確信へと変わる。彼の推測以上に、ファルブラックは危険な存在だったのだ。

「ソウタはそんなもんと戦ってんのかよ……」

「まさか魔王復活って……あれのことなんじゃ……」

「とにかく今は彼に賭けるしかない」

フウカは目の前の異常な光景に魔王復活を恐れ、それは事実なのだが今の彼女らにはどうすることも出来ない。

「きつと結城くんなら、彼女を止めてくれるはずだ」

もはや日本だけではない。世界の命運が今、ソウタとEXファルガンに託されたのだった。

「クオン！ 一体どうしたんだ、クオンツ!!」

「早く……私を……」

「今助けに行く!」

相手は今やヒロイッククロボではない未知の存在。ソウタは気を引き締めながらクオンを救う為に暴走状態のファルブラックへと向かう。

「早く……私を止めて……いやああああああつ!!!」

紅い光と衝撃波を放ちながら、空中に静止するファルブラック。その中に囚われたクオンが今、苦しんでいる事はソウタにも理解できた。

「わかった、クオン。君を止めて……絶対に救ってみせる!」

狙うは手足。EXファルガンはビームライフを構え、引き金を引く。

だが光線がファルブラックに届くことはなく障壁に掻き消され、次の瞬間ブラックの両肩の眼から赤黒い光線が放たれた。

「くっ……!」

咄嗟に回避するEXファルガン。直後、後ろから凄まじい衝撃波が広がりソウタは冷や汗を垂らしながら後ろを振り向く。

「なんて強さなんだ……!」

そこに広がっていた光景は、まさに地獄だった。今の一撃で山が一つ跡形もなく吹き飛び、土は赤熱してマグマのように煮えたぎっている。

今の攻撃を受けていたら、EXファルガンとて一撃で蒸発していただろう。暴走したファルブラックの強さは、想像を遥かに超えていたようだ。

「御法川さん! あのファルブラックについて解析できたなら教えてください!」

これは恐らく超空間ゲートと同類のものだろう。そう推測したソウタは、通信で何か

を知っているかもしれない御法川に問う。

「恐らく今ファルブラックを動かしているのは魔法科学の類だ。そうなると物理的な動力ではない以上、止める手段はひとつしかない」

「教えてください!」

「コクピットの破壊だ」

「そんな……」

だが得られた解決の糸口は一つ。コクピットの破壊だけだった。それはまさに、クオンを殺せと言っているにも等しい事だ。

「あの子を救う方法もそれしかない。わかってくれ」

「……わかりました」

しかしソウタは気付く。御法川の言った言葉の意味に。

「ああ……ああ……」

「ごめん、クオン。痛いかもしれないけど……!」

苦しみ、呻き声を上げるクオンにソウタはそう語りかける。

コクピットを破壊しろとは言った。だが、クオンを殺せとは言っていない。

「君を倒すツ!」

まだ希望はある。その希望の芽を掴むために、ソウタは全速力でクオンの元へと向か

う。

「うああああああ!!」

「とはいえ、何をしてくるか……!」

ファルブラックは衝撃波を放って抵抗し、自由飛行能力のないEXファルガンでは近づくことも難しい。

だがクオンを救うには接近するしかない。ソウタは衝撃波をかわしながら、慎重に接近する隙を探る。

「やらせ、ない……。ソウタは……。殺させない……。!」

「クオン!」

そんな時だった。突然ファルブラックから放たれる衝撃波が止み、紅い光が収まる。

「私が、抑えきれぬうちに……。早く殺して……。!」

「どうして……」

力を振り絞って必死にファルブラックを、そして自分の中の魔王の欠片を抑え込むクオン。その目は赤く充血し、口からは赤黒い血を吐き出している。

「どうしてクオンばかりがこんな目に……。!」

彼女が抑えているおかげで障壁も消え、EXファルガンはその隙にファルブラックに肉薄する。

「そう、それでいい……」

そしてビームライフルの銃口を向けるEXファルガン。

これでようやく終わる。そうクオンが安堵の表情を浮かべたその時だった。

「それでも俺は、君を助けるツ!!」

ビームライフルの光線が、ファルブラックの胸を貫く。そうして出来た傷口からEXファルガンはブラックの装甲板を引き剥がし始めたのだ。

「やめて……! 私なんか生きてたら……」

「関係ない!」

最後にコクピットハッチを剥がすと同時に、EXファルガンのコクピットが開きソウタが手を差し出した。

「一緒に行こう、クオンツ!!」

「そつちに……行つていいの……?」

「勿論だよ」

差し出されたその手を、クオンは躊躇《ためら》いながらも最後は強く握り締め、ソウタはその腕を思い切り引いて彼女をEXファルガンのコクピットへと引き込んだ。

「本当に、生きていていいのかな……」

「先送りでもいいんじゃないかな。ギリギリまで、一緒に考えていこう」

まだ魔王の欠片をその身に宿したクオンが、この世界で生きていいのかわからない。

だがファルブラックを打ち破り、一旦の猶予はできた。ソウタはその問題を、時が来るまで一緒に背負っていく事を誓う。

「これで終わらせる……！」

クオンは救い出した。残るは最後の仕上げだけだ。

無人になったファルブラックのコクピットへと、EXファルガンはビームライフルを向ける。そして……。

「ラストビームライフルツ!!」

光線が、ファルブラックのコクピットを貫いた。

同時にファルブラックは力を失い、地面へと落下していく。その姿を、EXファルガンのコクピットからソウタとクオンの二人は見守るように見下ろしていた。

その後、戦いを終えたEXファルガンは駅前の広場に着陸し、開いたコクピットからソウタとクオンが降りる。

「みんな、ただいま」

「ヒーローのご帰還だぜー!」

「お姫様も一緒じゃん! ぐっじよぶ!」

そんな二人を真つ先に出迎えたのは、カズマとフウカだった。魔王復活を阻止した上にクオン

救い出す事にまで成功した。一点の曇りもない完全勝利に二人は歓喜の声を上げる。

「すみません御法川さん。いきなりEXファルガンをあんな無茶な使い方して」

「気にすることはない。あの程度で壊れるほどヤワな機体じゃないさ」

折角の新品のEXファルガンを、初陣にして暴走状態のファルブラックという怪物にぶつけてしまった事をソウタは謝るが、元々のファルブレイヴがそうした別次元の敵を想定した機体。御法川としては充分に想定範囲内の相手だった。

「ファルブラックの回収を頼む。あれが魔王の器である以上、黒曜旅団の手に渡る前にこちらで確保しておきたい」

「了解しました!」

一旦落ち着いたところで、御法川はガーディアン職員にファルブラックの回収を命じる。

黒曜旅団の目的が魔王復活にある以上、ブラックを手中に置いて置いた方が旅団に対して優位に立てるといふ考えだ。

「あの、私……」

「君が水無瀬クオンくんだね」

「はい……。ごめんなさい、今まで……」

そしてクオンは御法川の元に赴くと、これまで自分がファルブラックに乗ってしてきた事を謝罪する。

「詳しい事情は後で聞かせてもらうけど、君が悪意を持って戦つてはいなかったとは承知しているよ。取り調べは女性職員に担当させ、彼さえ良ければだけど結城くんも同伴させよう」

だが、元より彼女が黒曜旅団の野望を阻止する為に動いていたのなら、通つた道こそ違えど味方だ。そう考えて御法川はクオンを手厚く扱う事を決めていた。

「ありがとう、ごさいます……」

「彼女を守つてやつてくれ」

「頑張ります」

御法川の言葉で、ソウタは改めてこれからもクオンを守つていくことを誓う。

その一方で御法川には、クオンの精神が安定して協力を得られた場合、あわよくばファルブラックも味方につけることができるのではないかという思惑もあった。

(全ては彼ら次第か……)

無論、再びブラックに乗ることをクオンに強要するつもりはない。その事も含め、行く末は全てソウタたちに託すつもりでいた。

「お兄ちゃん!」

「マドカ!」

そうして再び集うガーディアン関東支部の面々の元に、マドカが訪れ一目散にソウタの胸へと抱きついた。

「よかった、無事で……!」

先程までの空を見て、彼女もまた状況の異常さを感じ取った。そんな状況から兄が無傷で帰ってきた事が、何よりも嬉しかったのだ。

「君が結城くんの妹さんだね」

思い切り甘えるようにしがみついていると、そんな彼女へと御法川が興味深そうに声をかける。

「ガーディアンの人ですよね!」

「そうだけど……」

「お願いです! 私も仲間に入れてください!」

そして彼がガーディアンの人間だと知るや否や、マドカは頭を下げてそう頼み込んだ。

「君、これは遊びじゃないんだよ」

「わかってる！」

決してガーディアンは遊びなどではない。そんな事、言われなくとも彼女は理解している。

「もう何もしないで待つてるだけは嫌なんです！ 私も、ちよつとでいいからお兄ちゃんたちの力になりたいから！」

ゼットラゴン襲撃事件で、その事を彼女は嫌という程知った。その上で願っているのだ。自分も待つているだけではなく、少しでも力になりたいと。

「俺からお願ひします、御法川さん」

「わかった。是非力を貸してくれ」

ソウタの頼みもあつて御法川は折れてその願ひを受け入れ、マドカをガーディアンへと迎え入れる。

「ありがとうございます！」

「おおい、大丈夫なのか？」

だがまだ小学生のマドカを仲間に加える事に、カズマは不安を顕にする。

「戦場には連れ出さないし、何かあつても俺が守るよ。このEXファルガンで」

しかしながら元よりマドカを怪獣との戦いにまで駆り出すつもりはなく、また関東支

部のような事が起こっても今はEXファルガンがある。

その力でクオンを救い出す事が出来た。その事実裏付けされた、確固たる自信が今のソウタにはあったのだ。

「すまないが水無瀬クオン、君の身には何が起こるかわからない以上拘束させてもらうけど問題ないかな」

「構わない……」

その後協力的という事は分かっているが、魔王覚醒の危険がある以上念の為、クオンは手錠がかけられた上で職員に連れられGキャリアーに乗り込む。

「敵の親玉も日本にいるって分かったしソウタも復活したし、これはいい感じなんじゃないか?」

「え、親玉!?!」

「街で出くわしたんだけど、カズマってば喧嘩売ってボコボコにされててさー」

「おま、そこは黙ってるよ!」

魔王復活の要となるファルブラックとクオンは確保し、敵の首領も日本にいたとわかった。二ヶ月間の時を経て、一気に事態は好転しつつある。

「それじゃ皆で行こうか。僕たちの基地に」

「待つて、日本支部って壊滅したんじゃないか?」

「だと思っただろう?」

だがガーディアン関東支部は既がない。かつての拠点なき今、御法川の案内で連れられた先は……。

およそ二時間後。

「……は……」

「これこそがガーディアン日本支部の新たななる拠点、イージスベースさ」

町はずれの内陸部の山岳地帯。人気のないそのような場所にあったのは、関東支部よりも遥かに基地然とした巨大な施設だった。

「イージスベース……」

「すっげえ……。でもこんなもん短期間でどうやって用意したんだ?」

「このようなもの、とても短期間で建造できるものではないがそれには訳があるようだ」「元々ここは、自衛隊が過去に建造した施設なんだよ」

「それはいいけど、なんでここなの?」

「ガーディアン設立前、ヒロイックロボが完成した直後に自衛隊がヒロイックロボの運用を想定して建造した秘密基地がこれなんだよヒロイックロボがガーディアンの管轄

になってからは計画は中止されていたんだけど、まだ自衛隊の所有だったところを譲り受けたというわけさ」

「へえ……」

ヒロイックロボ開発当初。まだガーディアンという国際組織が樹立する予定すら無かった頃、この国では自衛隊がヒロイックロボを運用する計画があった。

イージスベースはその計画の為に建造された巨大基地なのだが、結局ガーディアン樹立により自衛隊にヒロイックロボが配備されることはなく放置されていた。そうして所有権は自衛隊にあつたものを、新たな拠点として譲り受けたという事である。

「よし、格納庫に着いたよ」

「あれ? 全然ロボットないよ?」

「問題はそこなんだ」

しかしである。マドカが指摘するが、巨大な基地である割にはヒロイックロボは一機たりとも置いていない。広々とスペースが確保された格納庫は、まさにもぬけの殻といった様相を呈していた。

「この間の全国各地のガーディアン支部壊滅で、我々はヒロイックロボのほぼ全てを失った。今の我々が所有している機体は、結城くんのEXファルガンただ一機だ」

原因は御法川の言うように、ガーディアン支部の壊滅。その為今動かせる機体は、な

んとか完成させたEXファルガンただ一機しかないのである。

「EXファルガン、搬入します！」

「あれがお兄ちゃんのロボット……！」

「確かにちよつとかつこよくなつたけど、あんま変わつてくない？」

「確かにそこまで強そうには見えないな」

そこに、唯一のヒロイックロボであるEXファルガンが搬入されてくる。その姿にマド力は感動するが、カズマとフウカから見ではそこまで強くなっているようには見えなかった。

「そう見えるだろう？」

そんな彼らに、御法川は自分の事のように自慢げに語る。

「だけど中身は全くの別物だ。究極のヒロイックロボ、ファルブレイヴの残存パーツから使えるものを全て使い、ファルガンをベースに全身に渡つて大幅な強化を施したのがこのEXファルガンだ」

ソウタにも説明されたように、この機体はファルガンとファルブレイヴから生まれた機体である。ベースこそファルガンであるものの内部にはファルブレイヴのパーツが多く使われており、機体性能は見た目以上のものがあるのだ。

「私の最高傑作のファルブレイヴを使ったのですから、強力なのは当然のことです」

そうして語る御法川の隣に、そう言つて眼鏡をかけた白衣の女が立つ。

一見真面目で厳格な女性に見えるが、白衣にはデフォルメされたヒロイックロボのストラップがジャラジャラと付けられておりその趣味が窺える。

「あなたは……?」

「三嶋トウコ。ガーディアン技術開発部の一員で、ファルブレイヴの開発チームの主任でした」

三嶋トウコと名乗るその女性。彼女は、あの別次元の高性能機であるファルブレイヴの開発主任なのだという。一体彼女がどれほどの頭脳を持っているのか、一同にはとても想像がつかなかった。

「すみません、ファルブレイヴを壊されてしまつて……」

「構いません。結果的にリパルシヨンリフター以外の殆どの性能はこのEXファルガンで再現する事に成功しましたから」

予定とは違う形だが、その出来には満足しているのだろう。彼女がEXファルガンを見る目は、どこか輝いて見えた。

「他の機体の進捗は?」

「現状良好ですが、EXファルガンの戦闘データが不足しており調整が難航しています」
「わかった。ほどほどに休みながら続けてくれ」

「ありがとうございます」

そしてそんな会話を御法川と交わすと、三嶋は今回の戦闘データを受け取りこの場から去っていった。

「ファルブラック、到着しました！搬入します！」

遅れて搬入されて来たのは、胴体が大きく破損したファルブラックだ。

「で、あれがファルブラックか」

「近くで見ると無茶苦茶かつこいいじゃん」

その機体は全体的にファルガンよりも曲線的かつ鋭利なシルエットをしており、闇を感じさせながらもヒロイックな外観をしていた。

「基礎はヒロイックロボと同じですが、なんかヤバげなブラックボックスがありますよ！」

搬入中も解析作業をしていた整備班の一人が、御法川にそう報告する。

「外して動きそうか？」

「それ以外はOSが海外版だけなんでなんとかなりそうっす！」

「頼んだよ」

ブラックボックスというのは恐らく魔法科学によるものだろう。だがその装置はどうやら機体全体のシステムから独立しているらしく、そこを除けば超高性能なだけのヒ

ロイツクロボに過ぎないらしい。

そうなるらとブラックボックスを取り外した上で修復が上手く行けば、戦力として使える可能性も出てきたわけである。

「結城くん、少しいいかな」

「なんででしょう」

そうして目まぐるしく動き回るガーディアンの人々を眺めていたソウタに、御法川が話し掛ける。

「君だけにしか頼めない仕事があるんだ。きっと大変な仕事になると思うけど……」

「仕事……?」

「ここにきて、御法川がソウタに頼みたいという仕事。それは……」

「頼む。君にはこの国の、希望になって欲しいんだ」

第十話 出発点

午前11時頃、北海道札幌市。

『怪獣が出現しました！ 住民の皆様は慌てず、迅速に避難してください！ 避難先は

……』

『GYA O O O O O N!!』

沢山の人々で賑わう休日この街に今、ロボット怪獣が襲い掛かり人々は一斉に逃げ惑っていた。

「ターゲット確認、長距離航行ブースターパージ！」

その上空に、高速で飛来する影が一つ。EXファルガンだ。

長距離航行用のロケットブースターを接続し飛行するEXファルガンのコクピットの中で、ソウタがコンソールを操作すると空中でロケットが切り離され爆破される。

そしてEXファルガンは、地上へと降下していく。予測降下地点は札幌の中心。敵の目の前だ。

「EXファルガン、テイクオフ！」

瓦礫を巻き上げながら、勢いよく地面に着地するEXファルガン。

その後体勢を立て直すと、照準に敵怪獣を捉え銃を構えた。

「ママー！ EXファルガンー！」

「そんな怪獣やっちゃまえー！」

そうして怪獣と向かい合うEXファルガンを目にした民衆の表情からは一気に恐怖が薄れ、街中から歓声が上がる。

『GYA O O O O N！』

「ライフルカノン！」

そんな人々の前に庇うように立つと、EXファルガンはライフルを構えて実弾を連射。先制攻撃を仕掛ける。

「効かないか……。それなら、モードチェンジ！」

だがその程度の攻撃では怪獣はびくともしない。ソウタはすぐさまライフルのモードを切り替え、再び銃口を向けた。

「ラスタービームライフル！」

『GYA A A A A A!!』

引き金を引いた瞬間、光線が怪獣の胸を穿つ。

「ラスターセイバー！」

その後ビームライフルで怪獣が怯んだ隙を突き、EXファルガンは光の剣を抜いて

バーニアを吹かし、一閃。

『GYAAAAAAAAA?!?!?』

必殺の斬撃を受けた怪獣は、絶叫を上げながら爆散した。

その日の夜、イージスベースにて。

『またです！ またも彼がやってくれました！ EXファルガンを駆る最強のヒーロー、結城ソウタ君の活躍によって、札幌に出現した怪獣が殆ど被害もなく撃破されました！』

『流石は初めての搭乗で怪獣を撃破し街を守っただけのことはありますね。彼がいなければこの国はどうなっていたことか……』

「あの話、受けるんじゃないかな……。これからどんな顔して学校に行けばいいんだ……」

テレビのどのチャンネルをつけても流れてくる、自分を称賛する報道にソウタはどうしたものかと頭を抱えていた。

「その……あれだ。すまなかつたね」

そんな彼を見て、流石に不憫に感じた御法川はそう謝罪する。

こんな事になったのには、ある理由があった。

「だけど、人々には希望が必要なんだ。行き場のない不安を打ち払ってくれる、絶対的なヒーローの存在が。それは理解してやって欲しい」

EXファルガンとファルブラックの戦いの最中、その映像がSNSを通じて拡散され人々に大きな希望を齎した。

それにより御法川らガーディアンの残存勢力は、今の民衆に必要なのは絶対的なヒーローという名の希望と考え、EXファルガンとソウタをヒーローとして祭り上げた。その結果がこれである。

「絶対的なヒーロー、か……」

別にそれで人々が救えるのなら、それでも構わないとはソウタ自身も考えていた。

だが、それとはまた別に彼は絶対的なヒーローという言葉に疑問を抱いていたのだ。

(クオンの生きてきた世界には、そんなもの……)

クオンは救う事は出来た。だが彼女と同じような境遇の人間を救う事は今の彼には出来ない。それは即ち、戦争で人を殺す事に繋がるのだから。

何かを救うには、何かを犠牲にしなければならぬ事もある。である以上、全てを救う絶対のヒーローなど、存在し得ないのではないかと。それが、今のソウタの考えだった。

「私は学校で自慢できるよ！ お兄ちゃんが日本一の正義の味方なんだもん！」

そんな兄の悩みなどつゆ知らず、マドカは嬉々としながらそう言うのと色紙の山をソウタに差し出した。

「えつと……マドカ、何これ」

「サイン、60枚！ 学年のみんなに頼まれた！」

「なんでそれ受けてくるんだよ……」

総数60枚。一クラス30人で二クラスの彼女の小学校の学年全員分のサイン用色紙が、サインペンと一緒に手渡されたのだ。

「だめ？」

「まあいいけどさ……。その代わりにお仕事も勉強もちゃんとするように」

「はーい！」

とはいえソウタはそれを断る事はせず、する事はするという条件でサインの依頼を受け入れた。

「マドカが迷惑かけてませんか？」

「かけてないよー！」

その中の仕事、というのはガーディアンでの事。少しでも兄の力になれるのならと社会科見学という名目でガーディアンに入った彼女は今、色々な場所で手伝いをしてい

る、のだが……。

「彼女が来てから通路が一際綺麗になったただか洗濯物の肌触りが良くなったただか、料理が美味くなったただか、色々報告が上がっているよ」

それからというものの、イージスベースの職員から次々と生活環境が改善された報告が入り、その全てにマドカが関わっていたのだ。

その中の報告によると、女の子が手伝いに来てくれたと思っただけの間にか手順を全て指示されていたという話まであるらしい。

「おかげさまで助かっているよ」

「だってさ、マドカ」

それを聞いたソウタに撫でられて、マドカは照れ笑いを浮かべる。

ソウタについて来たマドカは、戦いに加わることはできないものこのようにして得意な事を活かして、確かにガーディアンの力になっていた。

「それじゃ行つてきます」

そうしてマドカの話が終わったところで、ソウタはその場から立ち上がる。

「ああ、わかった」

「クオンさんのところ？」

「うん」

「入ります」

「いらつしやい、結城くん」

場所は移り、イージスベース内の取調室。ドアをノックしてソウタが部屋に入ると、そこには女性職員とクオンの二人の姿があった。

「ソウタ……」

「俺だよ、クオン」

ソウタが来て、少し嬉しそうに笑みを浮かべるクオン。

「これ、美味しい。ソウタも飲む？」

「貰おうかな」

その手にはストローが差されたパックの100%オレンジジュースが握られている。

そしてソウタに尋ねると、クオンはテーブルの上に置かれていた未開封のジュースをソウタに手渡した。

「どうやら彼女は、このオレンジジュースが気に入ったようだった。」

「彼女の検査結果が出たわ。どうやら薬で身体を強化されたような形跡があつて、とても健康とは呼べなかつたわ」

「そうですか……」

そしてソウタが椅子に座ると、女性職員からクオンの身体状態が語られる。

「ただ今後その薬を使わないで、安定した環境で過ごす事ができれば十年はかかりそうだけど自然治癒で殆ど元通りになると思うわ。安心して頂戴」

「よかった……」

その話によると、薬物の使用形跡こそあるものの今は精神肉体共に比較的安定しており、時間と共に回復していくとの事だった。

「それと、定着して取り除けないけど人間のものとは明らかに異なる細胞が心臓に付着しているのも確認したわ」

「それは多分、魔王の細胞。黒曜旅団が私の中に埋め込んだ……」

「魔王の細胞……」

それとは別に見つかったものが、クオンが欠片と呼ぶもの。かつて死んだ魔王の細胞である。

「これに関してはどう作用するかは全くの未知数よ。完全除去に関しては出来たら奇跡の域ね」

それは自然回復する強化薬物の後遺症とは異なり、物質として心臓に張り付いており除去は出来ないのだという。

「それで、結局クオンは大丈夫なんですか？」

「この魔王の細胞が悪さをしない限りは当面何事もなく生きていけるはずよ」

とはいえその細胞は現状ではただ存在しているだけで、クオンの身体には何の影響も与えていない。この状態が続く限りは、この先も普通に生きていけるといえるという事だった。

「だめ……。魔王が甦る前に、私は……」

だが話はそれで済む問題ではない。今は何もないとはいえ、身体の中に世界を破壊する爆弾を抱えているも同然なのだから。

「行こう、クオン」

焦るクオンに、ソウタは立ち上がりそう言つて手を差し伸べた。

「彼女と街まで出掛けたいんですが、大丈夫ですか？」

「ええ。あなたのお陰で治安も改善されてるし、条件付きなら構わないわよ」

「条件？」

そして一緒に街まで出かけようとするソウタに、女職員はある条件を提示する。

「まず一つは監視をつけること」

監視を付ける。まずこれはクオンの立場上当然の事だろう。

「もう一つはこれよ」

「チョーカー……？」

その後もう一つの条件と言って差し出されたのは、金属製のチョーカーと、小さなスイッチだった。

「これをクオンちゃんの首につけて、このボタンをあなたが持つ事。それが条件よ」

「何なんですか、これ……」

「このボタンを押せばチョーカーから強力な麻酔薬が打ち込まれて装着者を眠らせるの」

「そんな扱い、まるで……」

このチョーカーには、人間を瞬時に眠らせるほどの強力な麻酔針が組み込まれている。スイッチを押した瞬間、その針がクオンの首を刺すという事である。

あまりの扱いにソウタは抗議しようとするが、女職員は話を続ける。

「どの程度の効果があるかはわからないけど、クオンちゃんの承諾は得てるわ」

「また魔王が目覚めそうになったら、そのボタンを押して欲しい……」

「別に裏切るとか疑ってるわけじゃないのよ。いざと言う時の保険ね」

あくまでこのチョーカーは、クオンも合意の上でつける物。裏切りや脱走を警戒している訳ではなく、魔王復活を水際で阻止する為の保険だという。

「わかりました」

魔王復活。その片鱗と対峙したソウタは危険性を他の誰よりも理解していた。

きちんと事情を聞くと彼はその条件を承諾し、麻酔針のスイッチを受け取った。

「それじゃクオンちゃん、早速お着替えしよっか！」

「え……」

そしてシリアスな話を終えた途端、突然女職員の目の色が変わりどこからか沢山の衣服を取り出した。そのラインナップは子供らしい可愛い服から、クオンにはまだ早いであろう色っぽい服まで様々だ。

「俺は先に出てるよ」

「待って……！」

嫌な予感を感じ取ったクオンはソウタに助けを求めようとするが、着替えを見るわけにもいかずソウタは部屋を後にする。

一体クオンがどんな姿で出てくるのか。それを楽しみに待っていると、そこに御法川が現れる。

「話は聞いていたよ、結城くん」

「御法川さん、どうも」

「警戒しなくても元々トラブルが起きないように取調室は可視化してあるんだ。覗きたいかい？」

「いいです」

あの後彼は、自分の端末から取調室の中の二人の様子を見ていた。そしてこれから街に出掛けると聞いて、急いで駆けつけてきたのだ。

今は着替え中という事で監視カメラは切つてあるが、覗こうと思えばいつでも覗ける。思春期男子のソウタをからかうように御法川はそう冗談を言うが、ソウタはそれをキツパリと断つた。

「それより君は学生だ。資金にも困るだろうし、これを使つてくれ」

「プリペイドカード……？」

そんな御法川がソウタに手渡したのは、一枚のプリペイドカードだった。

「20万円チャージしてあるから、好きに使つてくれて構わないよ。彼女の服や日用品もこれで買い集めるといい」

「いや、悪いですよー！」

カードの中に入った金額は、なんと20万円。その全てを自由に使つて構わないという。

「これまで君がしてきた事を考えたら安過ぎるくらいさ。大荷物を買つたなら、イメージスペースに発送してくれたら預かっておこう」

「クオンに必要な足りない家具があるなら買つておけてことですか？」

「そういうことだよ。後回しでも構わないけどね」

とはいえクオンは、ファルブラック以外殆ど着の身着のままで来ている。20万円には、これから新しく生活を始める為の準備の資金という意味合いも込められていた。

「もしも君の家の冷蔵庫では三人分入らないだとか、高額な家電が必要になった場合は別に連絡してくれ」

「それは……どうも」

これからクオンは、ソウタの家に居候する事になる。だがこれまで二人暮らしをしてきた家で三人暮らしとなると、家電等にも不備が出てくるかもしれない。その場合は20万を超えても別に予算を用意しているようだった。

「お待たせ……」

「お邪魔みたいだね。僕は行くとするよ」

そうこうしていると、恐る恐るクオンが取調室から出てくる。

同時に御法川は二人の邪魔をしないようにそそくさとこの場から去っていった。

「変、じゃない……?」

萌え袖の白いパーカーにデニムのホットパンツ。銀色の髪はおさげに束ねられ、ヘアゴムにはリボンがあしらわれている。

だぼついたパーカーで幼げな印象を感じさせながら、ホットパンツに包まれた小ぶりで可愛らしい尻や剥き出しの生脚がセクシーな印象を与えている。おまけに髪型の印象も加わり普段の大人しげなイメージが一転、明るいイメージの少女に様変わりしていた。

「顔赤いけど、大丈夫……？」

「あ、うん。可愛いよ！ 可愛い！」

これまでの印象とは真逆の、活発で可愛らしくも色っぽいイメージとなったクオンに思わず見とれてしまうソウタ。

そんな様子を心配して顔を覗き込むクオンの仕草に、ソウタはさらに顔を赤くしてしまふのだった。

それからしばらくして、イージスベース正面出入口。

支度を終えたソウタとクオンは、手配されて到着していたタクシーに二人で乗り込んだ。

「こんな人気のない所まですみません」

「秘密基地をこの目で見られて男としては大満足だよ」

このイービスベースは本来自衛隊の基地ということもあり、大きな街からは一時間を超え場所に位置している。

ソウタはそれを気にしてタクシーの運転手に一言謝るが、その運転手はどうやらこの秘密基地というシチュエーションを楽しんでいたようだった。

「それよりお客さん、どちらまで?」

「只野市に行きたいんですが……」

「それなら最後までタクシーで行くより、電車一本乗り継ぎで行く方が早いよ。最寄り駅まで行くかい?」

「はい。ありがとうございます」

本来考えていた目的地は、ソウタたちが日常を送っていた只野市。だが運転手の言う通りここからなら電車の方が早く、それに従いタクシーは最寄り駅へと走り出した。

「彼女さんとデートかな?」

「ははは、まあそんなところですよ」

「羨ましいな」

ソウタとそんな会話を交わしながら、運転手は山岳地帯の道でタクシーを走らせる。そんな中、クオンはなにやら戸惑っている様子だった。

「私、何をすればいいの……?」

「遊んで食べて買い物をして……今の世界をちやと一緒に見て回ろう」

これまではちよつとした軽食をして歩いただけで、二人できちんと遊んで回った事は無い。故にソウタは見せたかったのだ。この世界は、まだ生きる価値があるくらい楽しい事もあるのだと。

今のクオンならば、目を閉じずにその光景を見てくれると信じて。

数十分後、最寄り駅。

「代金はガーディアンに請求しておくよ」

「ありがとうございます」

代金は支払わなくてもいいということ、二人はそのまま降りてドアを閉め、走り去っていくタクシーを見送った。

「ここからどうするの……?」

「行きたい所はあるかな」

「わからないけど……」

ソウタとしては只野市に向かう予定だったが、クオンに行きたい場所があるならそこに行こうと考えていた。

クオンがそのような場所など知っているはずはなく、答えは出なかったが代わりに一つの質問を投げかける。

「ソウタは、どうして戦ってるの……？」

「……よしー！」

その問いで思い立ったソウタは一目散に券売機へと駆け出し、切符を買って戻ってきた。

「はい、切符。それじゃ行くかうか」

「行くつてどこに……」

そして改札を抜けて、電車に乗る二人。その行き先は……。

「新ヶ浜だよ」

「視線が痛い……」

乗り継いで二本目の電車に乗ってから三分ほど。吊り革を持って電車に揺られるソウタには今、沢山の視線が降り注いでいた。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

心配してクオンが声をかけてくれるが、その後さらに視線は強くなる一方。ソウタは大丈夫だと言うが、実際には大量の冷や汗を流していた。

それは決して彼が有名人になったからというわけではない。そこまで個性的な見た目はしていないからだ。

集まってくる視線の理由は、クオンである。染めたのではない魔王の細胞が齎した自然の美しい銀色の髪を持つ、可愛らしい美少女。純粹に惹かれたのが半分、物珍しさが半分で沢山の視線が集まり、彼氏であるソウタにも自然に意識が向けられるというわけである。

『新ヶ浜、新ヶ浜。お出口は左側です』

「よし、降りようか」

「うん……」

目的の新ヶ浜に着いた途端に、クオンの手を掴んで逃げるように降りるソウタ。

「確か西口だったかな」

その後階段を駆け下り、西口から出ると目の前にあったのは海辺の巨大なシヨツピン
グモールだった。

「時間もいい感じだし、まずは昼ご飯にしようか」

今の時間は午後一時頃。遊びに行く前に、まず二人は昼食を摂る事に決めてシヨツピ

ングモールへと向かっていった。

ショッピングモール内、ハンバーグレストラン。

「お待たせしました。デミグラスハンバーグセットと和風おろしハンバーグセットになります」

「ありがとうございます」

注文をしてからしばらくして、運ばれてきたのは二人分のハンバーグセット。その二つにはそれぞれ別のソースがかけられていた。

「はんばーぐ……」

テロに巻き込まれるより前の、記憶の奥底にあったかもしれないハンバーグを前にしてクオンは興味津々の様子を見せる。

「以上でよろしいでしょうか」

「ありがとうございます」

「ごゆっくりとお召し上がりください」

一礼して去っていく店員を見送り、ソウタはナイフとフォークを手に取る。

「フォークとナイフの使い方は大丈夫かな」

その時ふと気付く。クオンがきちんとナイフとフォークを使ってハンバーグを食べられるのかと。

「熱っ……!」

「豪快だね」

だが時すでに遅し。顔を上げると目に映ったのは、握ったフォークでそのまま切らずにデミグラスハンバーグを口に運んでしまい、熱がっているクオンの姿だった。

「でも、美味しい……」

「そっか。ならよかった」

そんなトラブルもあつたものの、味は気に入つたようで一口一口は小さめなものの印象からは考えられない程の食欲でパクパクとハンバーグを食べ進めていく。

その光景を目にしたソウタは、以前にもクオンが、ビッグサイズのハンバーガーを平然と平らげていた事を思い出すのだった。

「和風おろしも食べてみる?」

「うん……」

「はい、口開けて」

「んっ……」

あまりにも幸せそうに頬張るその姿を見て、ソウタは自分のハンバーグを少し切つて

クオンの口元に入れた。

そして嬉しそうに咀嚼する彼女の様子にソウタはただただ癒されていた。

食事を済ませてから、ソウタとクオンは人々が行き交うモールの中を気ままに散策していた。

「これ……」

そんな中、クオンが何かを見つけて立ち止まる。

「何かあった？」

「この服……」

「気になる？」

「うん……」

彼女が気になったのはマネキンに着せられた、上品なブランド物の青いワンピースをメインに据えた一式の服だった。

「すみませーん！」

早速ソウタは、クオンに代わって店の中の店員を呼び出す。

「はい、なんででしょうか」

「これ、試着お願いします」

「かしこまりました！」

「多分着方も分からないと思うので教えてあげてください」

そして服の試着を頼むと、クオンは店員に連れられて店の中へと入っていった。

「試着室はこちらになります！」

クオンが試着室に入っていたところで、ソウタもまた後を追って店の中に入る。

途中、服を脱ぐ音も聞こえて少しドキドキしながらも待っていたソウタ。

その後少し経つとカーテンが開き、着替え終わったクオンが姿を現した。

「どう……かな……」

「いいよ。すっごく可愛いと思う」

パーカーにホットパンツの活発なスタイルもこれまでのイメージとのギャップがありとても可愛らしかった。

しかし逆に今の青いブランド物のワンピースはこれまでのクオンのお淑やかなイメージをさらに引き立て、また違った良さを醸し出していた。

「これ、欲しい……」

どうやらクオンも着てみた事でこの服が気に入ったようである。

早速クオンを着替えさせるとソウタは試着していた服を受け取ってカゴに入れ、レジ

へと持つて行つた。

「33000円になります」

「うっ……！」

だが値段を見ていなかった為、予想以上の金額に一瞬物怖じする。

「いや、今なら買える！」

しかし今は御法川から預かつた20万円の入つたプリペイドカードがある。思い切つてソウタはそのカードで支払いを済ませ、購入した服を受け取つた。

「ありがとうございます！」

予想外の出費に驚くソウタだが、対照的にクオンは初めての欲しい服を手に入れて、とても幸せそうに袋を抱えている。

「服、興味あるんだね」

「なんだか……いいなつて思つて……」

ソウタとしてはクオンはもつと浮世離れた印象だったが、意外と普通の女の子らしい一面がある事を改めてここで知つたのだった。

その後二人はモールの中の色々な所を見て回り、歯ブラシやタオル、新しいシャンブーや下着など生活に必要な物を買集めていた。

次は家電を見ようと量販店を訪れ、そんな中でクオンはふとあるものを見つけた。

「これ、ソウタの機体……」

「ファルガンのソフビ、よく出来てるなあ……。こういうのはカズマの方が詳しくそうだけど」

そこは子供向けのおもちゃ売り場の、ヒロイックロボコーナー。ガーディアン協力の元で各メーカーが出しているヒロイックロボの様々な玩具が並んでいるのだ。

そしてクオンとソウタが見つけたのは、かつてソウタが乗っていた機体であるファルガンのソフビ人形。元は旧式という事もあり不人気だったのだがEXファルガンの登場で人気が発見し、それが最後のひとつとなっていた。

ちなみにファルガンのソフビだが、低価格で多少造形や塗装が省略されているとはいえ、ラスタビーームのバズーカを手に持たせるギミックがあるなどクオリティは良好である。

「私のファルブラックは……ない……」

その後クオンは自分の愛機であるファルブラックの玩具を探してみるも、何処にも見当たらなかった。

「ガーディアン機体じゃなかったから仕方ないよ。ていうか気にするんだ」

「ちよつと……もやもやする……」

自分の機体がない事に少し落胆するクオン。

これまでファルブラックはガーディアンの正式なヒロイックロボではなかった故に、ソフビもまだ売られていないのだ。

「きつとそのうちできるよ」

そんな彼女に、ソウタはそう言って励ました。

実は今ブラックがガーディアンの中に入った事で、EXファルガンと共に急ピッチで商品開発がされているのだが、二人にはそのような事を知る余地もない。

そして二人はその後色々な玩具を見て回り、自分たちの戦いの軌跡を、玩具として手に持って見つめるといふ不思議な感覚を存分に楽しんだ。

「なんで……」

そんな中、クオンはファルガンのソフビを握り締めながら呟く。

「どうしたの？」

「どうして、私を……」

何故、ここに連れてきたのか。そう問おうとしたその時だった。

『怪獣警報が発令されました。皆様、係員の指示に従い落ち着いて避難してください』
「怪獣……?!？」

突如怪獣警報のアナウンスとサイレンが鳴り響き、一斉に人々が避難を始めたのだ。

「私も連れて行って……」

「わかった。行こう」

その後二人は手を繋いで走り出した。怪獣と戦い、倒し、人々を救う為に。

『ZUGANDA A A A A A!!』

突撃ロボット怪獣ズガンダー。

全高28m、重量830t。

背中から生える前に突きだした二本の角を持ち、猛スピードの体当たりであらゆる敵を打ち砕く四足歩行のロボット怪獣である。

「御法川さん!」

『わかっている! 新ヶ浜駅西口ロータリーに向けてEXファルガンを射出した! 受け取ってくれ!』

「了解!」

EXファルガンは駅前に向けて射出された。ソウタとクオンもまた、人々の流れに逆らってそこへ向かって走って行く。

「あの怪獣、どこかに向かってる……?」

その中で、クオンは気付いた。怪獣ズガンダーの目的は街の破壊ではなく、どこかへ向かって一直線に動いている事に。

「クオン、伏せて！」

目的地付近に着いたところで、二人はビル陰に隠れて身を伏せる。

直後、EXファルガンの巨大な機体が瓦礫を巻き上げながらロータリーに到着した。

「さあ、行こう」

「うん……！」

そして瓦礫の嵐が収まったところで、すぐさま駆け出し二人は一緒にEXファルガンのコクピットに乗り込んでコクピットハッチを閉じた。

(柔らかい……)

しっかりとしがみついてくるクオンの柔肌の感触に、ソウタが気を取られている間にEXファルガンは起動が完了し立ち上がる。

咄嗟にソウタは気を引き締め、操縦桿を握った。

「あれは……EXファルガン!?!」

「やったぞー！ これでもう安心だ！」

湧き上がる人々を背に、大地に立ったEXファルガンはライフルを構えてズガンダーへと向ける。

「あつちは海……。ううん、港……。？」

「まさか、港に何か……。!?」

EXファルガンの高い視点で見て、クオンが気付いたズガンダーの行く先。そこは、海外からの船も多く停泊する港だった。

「御法川さん！ 新ヶ浜の埠頭に何かないですか!?」

『確認したよ。中東からの輸入品を積んだ大型石油タンカーが停泊中だ』

「もし破壊されたら……。？」

「大爆発が起こって周りに被害が出る上に、海にも原油が流れ出して環境破壊にもなる……。？」

『事態は把握した。何としてでも奴の侵攻を阻止するんだ!』

「はいー!」

敵の狙いは恐らく、停泊中の石油タンカー。これが破壊された場合の被害は相当なものになるだろう。

「ちゃんと掴まってて、クオン」

「わかった……。？」

クオンがしっかりとしがみ付くと、EXファルガンはバーニア最大出力で飛翔。ズガンダーの正面に降り立ちすかさず銃口を向ける。

「ライフルカノン、ファイア！」

瞬間、砲弾を三発脳天に叩き込む。だが砲弾は厚い装甲に弾かれ、ダメージは全く入らなかった。

「それなら、ラスタビームライフル！」

続けてモードチェンジ、ビームライフルで光線を放つ。しかしそれも装甲を赤熱させた程度で大したダメージは入っていない。

「気をつけて。来る……」

直後、ズガンダーの意識がEXファルガンへと向き、鋭い視線が来る。

『ZUGANDAAAAA!!!』

「突進!？」

身構えたその瞬間、ズガンダーのロケットブースターが光る。そして角を向け、凄まじいスピードで突進して来たのだ。

「ぐうう……!」

咄嗟に角を避け、頭をpushさえて受け止めるEXファルガン。だが圧倒的な質量と推力に押されて、機体がジリジリと後ろにpushされていた。

「フルブースト! いっけええええ!」

だがまだ負けたわけではない。ソウタは機体のバーニアを最大出力で吹かして突撃

に對抗する。

「そんな、EXファルガンがパワー負け……!?」

ヒロイツクロボの中では規格外の性能を有するEXファルガン。しかしその力を以てしても、ズガンダーにはパワー負けして未だ押されていたのだ。

「うわああああっ!」

「っ……!」

押し負けて、EXファルガンがビルの外壁に叩き付けられる。

「クオン、大丈夫!?!」

「正面。ミサイル」

「くっ……!」

息つく間もなくさらにミサイル攻撃。咄嗟にEXファルガンはそれを回避するも、最後のビルを吹き飛ばした爆風に巻き込まれてしまった。

『ZUGANDAAAAA!!』

「あのパワーと装甲、どうすれば……!」

爆風のダメージは軽微なもの、重装甲高火力でまるで付け入る隙がない。何せ装甲、パワー共にEXファルガン以上の相手だ。流星にこれではソウタにも焦りが見え始めていた。

「落ち着いて。ソウタならやれる」

「そうだ。こんな時は……」

だがクオンの言葉に冷静さを取り戻し、頭を回転させ、作戦を決める。後はズガンダーが動いてくれるのを待つのみである。

『ZUGANDAAA!!』

動き出した。EXファルガンへ向かって、一直線に突進してくるズガンダー。

対するEXファルガンは、避けようともせず迫るズガンダーを待ち構えていた。

距離が段々と縮まっていく。

50m、40m、30m、20m、10m。そして……

「はあああああつ!!」

接触した瞬間、EXファルガンは突進をもつとせずその巨体を投げ飛ばしたのだ。

「よし、決まった!」

装甲の薄い腹を剥き出しに、地面に叩きつけられるズガンダー。

最大出力のEXファルガンをも押し返すパワーとなると、その運動エネルギーは相当なものとなる。ソウタはそれを利用し、柔道の要領でズガンダーを投げ飛ばしたのだ。

「ソウタ、今」

「ラストセイバー!」

再び起き上がる前に、EXファルガンはラスターセイバーを抜く。そして……。

「エンダアアスラアアツシュッ!!」

『ZUGANDAAA!!!?』

無防備な腹めがけて必殺の斬撃を叩き込み、ズガンダーは絶叫を上げながら爆散していくのだった。

怪獣ズガンダーが爆散し、事後処理が進む中ソウタとクオンの二人はEXファルガンのコクピットの中では……。

「さっきの話の続きだけど……」

「どうして私を、ここに連れてきたの……?」

「ここは、俺たちの始まりの場所なんだ」

「始まりの……?」

先程中断されたクオンの問いの答えに、辺りの景色をモニター越しに眺めながらソウタは答える。

「その広場で本物のファルガン……ついてもジェット燃料が抜かれたイベント用だったけど、披露イベントがあったんだ。それで、カズマに誘われて行ったら怪獣が出

てきて……」

「戦ったの……?」

「そのイベント用のファルガンでね。フウカともそこで出会ったんだ」

この新ヶ浜は、ソウタたちが初めてヒロイックロボで怪獣と戦った場所である。そうして初めて守った場所を見せる為に、彼はクオンをここに連れてきたのだ。

「なんで、戦おうと思ったの……?」

「戦わないとどっちにしろやられるって思ったから……まあ、やけっぱちな」

「そんな理由だったんだ……」

その時は、今のように正義とは何かを考えるような事もなく、ただ生き延びる為に戦っていた。それが本当に正しい選択なのかすらも分からないまま、半ば自棄になつて。

「今では日本最後のヒーローだなんて言われてるけど、もしもあの時カズマに誘われて来なかったらどうしてたんだろうって今でも思うんだ」

その結果、一年もしないうちに信じられない程遠い場所まで来てしまった。現状日本で唯一のヒーローとなつてしまった今、ソウタは時折考えている。

もしも戦う選択をしなかったら、今この世界はどうなつていたのか、と。

「この国は黒曜旅団に完全にやられてたのか……それとも他の誰かが俺と同じような事

をしたのかなってさ」

「けど……」

その場合、この世界がどのような現在《いま》を迎えていたのかはわからない。

だがそれでも、一つだけ言えることがあった。

「ソウタじゃなかったら私は多分ここにいなかった。こんなに“楽しい”を知ることができなかった……」

「クオン……」

「私、見つけたい。死ぬ以外の、ちゃんと生きる道を……」

ソウタがいたから、クオンは生きる希望を手に入れる事ができた。彼女の居場所を作れたのは、彼だったからこそであり他の誰でも代わりは利かなかっただろう。

「だから私も一緒に戦う」

そうして話す事で、クオンは一つの決意を固めた。

「私の、たった一人のヒーロー……」

自分を救ってくれた、自分にとって唯一のヒーローと共に戦うという道を歩むという選択を、彼女は選んだのだった。

第十一話 復活、そして決戦へ

翌日、イージスベース小会議室。

「では水無瀬くん……奴らの本拠地はそこにあるという事でいいんだね？」

「うん……」

御法川とソウタたち三人がテーブルを取り囲む中、クオンが黒曜旅団について説明をする。

「結構近いところにあるんだな」

「まあ言われてみれば黒曜旅団なんてバリバリ日本語だもんね」

「富士山の地下……。よくもそんな場所に気付かれずに建てられたものだよ」

彼女の示した黒曜旅団の本拠地。その場所は、日本有数の名所である富士山の、その地下だった。

「旅団は魔法科学の力を手に入れてるから、魔法で気づかれないように隠してるはず……」

「かつての戦いで魔王が齎した力か。それなら敵は魔王軍の残党か、もしくはその残党から技術供与を受けた組織か……。どちらにしても一筋縄ではいかない相手だね」

「逃げ出した時は麓の森から出たけど、見つけ出すのは難しそう……」

「爆撃、というわけにもいかないが……」

だが富士山の麓とは言っても、広大な緑の中の何処に基地の出入り口があるのかは一切分かっていない。

とはいえ爆撃をしまえば場所が場所だけに大火災を引き起こしてしまう。

「ひとまずは富士山一帯の監視を強化しておくしかないか」

結局場所自体はクオンのお陰で判明したものの、まだ手出しは出来ない状況が続く事となった。

「いよいよラスボスが近付いてきた感じだね」

「あれから早いもんだな」

「思い返せば色々あったね」

戦い始めてから未だ一年も経っていない。にも拘わらず、数々の強敵たちと戦い様々な出会いを経験してきた。

そして今、早くも最終決戦を迎えようとしている。新ヶ浜でのヒーローショーから始まった戦いが、ひとつの終わりを迎えようとしているのだ。

「幹部会議でも議題として取り上げておくから、君たちはゆっくり休んで準備をしていてくれ。準備が整い次第、黒曜旅団討伐作戦を実行する」

これからは攻撃作戦の調整が必要となるが、それはソウタたちの仕事ではない。ここから先は御法川に任せ、一同は一旦解散する事となった。

その後、格納庫にて。

「まずはファルブラックの修理だ！ 急げよ！」

「EXファルガン、調整終わりました！」

「ならブラックの班を手伝ってやれ！」

EXファルガンとファルブラックの整備で整備士たちが慌ただしく駆け回る中、ソウタとクオンは壁際に立ちそれぞれの機体の様子を見に来ていた。

「ごめん、クオン。いきなりこんな大変な戦いをさせることになって」

「大丈夫。これまでは一人だったけど、今はソウタがいるから……」

結果として共に戦う事を決めた直後に一大決戦に加わる事となったクオンを気の毒に思い謝るソウタ。

だがクオンは気にはしていなかった。激しい戦いはこれが初めてではないが、これまでは一人だった。しかし今回は、一人ではないのだから。

「絶対に生きて帰ろう」

「でも帰る場所は……」

「今は俺たちの家があるだろ？」

「うん、そうだったね」

そして二人はそれぞれの機体を見上げながら手を繋ぎ、そう誓うのだった。

「お嬢ちゃん、ファルブラックの事なんだが……」

「なに？」

二人で手を繋いでいると、ファルブラックを整備していた男の一人が駆け寄りクオンに訊ねてきた。

「コクピットに搭載されてる神経接続システムだったか。反応速度は確かに上がるだろうが、君への負担は大きいだろう。外しておくか？」

「付けたままにしておいて。使えるものは全部使っておきたいから……」

「わかった。だが無理はするんじゃないぞ」

「ありがと……」

彼曰く、ファルブラックには機体操作の反応速度を上げるために機体の回路と操縦者の神経を接続するシステムが組み込まれていた。

それはある程度の苦痛と共にクオンに無視出来ない負担を齎す物だが、次は最終決戦。その程度の負担など百も承知の上で彼女はシステムの搭載を決めた。

「黒曜旅団を正面から敵に回すなら、きつと彼らは魔法科学の超兵器を使ってくる。物理法則なんて通じないかもしれないけど……」

「それでもやるしかないんだ。みんなを守る為に……」

「一緒に頑張ろう……」

「ああ」

黒曜旅団の本拠地に乗り込むとなると、超空間ゲートを超える高度な魔法兵器が使われるだろう。

それを止められる可能性があるのは、世界最強の二機であるEXファルガンとファルブラツクのみ。二人は責任の重さを改めて実感しながらも、戦う決意を固める。

「皆さんお疲れ様です！お茶とおにぎり持ってきましたよー！」

そして時間は正午を過ぎ、沢山の食事を載せたカートを押しながらマドカが格納庫にやって来た。

「おお、ありがてえ！」

「お前ら！一旦飯にするぞ！」

「つしゃあ！マドカちゃんの手料理だ！」

直後、整備士たちは作業の手を一斉に止めて彼女の元へと押し寄せる。

「おかずも手づかみで食べられるスペアリブのケチャップ煮を用意してるので、みんな

で食べてくださいね！」

今回マドカが厨房スタツプにも協力を頼み用意したのは、色々な具のおにぎりと玉ねぎの甘みを効かせたスペアリーブのケチャツプ煮と野菜ステイック。

肉体労働に疲れた整備士たちはマドカから受け取ったおしぼりで手を拭ってから、我先にとそれらを手掴みで口に運んでいく。

「短い間で随分と気に入られてるなあ、マドカ……」

「楽しそう……」

短期間でここまで受け入れられて、人気者となったマドカ。クオンの目にはそんな彼女が、とても楽しそうに映っていた。

「それじゃ俺たちも昼、食べに行こうか」

「うん……」

マドカの邪魔をしないよう、ソウタとクオンはそう言つて格納庫を後にした。

一方その頃、食堂ではフウカとカズマが二人で食事を共にしていた。

「うちら、なんでこんなところまで来ちゃったんだろ……」

復活した旧支部名物のソースカツ丼を食べながらフウカがそう呟く。

「どうしたんだよいきなり」

「もしあの時買物に行ってなかったら……あの場所で転んでなかったらどうなったのかなってきー」

「そーいや俺も、ソウタと二人でヒーローショーなんかに行ってなかったらどうなったんだか……」

二人が思い浮かべていたのは、もしもの未来。

もしもカズマがソウタをヒーローショーに誘わなければ。

もしもフウカが道で転んで助けられるような事がなければ。

いずれにせよ、現在《いま》の形が大きく変わっていた事は間違いないだろう。

「今度の作戦も参加するんだよね」

「後方支援だけだな」

黒曜旅団との最終決戦には、二人もGキャリアーに乗って後方支援として参加する事になる。

「その後……どうなるのかな」

フウカが考えていたのは、その戦いが終わった先の事だった。

「どうって?」

「そりゃソウタとかクオンほどじゃないだろうけどさ……もし世界を救えたとしても、

世界を救った正義の味方なんてものになっちゃったらその後元通りの毎日に戻れるのかって不安で……」

「今考えたってどうこうなるわけじゃねえし、大人になったら酒の肴の自慢話にしようくらいに適当に考えとこうぜ。それより生きて帰るのが第一だ」

「……ごめん。そだね」

ソウタが人々の希望として祭り上げられたように、彼らもまた戦いが終わったところで元の日常に戻れる保証などない。ソウタもクオンも彼らもまた、遠い未来まで英雄の名を背負う事になるかもしれないのだ。

だが今はそのような心配よりも、生きて帰る事。カズマの言うように、今はそれが第一である。

「ようソウタ。嫁も一緒か」

そうした事を話している最中、ソウタとクオンもソースカツ丼が載ったトレイを持って相席にやって来る。

「よめ……?」

「こいつの冗談は気にしなくていいよ」

嫁、というカズマの言葉の意味がわからずに首を傾げるクオンに、ソウタはそう諭す。

「ねえクオンちゃん。ソウタのこと、一生傍にいたいって思うくらい好き?」

「……うん」

「んじやクオンちゃんはソウタの嫁だね。幸せにしてあげなよ？あ、嫁ってというのは結婚した奥さんのことね」

「ちよつと!?!」

だがそこでフウカも便乗してクオンに尋ね、頷いたところで彼女もまた、クオンがソウタの嫁だと認めるのだった。

「幸せにしてね……」

「も、勿論だよ」

過ぎた冗談に抗議しようとしたソウタだが、照れながらも嬉しそうにして抱きつくクオンにたじたじになり何も言えなくなってしまった。

「コーヒー買ってくるけど、お前もいるか？」

「あ、うちブラックでお願い」

「お前もか」

あまりの甘い惚気具合に耐え切れず、カズマがフウカと二人分のブラックコーヒーを買いに立ち上がる。

「それじゃ食べようか。いただきます」

「いた……いただき、ます？」

そしてソウタは一度手を合わせた後ソースカツ丼を食べ始め、クオンも意味がわからないながらも真似をして手を合わせてから食べ始めた。

「ほらよ」

「うっわ苦っ」

その後、カズマから受け取ったブラックコーヒーを口に含んだフウカは、慣れない苦さに吹き出しそうになっていた。

「美味しい……」

甘辛いソースが沢山かかった豚カツを満足げに頬張るクオン。そんな彼女を見て、カズマはある事に気付く。

「クオンはソースカツ丼、フォークとスプーンで食うんだな」

「箸が使えないんだよ」

「なるほどな」

まだクオンは箸が使えない為豚カツをフォークで、ご飯をスプーンでそれぞれ食べていたのだ。

幼少期に日本を離れ、最後に箸を使ったのが六歳の頃では無理もない話だろう。

「なんか小動物感あつて可愛いよね、クオンちゃん。こんな子がファルブラックなんてチート臭いロボのパイロットだなんて世の中ほんとわかんないわ」

そんな彼女を見て、フウカがそんな感想を口にする。

彼女のイメージではファルブラックのパイロットは、もつとクールで二枚目のタイプを想像していた。

だが実際に乗っていたのは庇護欲を掻き立てるような、どこか小動物的で可愛らしい少女だった。そんなクオンがファルブラックという最強クラスのヒロイックロボに乗っていたのだから、フウカとしてはとても意外だった。

「くっそソウタめ、こんな萌え属性マシマシの美少女侍らせやがって……」

一方カズマは、クオンと付き合っているソウタを羨んでいた。

ただでさえ可愛らしい上に、ある種の神秘性すら感じさせる美少女。その上かわいこぶるわけでもなく素で甘えに来るなど幼さも残し、さらには物静かだが感情豊かな所なども含めてクオンは見事にカズマの好みを突いていたのだ。

「へえ。そんじやうちじやダメ？」

そうしてソウタに嫉妬を向けるカズマに顔を近づけて、フウカはそう訊ねる。

「お、お前何言ってるんだよ！」

「本気にした？」

「んだよ、冗談かよ……」

突然の言葉に、顔を赤く染めながら困惑するカズマ。そしてからかった結果見事に狙

い通りの反応を得られたフウカは笑い、カズマはがくりと肩を落とすのだった。

「でもマジであんたの事は好きだよ？」

「マジでか!？」

「友達としてね」

「そういう事だろうと思ったよ」

だが友達として、フウカがカズマに好意を抱いているのは事実。ここから先、二人の関係が進展する時は来るのだろうか。

「そいえばマドカちゃんつてさ、友達いるの？」

その後、次にフウカが持ち出した話題は、ソウタの妹のマドカについての事だった。

「あー……」

それを聞いて、ソウタは彼女の事を思い起こし唸り声を上げる。実際彼も、マドカに友達が出来なさそうだとは思っていたのだ。

「あんな家事が趣味みたいな小学生普通じゃないでしょ」

「言われてみれば心配だな」

何せ両親の海外出張以降家事に徹り込んでしまい、放課後にはスーパーのタイムセールに走って向かうような小学生である。

友達とちゃんと遊んでいるのか、などの心配は当然の事だろう。

「それがかなりの人気者らしいよ。なんでも家庭科の裁縫道具でぬいぐるみの作り方を広めてるとか……」

「マドカの奴、万能過ぎないか?」

しかしその心配は無用だった。皆が持っている教材の裁縫道具を使った遊びを広めて、そこから友達は充分に出来ていたのだ。

「おまけに勉強も出来て運動神経抜群で、体育ではいつも一番の器用万能……。正直マドカの方がヒーローに向いてたんじゃなかったと思うよ」

その上彼女は、頭が良く成績もい上に体育の成績も学年一位。まさに非の打ち所がないというべき人間で、ソウタも自分よりマドカの方がヒーローに相応しいとさえ感じる程だった。

「そんな事、ない。私のヒーローは、ソウタしかないから」

「お熱いねえ」

「とつとと結婚しろお前ら」

だがソウタよりマドカの方が相応しいという事を、クオンは彼の手を握りながら否定する。彼女は他でもない、ソウタがヒーローだったからこそ救われたのだから。

その様子を見て、フウカとカズマの二人はそう言っただけで離れ立ってた。

「あの……さ」

「どした？」

「なにになに？」

そして食事を終わるとソウタは、最後にここに集まった三人に告げる。

「今度の作戦……絶対に勝とう」

決戦の時は、刻一刻と近付いている。

三日後の夕方。

「君たちを呼んだ理由は他でもない。ファルブラックの修理も完了し、討伐作戦の目処が立った」

「ついにこの時が……」

御法川によって再び小会議室に集められた一同は、ファルブラックの修理完了と敵の所在地判明の報告を受ける。

ついに決戦が始まる。ソウタは小さく呟きながら、震える拳を握り締めた。

「奴らの基地の出入口が確認されたポイントはこちらだ。このポイントを、追加バッテリーを装着したラスタービームで破壊し突入する」

出入口となるハッチが確認されたポイントは、富士山の丁度西の森の中。

ゼットラゴン戦の時のように、今度はしっかりと調整した上で追加バッテリーをラスタービームに装着し、それを用いてそのハッチを破壊し基地内部に突入するという計画が立案されていた。

「目標は……?」

「最優先目標は黒曜旅団首領の確保。次点で幹部だ」

そして御法川は、まずクオンの問いに答える。

ターゲットは勿論、黒曜旅団の首領。その摘発である。

「接近はどうすんだ?」

「改良した長距離ブースターを使って、超音速で突入する。Gキヤリアーは二機の交戦開始を確認してから向かって配置についてくれ」

次にカズマ。

通常の輸送機などでゆっくりと接近しては、迎撃してくれと言うようなものである。

そこで使用するのが、北海道など遠い場所へとE Xファルガンを輸送するのに使った長距離ブースターを改良したもの。これを使って、超高速で一気に接近して攻撃する作戦だ。

「結構ゴリ押しな作戦じゃん」

「相手の戦力が掴めない以上、これしかないのが実情だ」

フウカの言うように、これはある意味作戦とは呼べないような強引な方法である。

しかし敵の戦力が不明な為、下手に策を弄しても破られた場合のリスクが大きい。敵戦力が整う前に速攻で叩くのが、今のところの最善手だろうという判断である。

「作戦に投入する機体は、EXファルガン及びファルブラックの二機だ。危険な仕事になるけど、よろしく頼む」

「わかりました」

「わかった……」

そして投入されるのは、やはり現行最高戦力のEXファルガンとファルブラック。ついに作戦開始だと、そう思われたその時だった。

『御法川さん、緊急事態です！』

「どうした!」

突如アラートが鳴り響き、オペレーターが叫ぶ。

『全国各地に多数の怪獣が出現、街を攻撃しています!』

「何だ?!」

「俺たちの街が……!」

突然の奇襲攻撃。ここにきて旅団が本気になったのか、日本中のありとあらゆる街に一斉にロボット怪獣が解き放たれたのだ。

その怪獣に襲われる街の映像の中には、ソウタたちの暮らす只野市も入っていた。

「EXファルガンで出ます！」

「私もブラックで出る……」

「くっ、仕方ないか……！」

決定的に戦力不足だが、見過ごすわけには行かない。EXファルガンとファルブラックで、分担して迎え撃ちに出ようとしたその瞬間……。

『それには及ばない！』

「この声は……！」

スピーカーから響く、迫力のある女の声。その声に、ソウタは確かに聞き覚えがあった。

同時刻、只野市。

『KAMAGIRAAAAA!!』

『WYYYYYYYY!!』

カマギラーやウイズンといった多数の復活した怪獣たちが暴れ回る中、人々は恐怖し逃げ惑う。

「そこまでだッ！」

そんな中、突如空から舞い降りた何かが瓦礫を巻き上げながら着地する。

「レディファーストつか。いい所を持って行きなさる」

「あれは……!!」

そしてもう一つ、巨大な影が地面と激突し人々はふとそちらに目を向ける。

「ファルソード改！」

「ファルガン改！」

「テイク・オフ!!」

そこにあつたのは、失われた筈のヒロイックロボ。ファルソードと、ファルガノンの姿だった。

「ようやく完成したか……!!」

「八木さん！ それに藤堂さん！」

イージスベースの指令室からその姿を見て、御法川はにやりと笑みを浮かべてソウタは思わず声を上げる。

「久しぶりだね、結城くん。この短い間に随分と逞しくなったものだよ」

「他の地方にも今、改良型ヒロイックロボが送り込まれている。ここは俺たちに任せろ、少年」

颯爽と現れた二機に乗っていたのは、ゼットラゴン戦で脱出して以降行方知れずだった藤堂アリサと八木コウイチロウだった。

そしてイージスベースのモニターには、他にも多数のファルガンやファルソードといったヒロイックロボたちが全国各地に降り立つ姿が映し出されている。

「いくらおっさんたちでもそんな数、ソードとガノンの二機じゃ無理だつて!」

しかしいくらその二人とはいえ、ファルソードとファルガンで多数の再生怪獣たちを相手に戦うなど無茶だ。フウカは二人の身を案じて止めようとするが……。

「見た目こそ変わっていないが、改良されたヒロイックロボだ。そう簡単に……!」

ファルソードがブロードソードを抜き、一歩踏み出す。正面には、毒茨怪獣ウイズン。振り下ろされた毒鞭をファルソードはいとも簡単にひらりと躲し、一閃。

『WYYYYYYYY!』

「こんな奴らに後れをとることはないさ!」

斬撃を受け、胴体から上下に分かれたウイズンは絶叫を上げながら爆散し消滅した。「俺も負けていられないな!」

続いて八木もファルガノンを動かし、敵の前に立ちほだかる。

「ターゲット、マルチロック!」

そして精密射撃モードで操縦桿を素早く動かし、二体の怪獣を一気にロックオン。

「ツインラスター！ ビイイイイムウツ!!」

『SYAAAAAAAAA!』

『BIRIBIRAAAAAAAAA!』

引き金を引いた瞬間、放たれたツインラスタービームは以前とは違い街を巻き込まない細い光となって二体の怪獣、光線怪獣スプラッシュャーと電撃怪獣ビリビラーを一撃で貫き爆散させた。

「背中では任せたぞ、ファルソード」

「ああ。ならば私の背中も預けよう、ファルガノン」

「年長者として、少年たちに道を示してやらんとなー!」

「私はそこまで歳を取ったつもりはない!」

互いに背中を預け、多くの怪獣を相手に互角以上に渡り合うファルソードとファルガノン。

「すげえ……」

「無茶苦茶強いじゃん……」

その光景に、カズマとフウカはただただ圧倒されていた。

「ファルソード改にファルガノン改、流星の性能だ」

「知っていたんですか?」

何故ヒロイックロボがここまで強くなって帰ってきたのか。それは御法川の口から語られる。

「日本国内のヒロイックロボは八割が失われたが、海外のガーディアンから供与された機体と残存機体の改修を密かに進めていたんだ。EXファルガンのデータを使ってね。こんな早くに完成するとは思ってなかったけどね」

「それが、あの機体……」

日本のガーディアンが壊滅後、海外のガーディアンから密かにヒロイックロボの輸入が進められていた。

だが輸入品だけでは戦力的にも予算的にも限界があり、対応策として少数の機体で運用できるようにヒロイックロボの性能自体の大幅な強化が施される事となった。

そうしてEXファルガンを元に生み出されたのが、このファルソード改にファルガン改。新世代の、改良型ヒロイックロボである。

「それより敵はここで相当の戦力を送り込んでいる筈だ。怪獣を増産される前に、今のうちに叩くべきだと思うけどどうかな」

「俺は行けます」

「私も……」

敵の戦力がここで一気に放出され、味方も揃った以上敵の基地戦力が手薄な今が好

機。

「突然で申し訳ないが、作戦決行だ。二人は今すぐ格納庫に向かつて機体に乗り込んでくれ」

「はいー！」

再び基地に戦力が戻る前に叩くべく、予定よりも早いがこのタイミングで作戦が決行される事となった。

「クオン、君はさ……この戦いが終わったら、どうしたいんだ？」

「どうしたい……か……」

その後、カタパルトにセットされた機体のコクピットの中でソウタとクオンの二人は将来を語る。

「私は……ただソウタと一緒にいたい……。それ以上の幸せは、想像もつかないから……」

「やっぱりまだ難しいかな。それも生きる道と一緒に探していこうか」

「うん……」

まだクオンには、知らない事が多過ぎる。失った時間は、余りにも長過ぎたのだ。

とはいえ、これからもまだ時間はある。これから長い時間をかけて、クオンは自分の生き方と幸せを見つけていく事になるのだろう。

「長距離ブースター接続完了！ 二人とも、いつでも行けるぞー！」

「それじゃまた」

「またね」

整備士の男からブースターの接続完了が告げられたところで、二人は一旦通信回線を切り機体のシステムを立ち上げる。

『EXファルガン、通常モードから戦闘モードに移行します』

そして機体の音声アナウンスが、最後の戦いの始まりを告げた。

『セーフティシャッター作動、モニター展開。エネルギーライン全回路接続。火器管制システムの安全装置を解除。データリンク開始』

コクピットが閉じ、その裏の何重ものシャッターも閉じて上から目の前にメインモニターが降りてくる。

同時にサブモニターも一齐に点灯し、機体の状況が映し出された。

『電圧正常。油圧正常。イジエクシジョンシート、パラシュート共に正常。デュアルスーパーイオンバッテリー出力、190%で安定』

そして力を込め一気に操縦桿を手元に引き下ろすと同時に、EXファルガンの赤い目

が輝いた。

『ウエルカムスーパーヒーロー。EXファルガン、戦闘モードで起動しました』

「ハッチオーブン！ 長距離ブースターのコントロール権限をEXファルガン及びファルブラックに譲渡！」

カタパルトのハッチが開き、視界に夕焼けの光が射し込んだ。

同時に、長距離ブースターが機体側から操作出来るようになり各数値が表示される。

「アイハブコントロール！」

「アイハブ、コントロール……」

「進路クリア！」

道を遮るものは何も無い。後はもはや、駆け抜けるのみ。

「EXファルガン、発進ッ!!」

「ファルブラック、出る……」

二人が操縦桿を倒し、フットペダルを踏みしめた瞬間、長距離ブースターから青白い炎が吐き出されて二機は空高く飛び上がっていった。

「頼んだぞ、二人とも……」

その二人を見送りながら、御法川は呟く。

既に彼に出来る事は何も無い。この世界の運命は、二人の少年少女に託されたのだ。

「クオンも今のうちに水分補給した方がいいよ」

「わかった……」

刻一刻と戦いが近づく中、二人はスポーツドリンクで手早く最後の水分補給を済ませる。

「終わってから冬が来たら、マドカも入れて三人で温かい鍋でもしようか」

「鍋……小さい頃に、食べた気がする……」

「これまで二人だったから、三人でも使える大きい鍋を買わないといけないな。食器も揃えないといけないし、一緒にまた買い物にでも行こうか」

「ありがとう……」

彼らにとつては、戦いが終わってからの本当の始まりである。これから冬が来て、その後には春や夏、秋、そしてまた冬が来る。その繰り返しの中で、まだやりたい事は沢山ある。

「でもうちで暮らすからには家の事も手伝ってもらわないとね。マドカと一緒に色々教えるよ」

「うん。楽しみにしてる」

これから先の、家族として過ごす毎日に思いを馳せながら、二人は空の旅を続ける。

「アラート!? 避けるんだクオン!」

「っ……………」

その時だった。地上から放たれた光線がファルブラックを貫き、爆発させる。

「第四ブースター被弾……………!? 第三、第四ブースターを。パージ……………」

「クオンツ!!」

幸い機体本体は直撃していないが、長距離ブースターが破壊されてしまった。

高度が徐々に下がり、墜落しようとするファルブラックのコクピットの中でクオンは素早くコンソールを操作し被弾したブースターを切り離す。

「先に行つて。ファルブラックの飛行能力なら追いつける」

「わかった!」

攻撃を受けたのがEXファルガンでなかったのは幸いと言うべきか。空を飛べるファルブラックならば追いつけるとクオンはソウタを先行させ、後を追う。

「ゼットラゴンの!?!」

そして雲を抜け、富士山が視界に映った時。ソウタが目にしたのは、最強の敵であるゼットラゴンの姿だった。

「空対地ミサイル、安全装置解除! いっけえええええ!!」

ミサイルのロックを外し、長距離ブースターに搭載されたミサイルを放つソウタ。「長距離ブースターパージ！ EXファルガンテイクオフ！」

爆発がゼットラゴンを覆い尽くした直後、ブースターを切り離してEXファルガンは森の中へと着地する。

そして切り離されたブースターはゼットラゴンを直撃し、大爆発を引き起こした。

「どうだ……?」

炎に包まれ、見えなくなったゼットラゴン。倒せていたなら幸運だが、こんなものでゼットラゴンを倒せるなどとはソウタも初めから思っていない。

だが次に彼が目にしたのは、信じられない光景だった。

『ZOOOOO……』

「何だあれ、装甲が剥がれて……」

唸り声を上げながら、ゼットラゴンが炎の中に佇む。

その装甲は一枚、また一枚と剥がれ落ちてゆき徐々にその内部が露わとなっていく。

「一体、何が……」

光の翼を広げ、追い付いたクオンはその光景を目の当たりにして思わず目を見開く。

「あれは、生き物……?!」

『ZEGYAAAAAAAAAAAAA!!!』

一部の装甲が剥がれ、姿を現したものの。
それは生物。

それはロボット怪獣ではない、本物の生きた怪獣だった。

第十二話 小さな正義

「上手くやってくれよ、二人とも……！」

イージスペースの指令室で、モニターを見ながら御法川は拳を握り締める。

そのモニターに映されているのは、「No signal」の文字だけ。長距離ブースターでの超高速航行中は電波が届かず、一切の通信が遮断されてしまうのだ。

「EXファルガン、ファルブラックの両機が高速航行を終了！通信、回復します！」

無事にEXファルガンとファルブラックがブースターを切り離し、無事に着陸。それと同時に通信が回復し、現地の様子がモニターに映し出される。

「これは……そんな事が……！」

そしてそこに映ったものを目の当たりにして、御法川は……そして過去を知る者は皆、目を見開き驚愕するのだった。

同時刻、富士。

「違う、これまでの怪獣と……！」

「機械じゃない怪獣……!?!」

クオンとソウタもまた、その姿と恐ろしい咆哮に戦慄する。

これまで戦ってきた怪獣はどれも、金属で人工的に作られたロボット兵器でしかなかった。

『気をつけるんだ二人とも!』

「御法川さん!?!」

『そいつはこれまでの怪獣……ロボット怪獣とは訳が違う! 魔王の死によって失われた筈の、真正銘本物の怪獣だ!』
モンスターの

「本物の……怪獣……!?!」

だがここにいるモノは違う。

鋭い牙の生え揃った口からは涎を垂らし、ギロリと見開いた目を向けてくる。全身の血管は蠢き、筋肉がメキメキと軋む。

それはロボット怪獣などではない、紛うことなき本物の怪獣だった。

『よく現れたな、ヒロイックロボ』

そして通信機から、オーブンチャンネルで男の声が聞こえ始める。

「あんたが黒曜旅団の黒幕か!」

『如何にもその通りだ、若きヒーローよ。だがそれを知ってどうなる?』

ここまで懐に潜り込まれても尚、男には余裕があった。彼は告げに来たのだ。この今の世界の、その終末を。

『いずれにせよ貴様ら二人はここで死ぬ！ この究極怪獣、ネオゼットラゴンの手によって！』

『Z E G Y A A A A A A A A A A A A A A A A!!』

超究極怪獣ネオゼットラゴン。

全高30m、重量1666t。

究極ロボット怪獣ゼットラゴンが、魔王の遺した魔法科学により血肉を得て甦る事により生まれた。最強最悪の、忘れ去られた真の怪獣と呼ぶべき存在である。

「ラストブラッドガン」

先手を打ち、翼を広げてファルブラックがブラッドガンを放ちながらネオゼットラゴンへと迫る。

「弾かれた……!?! くっ……!」

だが光弾はその肉を貫くには至らず、木々を薙ぎ倒す尻尾の反撃がファルブラックを襲う。

咄嗟にクオンは機体を後退させて衝撃を和らげ、空中で体勢を立て直しながら再び攻撃を仕掛けた。

『水無瀬クオン、残念だよ。君さえ裏切らなければ、共に新世界の創造を目の当たりに出来たというのに』

「私の人格に興味なんてないくせに……」

『君なら理解出来るはずだったのだがな。この世界に、存続する価値などないという事が……』

「そんなこと、理解したくもない……!」

確かにクオンは、耐え難い程の辛い思いをしながら生きていた。

だがクオンが願ったのは、決して世界への復讐などではない。ただ、一人の少女として普通に生きる事だった。

故に彼女は否定する。黒曜旅団の、世界を壊さんとする野望を。

「ラストービームライフル!」

ファルブラックとネオゼットラゴンが交戦する中、EXファルガンも続いて援護射撃を放ち敵の動きを鈍らせた。

「クオン、連携して行こう!」

「わかった」

超究極怪獣ネオゼットラゴン。

とてもヒロイックロボ単機で敵う相手ではない以上、連携は必須である。

ソウタとクオンの二人は息を合わせ、ネオゼットラゴンへと同時攻撃を仕掛け始める。

「よーし到着ー！」

「待たせたなソウタ！ 援護するぜ！」

「助かる！」

続いてGキャリアーも到着し、戦闘に加わる。これで味方側の戦力は全てだ。

「俺が操縦と砲撃を担当する！お前はあいつらと交信しながら、必要に応じてミサイルを撃て！」

「おっけー！ ミサイルって確か自動で飛んでつてくれるんだよね」

フリグラス戦での特殊な使い方を除けば、初めてのミサイル。フウカが使い方を確認すると、彼女とカズマの二人はそれぞれ役割を分担し配置についた。

『ヒーロー気取りの木偶人形がいくら足掻いたところで、真の怪物であるネオゼットラゴンにはそう易々と勝てるとは思わないことだ』

三対一という状況で尚、ネオゼットラゴンは一步も下がることなく迫ってくる。

「レールキャノン一番二番、発射！」

「ラスタービームライフル！」

『諦めろ。模造品の勇者で叶う筈がない』

G キャリアーとEXファルガンはそれぞれレールキャノンとビームライフルで迎え撃つが、ネオゼットドラゴンの巨体には傷一つ与えられない。

もはや三対一など問題ではない。取るに足らない相手だということなのだろうか。

「ラスターブラッドセイバー」

『ZEGYAAAAA!』

「しまった……!」

直後にブラッドセイバーを手に斬りかかったファルブラックをも払い除け、全身の装甲を展開させた。

「ミサイル、来るよ!」

気付いたフウカが咄嗟にソウタたちに警告する。

だが時は既に遅く、気付いた時には無数のミサイルが視界を覆い尽くしていた。

「うわあっ!!」

「くうっ……!」

次の瞬間、ミサイルが一齐にEXファルガンとファルブラックを襲い、爆炎が二機を覆い尽くした。

「なんて強さなんだ……!」

「これが、本物の怪獣……!」

「ぐっ……うう……!!」

「クオンツ!!」

それは、ファルブラックだった。クオンが自らを盾にして、ソウタのEXファルガン
を庇ったのだ。

「ファルブラックのkokピット温度が200℃……300℃突破!?! 早く逃げないと
!」

「脱出したらその瞬間蒸発して死ぬぞ!」

ファルブラックのkokピット内の温度が上昇し、データリンクしたGキャリアーにも
警告音が響く。

このままでは危険だが、脱出装置を使えばそれこそ即死だ。

「クオンちゃん……!」

「死なせない……死にたくない……。死んで、たまるか……!」

蒸し焼きのkokピットの中で、クオンの皮膚が爛れていく。

「ダメだクオン! そのままじゃ……!」

「絶対に……守る……」

だがそれでも、彼女は操縦桿から手を離さない。ようやく出会えた、大切な人を守る
為に。

「絶対に……殺すッ!!」

その時、クオンの瞳が紅く輝いた。

「魔法陣!?!」

突如ファルブラックの前に現れた魔法陣が光線を遮って無力化する。

「消えろ」

『ZEGYAAA!?!』

そして手を振りかざした瞬間、魔法陣はネオゼットラゴンへと受けた光線を押し返し、膨大なエネルギーを口の中で爆発させた。

「殺す……!?!」

翼を広げて、ネオゼットラゴンに肉薄するファルブラック。

怯んだ隙に懐に潜り込むと、ファルブラックはネオゼットラゴンの爆発で外れた下顎を引きちぎり、垂れ下がった舌を引き抜いて血を辺りに撒き散らした。

「そうか、そういう事か……!?!」

イージスベースの指令室で、御法川は気付く。自身が思い込んでいた、一つの重大な誤解に。

「魔王復活に本当に必要なのはファルブラックではなく、水無瀬クオン……」

彼は魔法の組み込まれたファルブラックのブラックボックスを取り外すことで、魔王

ここから再び、始まるうとしていたのだ。魔王の復活が。この世界の終焉が。

「があああああああつ!!」

「攻撃してきやがったぞ! どうすんだ!」

「どうするって、クオンちゃん撃つ訳にはいかないでしょ!」

暴走したファルブラックは、今度はこちらへ向かってラスタブレードガンを撃ってくる。

敵ならば倒せば済む話だが、ただでさえ強力な相手である上に乗っているのはクオン。単純に破壊するというわけにもいかない。

「俺が止めてくる」

「止めるってどうやって! コクピット壊すなんて通じそうにないよ!」

その上今度は暴走の原因は機体ではなくクオン自身である。前回のように、コクピットの魔法的な装置を破壊すればいいなどということはない。

「突っ込んで接触してみる。援護は頼んだよ」

「ノープランかよ! しゃあねえな!」

「ドローン全機射出! デコイ代わりにはなつてよね!」

「ありがとう。行こう、EXファルガン」

完全なるノープラン。だがそれでも再びクオンを救い出す為に、仲間の手助けを受けて

EXファルガンはブースター全開で飛び立った。

『さあ選ぶがいい、少年よ。愛する者に滅ぼされるか、その手で愛する者を滅ぼすかな』

「そのどっちも選ぶ気はない！」

『ならば死ぬ。そして、この先の果てなき絶望による安寧の礎となるがいい』

今やガーディアンも黒曜旅団も関係ない。ただ一人の好きな人を救う為だけにソウタは飛んでいる。

そんな彼には敵の首領の声など、もはや聞こえてはいなかった。

「クオン！ 俺だ、ソウタだ！」

「ソウ………タ………？」

そしてファルブラックと対峙したソウタは、残されたクオンの自我を呼び覚まそうと叫ぶ。

「戻ってきてくれ、俺たちの所に！死ぬ以外の道を一緒に考えるって決めただけじゃ
ないか！」

「あ………あ………！」

その声にくオンの人格が呼び覚まされるが、表面に表れた魔王としての衝動に阻まれ、衝突し、激しい頭痛が彼女を襲った。

瞬間、赤黒い光が彼女を中心に収束し、ファルブラックを覆い始める。

「ヤバい、離れろソウタツ!!」

「嫌あああああああつ!!!」

そしてカズマが叫ぶも時すでに遅し。ファルブラックを中心に光が爆発し、辺りの木々と共にEXファルガンを飲み込む。

次の瞬間、カズマたちが目を開くとEXファルガンの姿は跡形もなく消え去っていた。

「嘘だろ……」

「ソウタああああ!!」

この時、EXファルガンはソウタと共にこの地上から消滅した。残ったのは単独で戦う力のないGキャリアーと、暴走したファルブラックのみ。

世界の終焉が今、目前となった。

その頃、只野市では……。

「エンダアアア! スラアアアアツシユウ!!」

「ツインラスタアアアビイイイイム!!」

う』

「すぐに止めに行かないと……。あなたは行けますか」

「ああ。勿論だ」

『長距離ブースターの準備はしている。君たちはすぐに帰還してくれ』

「わかりました」

予備の長距離ブースターで富士へと向かう為、二人はイージスベースへと帰還しようとする。その時だった。

「そうはさせません」

突然通信機から聞こえた女の声と共に、空から何かが降下して瓦礫を巻き上げながらアスファルトの地面に着地する。

「誰だ!？」

「あれは……人型……?」

土煙が晴れたその時、そこに存在したのは女性のような細身の体型の、桃色をした人型巨大ロボットだった。

「恐怖と絶望による世界の調和……。あの人の理想は、誰にも邪魔はさせません」

「貴様、何者だ」

突如現れた、ヒロイックロボとは異なる巨大ロボット。その招待を問うアリサに、女

は答えた。

「黒曜旅団、旅団長補佐……フィーネ。そしてこの機体は魔人機テレスティア」
魔人機テレスティア。

全高25m、重量480t。

黒曜旅団が世界征服に向けて開発した、魔王の器としての機能を有しない量産型フルブラックの試作一号機である。

「来るぞ八木！」

「ああ！」

「あなたたちはここから行かせはしません。あの人の夢を守る為に……」

フィーネと魔人機テレスティア。未知の敵を相手に今、こちらの第二ラウンドが始まった。

「()は……」

気が付くとソウタは、静寂に包まれた暗闇の中にいた。

「冷たい……」

雪のように冷たく、どこまでも深い暗黒。足場すらなく、前後上下左右も分からなく

なるような空間の中、彼は漂う。

「うぐっ……!」

そんな中、突然頭痛がソウタを襲う。

「うわあああああああつ!!」

次の瞬間、大量のビジョンが一気に頭の中に流れ込み、脳を直接殴られたような衝撃を受けた彼は思わず絶叫を上げた。

「これは……クオンの記憶……?」

中東の観光地でのテロ事件。

武装組織による少年兵の洗脳。

廃墟となった街中での銃撃戦。

苦しみの中、ソウタが一瞬にして体験したそれは、クオンの過去だった。

そして気付く。この場所が一体何処なのか。その真実に。

(暗い……)

クオンもまた漂う。どこまでも暗い、静寂の中を。

(私が、消えていく……)

彼女は感じていた。魔王の力に冒され、自分の心が消えていく事を。

(声が、聞こえる……)

その中で、彼女はひとつの声を聞いた。出会って間もないが、それでも心に刻み込まれた少年の声を。

「クオン！ ここにいるんだろ！」

「ソウ……タ……！」

互いの姿は決して見えない。だがそれでも、暗闇の中で二人は確かに互いの存在を感じ合っていた。

「ソウタが、私の中に……」

「俺の中に……クオンが……！」

肉体から切り離された世界で、二人の存在が、心が混ざり合う。

互いの中に互いが溶け込み、怒り、悲しみ、喜びなど色々な感情が共有されていく。そして二人が互いを受け入れたその瞬間、彼らの視界が突然真っ白に染まった。

次の瞬間、目を開けると二人はまるで絵の具が混ざりあつたような色彩の、不思議な空間にいた。

「ソウタ……？」

「クオン……」

そしてそこでは、先程の暗闇とは違い互いの存在がしつかりと二人の目に見えていた。

「ごめん。君の記憶を見たよ」

「私も同じ……」

暗闇の中で、ソウタとクオンは互いの全てを知った。辛い事も楽しい事も、全ての記憶を共有し、二人の信頼はさらに強固なものとなっていたのだ。

「もう一度行こう、クオン。今度こそ、こんな事は終わりにしよう」

「わかってる。決着は……私たちの手でつける」

一体自分たちがどこにいるのか、そもそも生きているのかすらわからない。こうなってしまった今、出来ることはないのかもしれない。

それでも二人は諦めずに、戦う事をけつりする。これまでの全ての戦いに決着をつけるために。

そして二人が手を繋いだ瞬間、それは現れた。

《見せてもらった。君たちの意志を》

白い霧のような、しかしはつきりと人の形をした何か。それが突然現れ、二人に語りかけたのだ。

《魔王の放ったエネルギー波に私のエネルギー体を割り込ませる事で、なんとか気付か

れずに君たちと接触することができた》

「あなたは……？」

《私は、そう……君たちがかつて、ヒーローと呼んだ存在だ》

フアルブラックのエネルギー爆発と同時に、エネルギー体となつてソウタとクオンに接触した。

それは、かつて数十年前に人類の為に魔王と戦い、ヒーローと呼ばれた存在だった。

「俺たちは一体……どうなったんだ……」

《君たちがいるのは君たちの心から生まれた、時の流れから隔絶された異空間だ。我々の力と、爆発のエネルギーを重ね合わせてなんとかこの空間を発生させ、現実空間を繋げることができた》

爆発に巻き込まれて消滅したソウタだが、まだ彼は死んではない。

勇者と魔王、正と負の二つのエネルギーの衝突によつて発生した莫大なエネルギーを元に空間を作り出し、一時的に避難させられた状態である。

そして魂と物質の境界が曖昧なこの精神世界に、クオンもまた引き込まれていたのだ。

《世界は今、再び闇の脅威に晒されている。この世界を救う為に今こそ私と一つになり、共に平和を守る使命を果たしてくれないだろうか》

「それは……」

勇者は告げる。この世界を再び、闇が覆おうとしているという事を。

その闇から世界を守る為、共に一つとなってヒーローとして戦おうと。そう告げる言葉に一瞬ソウタは悩むも、その答えはすぐに出た。

「俺たちの世界に……あなたはきつといちゃいけないんだ」

勇者の拒絶。それが、ソウタの選んだ答えだった。

そして全てを共有したクオンもまた、言葉がなくともその意志を全て理解している。

「俺はクオンと会って知ったんだ。正義は綺麗事だけで語れるほど簡単なものじゃないんだって」

偶然ヒーローとなったソウタだったが、その後彼はクオンと出会う事により正義について考える機会を得た。

「ひとつの正義に救えるものなんて、ほんのひと握りしかなかった……」

クオンは知っていた。

正義の味方を名乗る者に救える存在など、極わずかでしかないという事を。

彼女自身が、その正義によって救われない人間だったのだから。

「だからこそ、この世界にたった一人のスーパーヒーローなんて必要ない。絶対正義なんてあっちゃいけない。ひとつの正義じゃ何も救えないこんな世界だからこそ、無敵の

正義の味方なんていちやいけないんだ」

ソウタは否定する。たった一つの絶対正義を。無敵のスーパーヒーローの存在を。

実際にEXファルガンという圧倒的な力を得て唯一無二の正義の味方という立場になって、彼は理解していたのだ。唯一の正義に、全てを救う事などできないという事を。

「正義は沢山あった方がいい。正義に見放された人にも、また別の正義の味方が手を差し伸べてくれる。そんな世界なら、きつと誰にだっていつか救いはあるから」

クオンは肯定する。力が弱くてもいい。幾つもの、小さな正義がある世界を。

人間同士の殺し合いである戦争の中で人を殺し、不本意でこそありながら悪の野望の中核を担った彼女は、正義によって殺される事での贖罪を願った。

だがそれでもソウタという一人の小さな正義は、そんな彼女を救い出してくれた。そんな小さな正義が幾つもあるれば、全ての人々の心が誰かの小さな正義によって救われる事を、彼女は信じていた。

「そして誰でも、誰かに手を差し伸べられる正義の味方になれる。その為の、誰もがヒーローになる為の力がヒロイツクロボなんだ！」

一つの大きな正義がなくとも、無数の小さな正義が誰かを救う、その為の力になる。

それがソウタの見出した、ヒーローでありながら量産機でもあるヒロイツクロボの存在意義。

これが、様々な出会いの果てに彼が辿り着いた、正義の結論だった。

《だがその選択は、時には正義と正義の衝突も有り得るだろう。それは君たち人類にとって、きつと果てしない苦難の道になる筈だ》

「わかっている！俺とクオンだって、最初はそうだった！だけど今はこうして手を取り合えたんだ！」

勇者の言うように、複数の正義が存在する事は過去にも様々な戦争を生み出してきた。

ソウタとクオンの選択は、その歴史を再び繰り返す事になるかもしれない。

だがそれでも二人は信じていた。

自分たちが衝突の果てに分かり合えたように。

過去に戦争を繰り返しながらも、手を取り合い平和を築き上げた多くの国々のように。

互いに正義がある限り、争いの果てにもいつか人は必ず分かり合う事が出来るという事を。

《どうやら人は、既に我々の想像の遙か上を進んでいたようだ》

その二人の思いを汲み取った勇者は確信する。人間がこの二人のようになれるのなら、例え争いが起きたとしてもその先で悪いようにはならないだろうと。

《信じよう、君たちの選択を。そして君たちに、輝かしい未来があらんことを願う》
次の瞬間、二人の身体が光に包まれる。

そして勇者に見送られながら、二人は意識を手放した。

富士の街にて。

「おばあちゃん、大丈夫？ また帰ってこれるからね」

「ありがとね、お嬢さん」

戦闘続行は不可能と判断して戦闘区域から撤退したGキャリアーは今、莫大なキャパシティを活かして避難民の収容を行っていた。

「避難民の収容はその婆さんで最後か？」

「うん！」

フウカの誘導で残った全ての避難民を収容したGキャリアーは、カズマの運転で再び走り出した。

「けどアレ、どうすんのよ……」

「もうファルブラックの原型留めてねえぞありや……」

空には赤黒い人型の塊と化し、原型すら失ったファルブラックが静かに鎮座してい

る。

放置しておくわけにもいかなかったが、カズマたちに来ることは何も無い。ここは諦めて街を出ようとしたその時だった。

「ははははははは！　これでついに必要なデータは全て揃った！」

「何だよありゃ！」

富士山の麓から、突如巨大な何かが現れる。

月を背に現れたそれは、ファルブラックにも似ているが更に強面で屈強な、ハルバードを手にした黒のような灰色の機体だった。

「必要な要因《ファクター》は全て特定した！　あとは私があの実験体を破壊すれば、私こそが唯一の王となる！」

その機体から響き渡るのは、黒曜旅団の首領の声。乗っているのはターゲットである、その首領だった。

「あいつの狙い、ファルブラックじゃない!？」

「はあ!?!　どういいうつもりだよ！」

だがその機体が狙っていたのは何故か、復活させるべき魔王の器である筈のファルブ

ラックだった。

「これで最期だ。安らかに眠れ、水無瀬クオン」

首領の機体の胴体に、両肩に、両腰の砲口に、赤黒い光が収束していく。

「クインデッドブラスタ、発射ッ！」

そして次の瞬間、放たれた五本のビームは集まって一本の巨大なビームと化して魔王を飲み込み、爆発。一撃でこの世界から消滅させた。

「魔王のデータは得た。これさえあれば、私は……」

「ファルブラックが……やられちゃった……」

「これから一体どうなっちまうんだよ……」

これでEXファルガンもファルブラックも失われた。二つの希望を失った今、もうこの世界には絶望しかないのかと、カズマが諦めかけたその時だった。

「待って、爆発の中に何かある！」

「なんだってんだ！」

ファルブラックの爆発の中に、何か光っているのをフウカが見つけたのだ。

「これは……嘘……」

「おいおい、マジかよ……」

その光を拡大した時、二人の目に映ったのは余りにも衝撃的で、且つ希望に満ちた光

景だった。

「ソウタとクオン、なのか……？」

そこにあつたのは、光の玉に包まれて空に浮かぶソウタとクオンの二人の姿。

二人はまだ、死んでなどいなかったのだ。

「クオン、大丈夫？」

「うん。私の中に、魔王はもういない」

そして一度ソウタと一つになり、光の勇者と邂逅したクオンの中にはもう魔王など残ってはいなかった。

「今の私は、ただの人間だから……」

魔王の細胞の副作用である銀髪も赤い目もそのままだが、確かに彼女は今、一点の曇りもない普通の人間となっていたのだ。

「決着をつけに行こう」

「わかってる」

後は黒曜旅団と、これまでの戦いの決着をつけるのみ。ソウタとクオンは空へと腕を掲げ、そして……。

「EXファルガン！」

「ファルブラック……！」

「テイク・オフツ!!」

二人が光に覆われた瞬間、その光は段々と大きくなって人型を形作っていく。

そしてその中から現れたのは、二つの希望。深緑の巨人、EXファルガンと黒き天使、ファルブラックの姿が確かにそこにあったのだ。

「変身だとい?」

その現象に、首領は驚愕の声を上げる。何せそれは、数十年前に光の勇者が行っていた変身と全く同じ現象だったのだから。

「コクピットは同じ……。クオンも大丈夫?」

「うん。こつちも変わってない」

変身したとは言っても見かけだけ。機体性能も操縦方法も、これまでと何一つ変わっていない。

しかし二人にはそれで充分だった。絶対唯一の正義よりも小さな正義を選んだ彼らにとつて、ヒロイックロボで決着をつける事にこそ意味があるのだから。

「だが所詮は木偶人形に変わりはない!」

そして首領は電波をハッキングして中継を繋ぎ、二人にハルバードを向けながら告げた。

「聞け、この世界に生きる者どもよ! 我が名はA—Z! AからZ、即ち全を統べる者

だ！」

「A—Z……！」

「これより私は全ての悪の頂点に立ち、全ての悪を支配する。その証明として、今ここで我々に刃向かうこの二人の身の程知らずを抹殺してご覧にいれよう」

A—Zを名乗る男もまた、救うべき者を救えない正義を否定した。

そしてソウタたちが小さな正義を望んだのに対して、彼は絶対悪を望んだ。

「ここで終わりにする！」

「私たちの、明日の為に……！」

「この超魔神機ゼダークで、貴様らを絶望の底に叩き落としてやろう！」

小さな正義の為に、ヒロイツクロボ。

絶対的な究極の悪の化身、超魔神機ゼダーク。

同じものを見ながら違う場所を指した二つの力が今激突する。

ここに真正正銘、最後の決戦が幕を開ける。

最終話 英雄伝記

「新世界の誕生の贄となって果てる、ヒロイックロボ！」

「来る……！」

先手を取ったのはA-Zの方だった。

ハルバードを振り回し、両手で構えるゼダーク。

次の瞬間、ハルバードの先端から赤黒く禍々しい光が解き放たれ、500mはあろう
巨大な剣となつて振り上げられた。

「ダークネスソード」

ダークネスソード。巨大な魔剣の一撃が振り下ろされ、空を、大地を割った。

「ぐっ……！」

「凄い威力……！」

すぐさま反応し、回避するEXファルガンとファルブラック。だが完全に避けても
尚、その衝撃は両機を襲い、操縦桿を伝つて二人にもその威力を痛感させた。

「クインデッドビーム」

「うわあっ！」

だがそれでもソウタは、EXファルガンは立ち上がる。

「ほう。耐え切ったか」

続いてファルブラックもまた立ち上がり、A―Zは二人が予想以上に持ち堪えた事に興味を抱き、不敵な笑みを浮かべた。

「A―Z、あなたの野望はもう終わったの……。私の中の魔王は死んだ。だからもう、魔王は復活しない」

だがクオンは光の勇者と邂逅した事により、魔王の呪いからは解放されている。魔王の細胞が失われた今、もう二度と魔王は蘇る事がなく黒曜旅団の野望は潰えた。

そう、クオンは思い込んでいた。

「何を勘違いしているんだ、水無瀬クオン」

だがA―Zは余裕の表情で、その思い込みを否定する。

「貴様とファルブラックなど元よりデータ採取用のサンプルに過ぎない。もう一つの細胞を心臓に埋め込んだこの私と、ファルブラック第二号機……超魔神機ゼダークが新たな魔王となる為の、な」

「そんな……!?!」

初めからA―Zは、クオンとファルブラックを依代に魔王を復活させる気など無かった。

クオンが魔王として覚醒し始めた段階のデータを採取し、そのデータを解析する事でA—Z自身が魔王になり、新世界を支配する為の礎とする。それが、予定された真の魔王復活計画だったのだ。

「今度こそ終わりにしてやろう」

「エネルギー切れ……？」

A—Zの宣告と共に、ゼダークは手に持ったハルバードを構える。

しかし今度はダークネスソードを展開してくる様子はない。あれだけ必殺技を連射したのだ。エネルギーが尽きていても無理はないだろうとソウタは推測する。

「来る……！」

「さよならだ」

ブースターから巨大な炎を噴き出しながら、ハルバードを構えて向かってくるゼダーク。

ソウタとクオンが迎え撃つべく身構えライフルの引き金を引いた時、“それ”は起きた。

「きゃあああああつー！」

弾道から突然ゼダークが消滅したと同時にファルブラックが突然不可視の攻撃を受け、激しく吹き飛ばされたのだ。

「クオン!? うわあああああつ!!」

次の瞬間、コクピットに凄まじい衝撃が走りEXファルガンも地面に叩きつけられた。

痛みが走る中、空を見上げるとそこには既にハルバードを振り下ろしたゼダークの姿があった。

「今の、何……?」

「まるで、動きを切り取ったような……」

何が起こったのか、二人には全く理解が及ばなかった。

言えるのはゼダークが向かってきたと思えば姿が消えて、同時に見えない攻撃に襲われ、気が付くとゼダークはハルバードを振り終えていたということ。

「死ね。ダークネスソード」

「まずいッ!」

「くっ……!」

考える間もなく、ダークネスソードの薙ぎ払いが二人を襲いソウタたちは咄嗟にその一撃を避けて体勢を建て直した。

「また大技……。どこにあんなエネルギーが……」

ソードを出さずにハルバードを構えた時、エネルギーは切れたものだとソウタは思っ

ていた。だが実際には、こうして再び必殺の一撃を振るってきている。

まさに付け入る隙なし。それほどまでに、超魔神機ゼダークの力は圧倒的過ぎるのだ。

「ここまで耐え切った褒美に教えてやろう。これが時喰《じくう》エンジンの力だ」

「時喰……エンジン……!?!」

無尽蔵のエネルギー。不可視の攻撃。その真実が今、A—Zの口から語られる。

「この世界に普遍的に存在している、時が流れるエネルギーを喰らい尽くし、爆発的な高出力を無尽蔵に得られるのがこの時喰エンジン。そして時を喰らう瞬間、再び補填されるまでの数秒だけこのゼダーク以外の全ての時間は停止する」

「無限エネルギーに時間停止……!?!」

時喰エンジン。この宇宙に漂う時流をエンジン内部に収束させ、時の流れを加速させる事でタービンを回し無尽蔵のエネルギーを得る、黒曜旅団の魔法科学の結晶。

この装置が作動した瞬間、ゼダークのエネルギーは最大まで充填されると同時に、世界の時は一瞬だけ停止する。

これがこの、超魔神機ゼダークの圧倒的な力の源なのだ。

「そう、その通り！ 決して尽きることのないエネルギーと、時を止める絶対的な力！

この機体の前では、ファルブラックなど張りぼての試作品に過ぎない！」

超魔神機Z―DARK。

全高35m、重量1170t。

別名、ファルブラック第二号機。

周囲の時の流れを吸収し、無尽蔵のエネルギーを得ながら時を止める時喰エンジンを搭載した、黒曜旅団の誇る空前絶後のスーパーロボットである。

「くそっ、これじゃ近づけない！」

「近付いても時間停止が……」

時の流れの力を得て再び必殺の攻撃を乱れ撃つゼダーク。

その凄まじい猛攻の上に、近付けば時間停止攻撃が来る。八方塞がりの中、ソウタとクオンは必死に敵の攻撃を避け続ける。

「もう無価値なのだよ、その機体も！　そして貴様もッ！」

目的に必要なデータを得た今、クオンはもはや不要な存在なのだと、価値のない存在なのだとA―Zは断ずる。

「違うッ！　クオンは絶対に、無価値な人間なんかじゃない！」

EXファルガンが、ビームライフルを向けて放った。

クオンの存在が無価値だなどと、決して認めまいとソウタはA―Zへ銃口を向ける。

「目障りだ、作り物風情が」

「ぐうっ!!」

羽虫を払い除けるように、EXファルガンへ向けてゼダークが腰のビーム砲を放つ。

直後、ラストブラッドセイバーを手にしたファルブラックがゼダークの直上から斬りかかった。

「確かに、私の命に価値はないのかもしれない……」

即座にゼダークはハルバードを振り上げて応戦する。

鏑迫り合いの中、クオンは呟く。彼女自身、自分の命に価値があるなど、まだ思ってもいなかった。

「けど、それを決めるのはあなたじゃない!」

それでもクオンは否定する。彼女の命を無価値と断ずる、A-Zの言葉を。

「私の価値は私が決める! 精一杯生きて、最後に死んでいくその時に!」

人の命の価値は、生きている間には誰にもわからない。他人にも、さらには自分すら。

それが決まるのは、その人間が死にゆく時。その刹那に、人の価値は決められるのだと。

「戦いしか知らない、血に塗れた小娘が過ぎた事を」

「それでも最期に価値があったって……生きてて良かったって思えるように、私は生き

るッ！」

そしてその時に自分の命が、人生が価値のあるものだったと。そう信じて笑って終わるように、クオンはこれからも生きる事を決めたのだ。

「そうだ！ 俺たちはその為に、これからも生きていく！ お前なんかそれを否定させやしない！」

クオンに続いて、ソウタもまたラスターセイバーを展開しゼダークへと突撃する。

「ならば貴様らの命が取るに足らない無価値なものだということを、その身に刻み込んでやろう！」

戦う意味を、生きる意味を固めた二人を前に、A-Zがそう告げるとゼダークの瞳が強く輝く。

「時喰エンジン作動！ 時よ、我が糧となれッ!!」

そして、世界の時が停止した。

「きやああつ！」

「クオン！」

瞬間、ハルバードの一撃でファルブラックが地面へと叩きつけられる。

「クインデッドビーム！」

そしてゼダークはEXファルガンへ向け、必殺の光線を放った。

一方その頃……。

「ここまで来れば今は安全です！ 落ち着いてバスに乗り換えてください！」

「黒曜旅団……怖いねえ」

「お兄ちゃんたち、ありがとうっ！」

「ああ。元気でな」

富士山から遠く離れた場所でGキヤリアーは停止し、カズマとフウカは他のガーディアン職員と協力して避難民を合流したバスへと誘導していた。

「飴あげる！ 一つはお姉ちゃんに！」

「ありがとな」

「またねー！」

避難民の少女から二つの飴玉を受け取ったカズマは、最後の住民の誘導を終えて後バスに任せると、Gキヤリアーの中で待つフウカの元に向かった。

「それ、子供から」

「さっきゆ」

貰った飴はイチゴ味とメロン味だが、適当にメロン味をフウカに手渡す。

「何してんだ？」

そして飴玉を口に含みながらもモニターに釘付けになっているフウカに、カズマは尋ねた。

「おかしい……」

「おかしいって何がだ？」

そのモニターに映るのは、今ゼダークと戦っているEXファルガンとファルブラックの中継映像。それを見てフウカは、ある事に違和感を覚えていた。

「敵の能力って、無限エネルギーと時間停止だよね」

「チートだろ。どうすんだよそんなもん……」

AーZの言うように、ゼダークが持つ時喰エンジンの能力は時を止める事と、無尽蔵のエネルギーを得る事。一つ一つで見ると、まるで無敵にも思えるだろう。

「でも、それなら時間止めて必殺技撃てば瞬殺じゃん？なんでそれをしないのかなーって」

「言われてみれば……。つか時間停止乱発すりゃ無敵なのに、それもしてこないよな」
だがそこでフウカが気付いたのは、ゼダークの行動パターン。

本気で勝ちたいのならば、常に時を止め続けなければならない。時を止めたまま必殺の一撃を加えればいい。

しかしゼダークはそれをせず、不自然に必殺技の連射と時間停止攻撃を交互に繰り返しているのだ。

「待てよ、そういうことか！」

「うん、私も分かっちゃった」

そして二人は気付いた。超魔神機ゼダークの無敵の能力の、たったひとつの欠陥に。

「あいつらに回線繋いでくれ！ 早く！」

その事を伝えるべく、フウカは大急ぎでEXファルガン、及びファルブラックとの通信回線を開いた。

「ダークネスソード！」

叫びと共に、ダークネスソードの刃が振り下ろされる。

その一撃をEXファルガンが避けた瞬間、世界の時は停止した。

「があっ!!」

「ソウタ……!?!」

次の瞬間、ハルバードの一撃がEXファルガンを襲い弾き飛ばした。

絶大な火力と時間停止。その二つを攻略しない限り、ソウタとクオンに勝利はないだ

ろう。

『聞こえるか二人とも!』

そんな中、通信機からカズマの呼びかける声がコクピットに響く。

「カズマ!? 今は話してる余裕はないんだ!」

『いいから聞け!』

「なにかわかったの……?」

『ゼダークだったか。そいつの能力の穴の見当がついた』

「本当なのか……!?!」

必殺の攻撃が飛び交う中で余裕のないソウタとクオンだったが、ゼダークの欠陥の見当がついたというカズマの言葉に耳を傾ける

そしてカズマとフウカは、ソウタたちにその説明を始めた。

『ああ。結論から言うと、奴は多分大技と時間停止を同時には使えない。それに大技を何発も撃った後じゃないと時間停止を使えないんだ』

『つまりつまりー! エネルギ―回復と時間停止がセットだからー、エネルギ―が充分に残ってるうちは回復できないから時間も止められないってわけ! だよね?』

時喰エンジンの能力は、失ったエネルギ―を全て回復し、その分時間を止めるというもの。

一見すると二つのメリットが合わさった無敵の能力に見えるが、見方を変えると「エネルギーを回復しなければ時を止められない」という事になる。

つまり予めエネルギーを消費させなければ、時を止めることもできない。それがカズマとフウカの見出した、超魔神機ゼダークの欠陥だった。

「ありがとうフウカ、カズマ……」

「助かったよ」

『まあねー』

「確かに、それならこれまでの大技連射と時間停止を交互に繰り返す動きにも説明がつく……」

クオンの言うようにこれまでゼダークの動きは、必殺技の連射と時間停止攻撃を交互に繰り返していた。

その必殺技の連射が、エネルギーを消費し時間停止攻撃を繰り返す為の下準備だとしたら、カズマたちの推測は辻褄が合う。

「でもどうすればいいの……?」

「それなら攻撃タイミングは、時間停止を使ってきた直後だよ。連携して接近しよう」「わかった」

狙うは時間停止の直後、エネルギーが全て回復したその瞬間。

仲間の機転を力にゼダークを討つべく、EXファルガンとファルブラックが飛び出した。

「まだ向かってくるとは、無駄な事を。ダークネスソード」

そしてゼダークは、ダークネスソードの刃を伸ばして二人へと振り下ろした。

「来るよクオン！」

「まずは大技を撃ち切らせる……！」

ここまでは狙い通り。先読みしていたダークネスソードの一撃を避け、次の攻撃に備える。

攻撃に回る必要は無い。ただ、避ければ良い。それだけに集中して、二人は回避運動を続ける。

「ちよこまかと……消え失せろ」

「まだだ、耐えろ……ッ！」

繰り返し放たれる必殺技の猛攻。全てが一撃必殺の威力を持つそれを避け続ける中、その時は訪れた。

「今度こそ滅び去れ、模造品ッ！」

再びゼダークがハルバードを構え、ブースターに火を灯す。

次の瞬間、世界の時間は停止した。

「ぐっ……!!」

衝撃が走る。ハルバードの一撃を受け吹き飛ばされるEXファルガンのコクピットで、すぐさまソウタは操縦桿を握り直してペダルを踏み、体勢を立て直した。

「まだだ! ラスターセイバー!」

そして実弾ライフルを放ちながら、ラスターセイバーを片手にゼダークへと突撃していく。

「自棄になったか。愚かな」

勝てないとわかつての特攻かと、A―Zは嘲笑し迎え撃とうとハルバードを構える。

「エネルギーバイパス直結、使用登録完了」

「今だ、クオンツ!」

瞬間、ゼダークの直下。森の中で、一つの光が輝いた。

「何だと!」

「ラスター! ビイイイイムツ!」

「ぐあああああつ!!」

バズーカを構え、ファルブラックがラスタービームを放つ。これは突入時にEXファルガンが切り離れた、長距離ブラスターに搭載されていたものだ。

極太のビームで空高く打ち上げられるゼダークの中で、A―Zは叫び声を上げる。

「このまま畳み掛ける……!」

そしてファルブラックはバズーカを投げ捨て、翼を広げてEXファルガンと共に追撃にかかる。

下から放たれたビームライフルの一撃を、ゼダークが避ける。

次の瞬間、月に照らされた星空の下でクオンとA-Zが、二つのファルブラックが刃を手に激突する。

激しく火花が散る鏝迫り合い。その中でA-Zは、自らの真意を語り始めた。

「私はやらなければならないのだ! この世界に蔓延る神という神を、この世から消し去る為に!」

「神を……消し去る……?」

「水無瀬クオン、再び我が元に下れ! そうすれば、貴様の望む世界を見せてやろう!」

「私の……望む世界……」

そして、自分の望む世界。その言葉にクオンの心が揺さぶられる。

一方その頃……。

「ラスターソードッ!」

「カオスブレード」

住民の避難が済んだ無人の只野市を舞台に、ファルソード改と魔人機テレスティアが激突する。

「ぐっ！」

「ファルソード！ ちいつ、ミサイル発射！」

パワー負けし、弾き飛ばされるファルソード。すぐさまファルガン改はミサイルを放ってテレスティアの動きを阻み、ファルソードを援護する。

「そんなもので、私は……私たちは止まる訳にはいきません」

だがその程度の攻撃では、テレスティアは止まる様子をまるで見せない。邪魔する者を切り刻むべく、フィーネはカオスブレードの刃を八木とアリサへと向ける。

「こいつ、強いぞ……！」

流石有人機というべきか、ロボット怪獣をはるかに超える力を持つ魔人機テレスティアの強さに、八木はそう呟く。

「誰にもあの人の理想の邪魔はさせない。あの人の夢見る世界の為に、私は戦う」

「お前たちの目的はなんだ！何がお前をそうさせる！」

「これほどまでの力を以て何を成そうとしているのか。剣を向け、アリサがその真意をフィーネへと問う。」

「この世界に、神を超える絶対的な支配者を創り上げる。それが黒曜旅団の到達点です」
「傲慢だな。てめえらのボスがその神より偉い奴になるってか？」

「本当は誰でもいいんですよ。それを成そうとしたのが、あの人だったというだけ」

語られた旅団の目的を、八木は傲慢だと断ずる。

だがフイーネは、どこか悟ったように告げた。

「あの人なら、この世界に真の平和を齎してくれる。ですからあの人への覚悟を……絶対
に邪魔はさせません」

あの人というのは、A—Zを名乗る男。A—Zならば世界を平和に出来ると、フイー
ネは信じていた。

故に彼女は止まらない。自身の「正しい」と思う事を為す、そのために。

富士、戦闘区域。

「私は決して神を赦さない。神などという作り物のキャラクターに媚び、縋り！あまつ
さえ殺人すら正当化する、そんな世界を私は断じて赦さないッ！」

刃と刃が、何度も何度も繰り返しぶつかり合う。

激闘の中、A—Zは自らの胸の内を吐露する。彼は神を憎んでいた。それこそ、全て

殺してしまいたいほどに。神を信じるこの世界をも、壊してしまいたいほどに。

「だから壊すつて言うのか！」

「そうだ！君ならば分かるだろう、水無瀬クオン！宗教戦争に巻き込まれ、全てを失った貴様なら！」

神に媚び縋る大人たちの道具として、その命を使い捨てられた。そんなクオンならばその憎しみも理解出来るだろうと、A—Zは問いかける。

「確かに、あなたの言う事もよくわかる……」

「ならば！」

「だけどツ！」

A—Zの言うように、彼女は神に縋る者たちによって全てを奪われた。

「もしも戦争がなくなっても……恐怖で押さえつけられた世界なんかで、人が本当に幸せになれるわけなんかはない！」

それでも、A—Zの目指す悪の恐怖に縛られた世界に、人の本当の幸せがあるなど認められない彼女は剣を振るう。

魔王となり世界を支配するという、その過ぎた野望を否定する為に。

「君は私と同じなんだよ、水無瀬クオン！テロで家族を失い、神の栄光を掲げるクズ共の尖兵として使われていく中で全てを失った！君の人生は私の生き写しだった！　だか

らファルブラックのパイロットとして、私は君を選んだのだ！」

クオンをA―Zがファルブラックに乗せた理由もまた、宗教戦争だった。

テロで幼少期に全てを失い、少年兵として戦争で使い捨てられた。その過去に自分を重ねたA―Zは、自分が神に至る為に必要なサンプルとしての、もう一人の自分としてクオンを選んだのだった。

「それならなんでまた殺そうとしたんだ！ 自分の生き写しだったクオンを！」

銃を手に、ゼダークに立ち向かうソウタが問う。

そこまで想っていたのならば、何故A―Zはクオンを使い捨てのような形で殺そうとしたのかと。

「だからだよ、少年！ 彼女は死ぬべきだ！ 私と同じ道を辿る前に！」

だがそれもまた、彼の想いの形だったのだ。彼は自らを悪だと自覚していた。

だからこそ、自らの生き写しであるクオンには悪に染まることなく、純粋な心を胸に秘めたままこの世を去って欲しいと願っていたのだ。

「魔王の細胞なんて押し付けて生き長らえさせた上に、今度は死ぬべきだった!? クオンの命は、お前のおもちじゃないんだぞ！」

「ならば戦場でボロクズのように捨てられる最期の方が幸せだったとも言えるのか！ 生きてきた足跡すら残せぬままにッ!!」

「だからって、命を弄んでいい理由にはなるはずが無い！」
「ぐおっ!？」

だがソウタは、そのやり方を否定する。

クオンの命を振り回すようなその行いを拒絶し、EXファルガンはラスターセイバーの刃でゼダークを斬りつけた。

「確かにこの世界は腐ってるかもしれない。けど、そんな世界でも私はソウタに会って、フウカやカズマやマドカにも会って……幸せの欠片を見つけた」

落下していくゼダークに、チャージをさせまいとファルブラックが追撃する。

「そんな世界を壊すべきだなんて、私は思わない」

A―Zの言うような腐った世界を、クオンは嫌という程見てきた。その身で死んだ方がまだ救いがある程の地獄を味わってきた。

それでもソウタと出会ってから、世界は決してそれだけではないのだと知った。

故に告げた否定の言葉と共に、ファルブラックはゼダークに強烈な蹴りを加え、地面へと叩きつけた。

「それでも私は止まらない！ 全ての悪が平伏《ひれふ》す程の、絶対的な悪に私はならなければならないのだ！」

土煙の舞う中、ゼダークはハルバードを支えにゆつくりと立ち上がる。

その直後、ソウタたち二人の視界にあった土煙が一瞬にして消滅した。

「っ……………」

「時間停止!? このタイミングで……………」

そしてファルブラックに、凄まじい衝撃が走り装甲が欠ける。

エネルギーが減っていない筈の状況での時間停止。推測は間違っていたのかと危惧するソウタだったが、それにしてもゼダークの様子がおかしかった。

「加速、してる……………」

「エネルギーの、暴発……………!?!」

機体は赤い光を纏い、挙動の一つ一つが三倍近くの速さまで加速している。

それは、時喰エンジンの暴走。エネルギーが充満した状態での時間停止の使用でエネルギーが溢れ暴発、収束された時の流れが機体全体へと逆流し、機体の進行時間を加速させているのだ。

もはや必殺技を乱れ撃つことも、時を止める事も出来ない。ここから先はこれまでの戦い方も通用しない、正面からの殴り合い。

互いの信念をかけた最後の激突が今、始まる。

「何が正義だ! そんなもので全てを救う事などできるものか! 世界を救うのは正義ではなく全てを支配する唯一絶対の悪の他にはない!」

「違う……！」

凄まじい速度の機動で迫るゼダークが、ハルバードを振り下ろす。あまりの速度に避け切れず、EXファルガンはその一撃を受け止めた。

A-Zは正義を否定し、悪による支配で全世界に平和を齎そうと云う。だがそれを、ソウタは自らの願いの元に否定する。

「お前は正義だ、A-Z！」

「戯言をッ！」

そしてEXファルガンはラスターセイバーを振り払うが、その速度を以てゼダークは斬撃を回避した。

クオンのような戦争で傷ついた子供たちを戦争から解放する為に、全ての悪の支配者となり世界に平和を齎す。

それを望むA-Zはソウタから見れば悪などではない。正義の味方そのものだったのだ。

「昔の私みたいな子供たちを救う為に戦ってきたあなたが、ただの悪な筈がない……！」
クオンもまた、そんな彼の言葉に頷く。傷ついた子供たちに手を差し伸べる事を一番の目的とする人間が、悪である筈がないのだから。

「だけど俺たちはその正義を否定する！俺たちは、希望を諦めたくなかないッ!!」

激しい高機動戦闘の中、ソウタは告げた。A―Zを正義と認めながら、その正義を否定する意志を。

これから先に生まれる希望を、決して諦めない為に。

「少年、名は」

戦いの中で意志をぶつけ合った、一人の少年。自分の言っていたような墮落した人間からは程遠いその姿に感化され、A―Zはその名を訊ねる。

「結城ソウタだ」

そしてソウタは誇りを持って答えた。A―Zの黒き正義を否定する、一人の小さな正義の戦士の名を。

「ならば結城ソウタ。水無瀬クオン。私の正義と貴様らの正義、どちらが正しいか……ここで決着をつけてくれよう！」

互いに認め合い、ここでゼダークはさらに加速する。

そしてEXファルガンは銃を両手で構え、当たらないビームを放ち続ける。決して闇雲にはない。自分の信じる、パートナーの力を信じて。

「捕まえた」

「水無瀬クオン……ッ！」

ビームライフルで誘導された動きを、クオンが捉えてファルブラックで抑えつけた。

「私たちの希望は閉ざさせない……!」

ゼダークがハルバードを振るい、ファルブラックへと叩きつける。

破片を撒き散らしながら、崩れ落ちていくファルブラック。

その背後には、バズーカを片手にブースターの光を灯し、急速に接近するEXファルガンの姿があつた。

「結城ソウタアアアアアアツ!!」

ゼダークの全身に、五つの光が灯る。時喰エンジンが暴走した今、ゼダークもこれが最後の一撃だ。

「A—Zウウウウウウツ!!」

EXファルガンのラスタビームのチャージが始まる。

互いの距離が詰まっていく。

エネルギーが収束され、臨界へと近付いていく。

「ラスタアアアアアア!!」

「クインデッドオオオ!!」

そして……。

「ビイイイイイイムツ!!!!」

二つの光線が、同時に解き放たれた。

「うぐっ……!!」

「その程度の力で、正義を貫く事など!」

クインデッドビームの威力に、EXファルガンが押されていく。

正義を貫くには力不足だと告げようとするA-Z。だがまだソウタは、諦めてはいなかった。

「まだだ、押し込めEXファルガン……!!」

ソウタが全力でペダルを踏み締める。

200パーセントが上限のEXファルガン出力ゲージが振り切れ、300パーセントにまで至った。

最大以上の出力のラスタービームが放たれ、バッテリーが唸りを上げ始める。

次の瞬間、突然ゼダークの背中が爆発を起こし姿勢が崩れた。

「いつけえええええええ!!!!」

その勢いでラスタービームの光はクインデッドビームを押し破り、一気にゼダークを呑み込んでいく。

「いいだろう、背負うがいい。人の道の、その行く末を……」

エネルギーの奔流の中で、A-Zは告げた。

それは責任だった。

悪による支配を否定し、無数の小さな正義の共存を願う。もしかしたら修羅の道となるかもしれない選択をした責任を、ソウタとクオンはこれから一生背負っていくのだと。

その言葉を言い残すと光は消え、ゼダークは機能を完全に停止し、崩れ落ちて地面へと膝をついたのだった。

同時にEXファルガンも、バッテリーの爆発を起こし森の中へと倒れる。

「ソウタ！ ソウタああああ！」

ファルブラックから脱出したクオンは、涙を流しながらEXファルガンの元へと駆け寄る。

もしも死んでいたらどうしようと、不安を胸に全速力で森の中を駆けて辿り着いたクオンの前で、EXファルガンのコクピットが開いた。

「大丈夫だよ、クオン」

そう言って笑いかけながら、ソウタはEXファルガンを降りてクオンの細い身体を抱き寄せる。

「よかった……。本当に……」

安堵で力が抜けて、クオンはソウタの胸板へと力なくもたれかかる。

これからは、安心してソウタたちと一緒に平穏な日々を迎える事ができる。その喜び

を嘯み締めながら、クオンは今できる限り精一杯甘えるつもりでいた。

「あれ、ゼダークが……」

だがそんな時、クオンは倒したゼダークに異変が起きている事に気付く。

「だんだんと、錆びていく……」

「暴走した時喰エンジンは時を加速させる……。その最期がきつと、あれなんだ……」

時喰エンジンの暴走は、まだ終わってはいなかった。

超魔神機ゼダーク。魔王となることを目指したその鋼の機体が、時の流れに侵食され

て錆び、朽ち果てていく。

やがてそこには木々が巻き付き、緑に包まれながら、黒き正義の機神はその最期を迎

えたのだった。

「帰ろう。みんなの所に」

ゼダークの最期を見届けたソウタとクオンは、二人で手を繋いで歩き出した。

帰りを待つ皆の元へと。

そして、これから待っている、命尽きるまで決して終わらない日常の中へと……。

同時刻、只野市。

「おい、動けるか!？」

「ファルソードはもうだめだ。隙を見て脱出する」

魔人機テレスティアとの激闘の果てに、ヒロイツクロボ二機は満身創痕の状態となっていた。

ファルソードは大破、ファルガノンも中破。もうとても戦闘継続は不可能と言える状態だろう。

「あいつ、あの状態でなんで動けるんだ……!？」

だがそれ以上に、テレスティアは限界を超えていた。

両腕は千切れ、頭部は半分に使われている。全身の装甲板は割れてフレームが露出し、これ以上の稼働は不可能にも見える。

「私は……負ける訳には……!？」

しかしそれでも、フィーネは歩き続けた。他の何でもない、自分の信じたモノの為に。

「そう、あの人が……」

「動きが止まった……?？」

だがここで、テレスティアが足を止める。

何が起きたのか。これで勝ったのか。状況を飲み込めない八木とアリサの前で、テレ

スティアのкокピットが開き、女が両手を上げて降りてきた。

「もはや戦う意味はありません。これよりそちらに投降します」

「投降、だと……?」

「これでいいんですよね、A—Z……」

突然の投降に戸惑う二人をよそに、ファイネはどこか清々しい笑みを浮かべる。

ガーディアンと黒曜旅団の戦いは、この瞬間を以て完全に幕を閉じたのだった。

そこから先は、事が当初の予想以上にスムーズに進んだ。

もしもゼダークが敗れ首領A—Zが死んだ場合、速やかに全員投降するように指示されていたらしく、基地突入前に構成員たちが一斉に投降したのだ。

構成員の一人が言った。「彼は自分が悪だと自覚していた。絶対的な悪である自分が正義に敗れた暁には、黒曜旅団は必要ない。それが彼の意志だ」と。

結果として世界は、黒曜旅団による悪の抑圧と支配を拒んだ。一人の少年と一人の少女によって、悪の抑止力よりも、いくつもの小さな正義が選ばれたのだ。

それは人類にとって、より多くの血を流す事になる道なのかもしれない。

だがそれは、少年たちだけが背負うべきものではない。有史以来、悪を悪として否定

し、定義の曖昧な正義に縋ってきた人類全てが背負うべきものなのだろう。

世界は再び回り出す。黒曜旅団と少年たちとの戦いを、昨日一昨日の事として記憶の奥底にしまい込みながら。

そして時は流れ……。

一年後。

「クオンお姉ちゃん、待てー!」

「待ったら戦いにならない……!」

「本当に人間かよ!」

ここは只野市に設営された児童養護施設。その庭の遊び場で、クオンは小さな子供たちと一緒に駆け回っていた。

「あまり本気出しちゃダメだよ、クオン」

「わかってる」

六人がかりで子供たちがクオン一人を追いかけ、捕まれば罰ゲームという一見不利極まりないルール。

だが戦場で培った戦闘技術を活かし、一般人からはかけ離れた動きで大人気なく逃げ

回るクオンに、ソウタは座っているベンチからそう声をかける。

「本気でやれよな！じやないと罰ゲーム二倍だからな！」

「そう。なら手加減しない」

だがそれを聞いた少年は本気で逃げ回るよう釘を刺し、クオンはさらに本気を出して並々ならぬ身体捌きを披露し始めた。

「本当に分かつてるのかな、あれ……」

その様子を見て、ソウタは苦笑いを浮かべながらそう漏らすのだった。

「くそっ！」

「そんな動きじゃ私は捉えられない」

クオンに触れようと手をかざす少年。だが、クオンはすかさず軽々と飛び退いて避けてみせた。

だが次の瞬間、背中にポンと何かが触れる感触が伝う。

「やった！ユイが捕まえた！」

「捕まっちゃった……」

後ろにいたのは、大人しそうなユイという少女。飛び退いた先に彼女がいた事で、クオンは見事に捕まってしまったのだ。

「お姉ちゃん、罰ゲームだよ！」

「お尻ふりふりの刑ね！みんな集まれー！」

ユイという少女は得意げに罰ゲームを宣告し、取り仕切り役の少女によつて参加していた子供たちが集められる。

「えつと……こう……？」

そんな彼女らに、クオンは背中を向けて尻を突き出し、腰を振って見せる。

「ちゃんと歌わないとダメだぞ！」

「え、歌うの……？」

「当たり前じゃん！」

思っていたよりも恥ずかしい行為に頬を赤らめるクオンだったが、さらに突きつけられた要求に困惑を隠せずにいた。

「お、おしーりふーりふーり……！」

だが子供たちの期待と頑張りを裏切るわけにもいかない。クオンは顔を真っ赤に染めて羞恥に耐えながら、喉の奥から声を絞り出し歌いっつ尻を振り始めた。

「可愛いわね、彼女」

「み、三浦さん!？」

その様子を見ていたソウタの元に、エプロンを来た女性が訪ねる。

彼女は三浦。この施設を運営する施設長である。

罰ゲームを受けるクオンを見て少しドキドキしていた中で突然声をかけられたソウタは、つい驚き声を上げてしまった。

「あなたたちが来てくれて子供たちも楽しそうだし、本当に助かっているわ」

「俺は付き添いで来てるだけですよ。頑張ってるのはクオンです」

ソウタたちが来てから助かっていると語る三浦。だがここに来て、ソウタはちよつとした手伝い以外大したことはしていない。

彼の言うように、本当に頑張っているのはクオンだ。彼女は子供たちの遊び相手になり、一緒に掃除などにも参加して、今では既に仲間として受け入れられているのだ。

「それー！」

「……痛い」

踊り終えたクオンは、今度は四つん這いになってあのユイという少女に尻を叩かれている。本当は痛くも痒くもないのだが、それでも痛がる素振りをしながら。

「過去の贖罪……。あの子も被害者でしかないのね」

何故彼女がここまで献身的に子供たちに尽くすのか。三浦はそれを話で聞いて理解していた。

「クオンが自分なりに納得して、前に進む為に必要だつて決めた事ですから。俺は応援するだけですよ」

過去に戦争で、またファルブラックに乗って、クオンはこれまで多くの命を奪ってきた。その償いをする為に、彼女はこうして子供たちと深く触れ合っているのだ。

「次はソウタ兄ちゃんも参加だからなー！」

「どうやらそういうわけにもいかないみたいね」

「ですネ」

だが見守るだけのつもりだった事も、子供たちから見れば関係ない。少年たちに連れられて、ソウタもまた遊び場へと引つ張られていくのだった。

「クオン。今の、わざと捕まったよね」

すれ違いざまに、彼はクオンに尋ねる。全員から逃げ回る鬼ごっこの中で、実はわざと捕まったのではないかと。

「あの子、一番運動ができないから。他の子に捕まらないようにしながら、ユイが捕まえやすいように動いてた……」

「流石ファルブラックのパイロット」

あの中で、彼女は参加している子供たち全員の位置を把握し、捕まらないように誘導しながら、ユイという少女に捕まるように動いていた。

三次元戦闘を求められる飛行型機体のファルブラックに乗っていたクオンにとっては造作もない話である。

というのもその少女は運動が苦手で、普段から遊びに参加できないか、できたとしても負けて罰を受ける側だった。そこでクオンは彼女を立てて、そんな彼女にも楽しんでもらおうと考えていたのだ。

「ソウタお兄ちゃん早く!」

「わかった、今行くよ」

そんな話を話していると、ソウタは早く来てくれと子供たちに急かされる。

「そろそろ学校だから。行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい」

そしてこれから、クオンは学校に行く為抜ける事になる。

外国人や何らかの事情で教育を受けられなかった者などが通う夜間学校。そこにクオンもまた通い始めていたのだ。

「ありがとね、クオンちゃん」

「こちらこそ」

施設長の三浦と挨拶を交わすと、クオンは施設の門を抜けてバス停へと向かう。

「メール来てる……」

そこでふとスマートフォンを見てみると、フウカからメールが来ていた。開くとそこには本文と、カズマとフウカの二人が写った自撮り写真が添えられている。

本文の内容は、二人揃って受験していたガーディアン傘下の大学に合格したというものの。

彼らはかつてガーディアンでGキャリアーに乗った経験を活かして、災害時のヒロイックロボの運用法などの新しい災害支援の研究、開発をする為にこの大学を選んだのだ。

もしかしたら今後、世界中の災害時に彼らの研究成果が活躍する日が来るのかもしれない。

「フウカとカズマ、よかった……」

何はともあれ二人が元気だということを改めて確認したクオンは、一安心して笑みを浮かべた。

「私も行かないと……」

そしてクオンは、一人自分の学校へと向かう。失った時間を取り戻し、学べなかった知らない事を学ぶ為に。

道を行く彼女の顔には、かつて失った筈の笑顔が確かに取り戻されていた。

世界を救う為に黒曜旅団と戦った少年少女たちは皆、新たな道を歩み始めている。

こうして、彼らの戦いは終わりを迎えた。戦いを終わらせた力であるEXファルガンとファルブラックは地下深くに封印され、もう二度と表舞台に立つことはないだろう。だが再び歩き出した今の彼らに、そんなものはもはや必要ない。

これは歴史の片隅に伝え記された、決して教科書に載る事のない、小さな英雄たちの戦いの物語である。